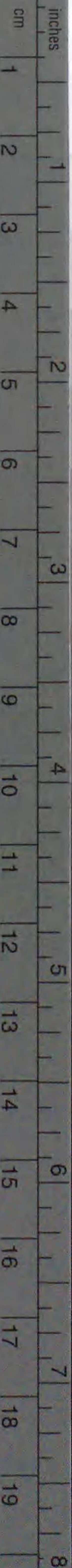


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25	26	27

210.08  
Ko5483

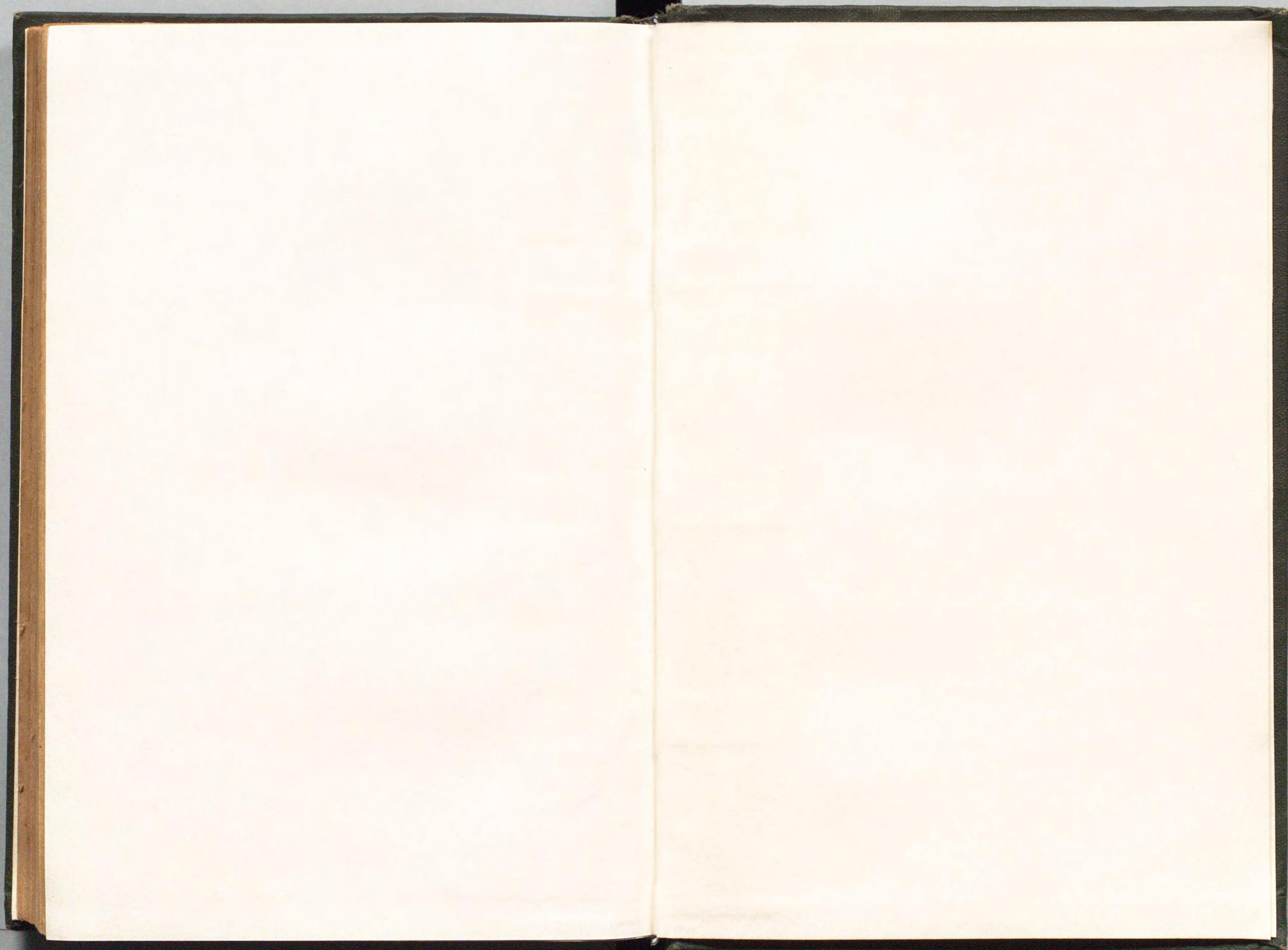


X  
複写











KITG-84



# 國史叢書

評 文學博士  
議 文學博士  
員 文學博士

萩野由之 文學士  
黑板勝美 文學士  
松本愛重 文學博士  
三宅米吉  
菊池謙二郎  
黑川真道 編

武田三代軍記 一

國史研究會藏版

(順ハロイ)



210.08  
K05483



712647

解題

武田三代軍記 廿二卷

本書は、甲斐源氏の武田信虎・同晴信(信玄)・同勝頼三代の事蹟を詳細に記したるものなり。

信虎は、新羅三郎義光より十八代、晴信は十九代、勝頼は二十代に相當れり。本書内容については、國書解題に左の通り記せり。

武田三代記 廿二卷 片島深淵

甲州武田家の系圖、濫觴、門葉等の事より、武田信虎・同晴信・同勝頼三代の事蹟を詳記したるもの、即ち信虎暴惡にして、諸名臣諫死する事より、晴信終に父を廢し自立し、一代百二十餘戰に其の武功を顯し、勝頼繼ぎ立つに及んで佞臣を愛し、終に天目山に自殺するまでの事を、詳細に記述せり云々。

解題



と記せり。以て其の大概を知るべし。要するに信虎より晴信に至りて、武田氏最も隆盛を極め、勝頼に至り、終に悲慘の滅亡を遂げたるなり。本書は、其の事蹟を記したるものなり。此の書、享保五年版を採收す。

作者片島深淵子は、名を武矩といふ。元、筑前の人なり。後浪華に住す。其の傳記を詳にせずといへども、享保時代の人なり。武矩は博覽強記、兼て兵學に達したり。著書は本書の外に、武備和訓・武藝訓・明君文武蹟・武家圖像傳・赤穂義臣傳等あり。何れも兵學及び武士道を鼓吹したるものなり。以て其の人となりを知るべし。

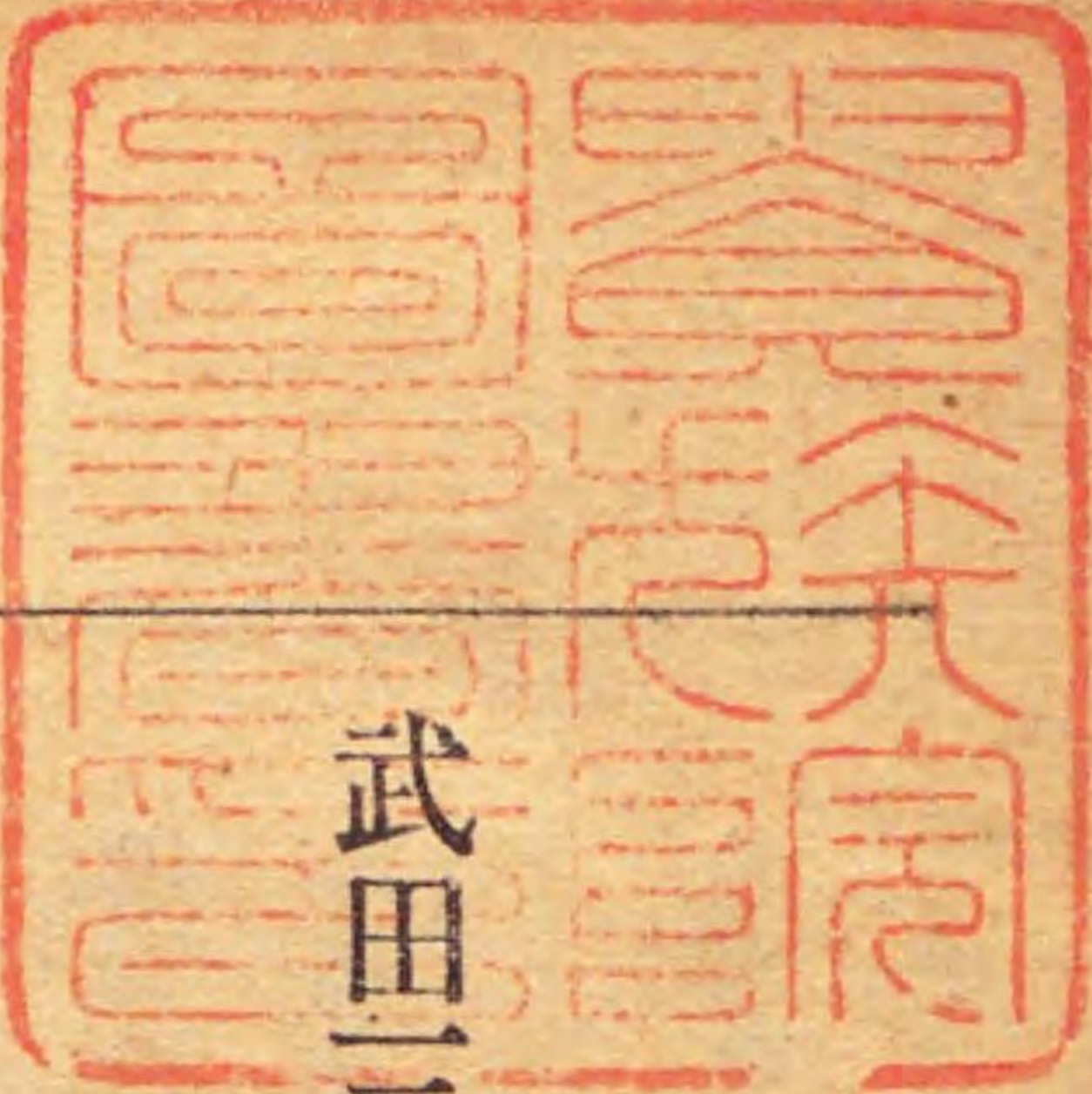
大正五年四月

黒川眞道識

例言

- 一、原本廿二卷なるも、頁數の都合に因り、本編には、十四卷迄を採收して、之を前編とし、十五卷以下は、後編として分冊收載することとせり。
- 一、原本片假名なるも、本編には悉く平假名に改めたり。
- 一、語尾を補うて、通讀の平易を計れるもの頗る多く、且つ文字の一定せざるものは、全卷を通じ、多きに從つて、一樣ならしむるに力めたり。
- 一、原本中の挿圖は、悉く之を收め、一も省略せるものなし。





武田三代軍記

目次

序……………一

武田家系圖……………二

卷之第一……………四

甲州武田家濫觴附家傳の事 武田家門葉の事 武田信虎加々美四郎と確執の事 加々美四郎夜討、小熊部合戦の事 加々美四郎籠城附原・小幡城攻の事 加々美四郎没落の事 武田・櫻井不快の事 櫻井落城の事 山縣河内守虎清諫言の事 鹽川合戦附横田備中・多田三八八度の鎗、同平賀成頼敗北の事

卷之第二……………三七

目次

一

三七



後柏原院御即位并福島上總介甲州亂入の事 飯田川原合戦附福島山形討死の事  
 諷訪大明神靈驗附勝千代殿御誕生の事 井上鐵炮を獻ずる事 信虎惡行附馬場山縣諫死 佐保原合戦の事 信虎惡行諫言に就き工藤内藤手討に逢ふ事 勝千代殿幼少の間行跡世に勝れたる事 信虎父子不和起るの事、勝千代殿元服の事 信州海野口の城軍の事 海野口落城附平賀源心最期の事  
**卷之第三** .....七  
 今井木工允貞邦禁籠の事 今井貞邦并妹小澤誅伐の事 信虎信州出馬附諷訪合戦の事 信虎家嫡廢去思召立たる事 大膳大夫晴信逆心の事 今川家來由附今井市郎駿州に密使の事 晴信父信虎を廢去の事 武田義信并今川氏眞誕生の事 小笠原長時家系并韭崎合戦の事

**卷之第四**

.....一三  
 燃場野邊山葛木合戦の事 武田晴信奢侈附板垣駿河守諫言の事 信州海尻開城附一揆蜂起、長坂左衛門尉城中出奔の事 晴信海尻後援附一揆敗北并長坂左

衛門尉勘氣を蒙る事

小荒間合戦の事

晴信軍評議の事

甲信堺瀬澤合

戦附原美濃守虎胤武勇の事

平澤合戦の事

**卷之第五**

.....一五二  
 高島小城等城軍附尾阿落城并安國寺合戦の事 諷訪大明神靈夢の事 大門峠合戦附妓女御宿の督の事 晴信山本勘介を召抱へらる事 信州尾臺落城附廣瀬曲淵等高名の事 武田諷訪兩家和睦附頼茂誅戮并普文寺合戦、諷訪祝部最期の事 長坂勘氣を免さる并諷訪頼茂の息女晴信の妾となる事

**卷之第六**

.....一八四  
 鹽尻合戦并板垣信形捨奸に乗る事 信州戸石合戦附山本晴幸妙策の事 晴信恩賞を教來石工藤以下の諸士に行はる并甘利玉千代丸が事 板垣信形笛吹峠合戦并三科廣瀬高名の事 晴信重ねて笛吹峠合戦の事 板垣饗應黒赤を分つ并眞田彈正忠幸隆計略の事 板垣信形諷訪の郡代を辭する事

**卷之第七**

.....二三三



板垣信形大物見を出す附原美濃守信胤武略の事 信州志賀落城井上田原合戦の事 村上義清、長尾家を頼む井海野平對陣同諸方勝利註進の事 晴信景虎、小縣對陣井鹽尻峠合戦の事

卷之第八

二四八

伊奈・木曾・松本等手遣附小幡孫次郎初陣血戦の事 飯富虎昌、長尾景虎を追蒐く並再び海野平對陣同上州三寺尾合戦の事 信州佐久郡合戦附僧大益小幡彌三左衛門忍監の事 今川義元の使者甲館に來る附信州法福寺合戦並景虎榊退口の事 板垣小山田急軍吟味の事 武田大膳大夫晴信薙髮の事 馬場・甘利、桔梗が原に發向並時田合戦の事 小山田・栗原死去附小山田氏由緒の事

卷之第九

二七六

板垣彌次郎信里勘氣を蒙る事 苜屋原落城附米倉丹後守初めて竹把を造る井萩原彌右衛門尉高名の事 武田太郎義信鎧着初賀儀附桔梗原合戦并深志開城の事 信玄海津城を築く井原美濃守入道勘氣を蒙る事 信玄駿河賀島に出

陣附原入道清岩働の事 賀島合戦附小幡山城入道父子武勇井原入道甲府に歸參の事 川中島對陣附馬場民部少輔景政智謀の事 信玄木曾に亂入附木曾左馬頭義昌降參の事 信玄信州發向附諸士賞罰の事

卷之第十

三〇二

上州飯尻合戦附信玄願書の事 信玄・謙信和議調はずして又對陣附謙信所々放火の事 岩井入道滅亡井井上須田誅戮、同馬場・飯富・甘利飛驒國へ亂入の事 信玄輕井澤出張井小幡尾張守信定味方に參る事 信玄信州發向、太田切へ働く附鰐嶽落城の事 信玄・謙信川中島對陣附武田家軍議の事 川中島合戦附上杉謙信武勇井戦場の圖の事 甘糟近江守川中島退口の事

卷之第十一

三三九

松山開城附上杉謙信山根の要害を攻落さるゝ事 上州法坊寺口合戦附赤石豊前守・土肥大膳亮殿の事 小柴見宮内誅戮並武田四郎勝頼伊奈郡代の事 信虎入道、信玄に密意をいひ送る附舅人狂歌の事 上州嶺・松井田・箕輪等落城附長



野滅亡並伊奈四郎勝頼武勇の事 伊奈勝頼武略附小幡尾張守信定の事

卷之第十一 ..... 三六五

武田太郎義信逆心露顯附飯富虎昌以下誅伐の事 馬場民部少輔美濃守になる

附江間・椎名降參並上州石倉砦の事 信玄、諸士の縁邊を結ばる附伊奈四郎勝頼

婚禮の事 小幡又兵衛尉旗本組に入る事 信玄、大僧正に任じ給ふ並和歌會

興行の事 武田信虎密書附上州和田の城軍並信玄、上州發向の事 武田・北條、

厩橋城攻附武田太郎義信自殺並鹽止、上杉謙信書通の事 武田太郎信勝誕生附

快川和尚の夢並織田・武田兩家婚約の事 武田・今川確執附信玄、岐阜へ進物を

送らるゝ事

卷之第十二 ..... 三九六

信玄、駿河國亂入附今川氏真敗北の事 今川氏真沒落附徳川源君駿州御出馬並

秋山伯耆守晴近の事 北條氏康後詰附武田勢、薩埵山の陣屋を破る事 馬場

美濃守信房武略の事 馬場内藤諫言附馬場・山縣夜討並信玄歸陣の事 信玄、

川鳴島出張附津浪の事 信玄關東出陣並高坂彈正忠昌信諫言の事 小山田

信茂願書附武州戸取山合戰の事

卷之第十四 ..... 四三二

武田勢所々燒働附馬場美濃守信房參陣の事 武州瀧山の城攻附甲州勢相模川

を渡す並吉良左兵衛督の事 初鹿傳右衛門尉酒匂川の先陣附香車の指物並北條

家軍議の事 相州小田原合戰附馬場美濃守信房奇計の事 相州三増合戰附

戰場の圖の事 北條方所々落城附黄八幡の指物並蒲原落城の事 薩埵山軍附

駿府・花澤等開城並繩無理之介が事

目次終



武田三代軍記

序

夫惟兵法者、治亂逆之要道、擊凶賊之祕術也。本邦兵家、古今之將士、皆講磨中華之規矩、雖用其兵略、而法意混雜、間有難爲證焉。曰若、甲源武田家之軍事、獨步于諸家、至今言武者、多以之爲法。實是末代龜鏡也。其家臣高坂彈正昌信、所記之甲陽軍鑑、專載武事之蘊奧。然而文義往々有欲議、初學之士非所輕議也。頃日、有客攜來一冊、見示余。余披而覽之、有奇正變作之妙用。陣法權略寢備矣。可謂奇書也。但惜、其編頗有脫簡。余幸弱冠時、隨從于小幡勘兵衛景憲之高弟某、挹武田之洪盡、武備之淵源。以故補其遺漏、足其殘缺、題曰武田三代軍記、終書厥端。

正德乙未初秋上浣

浪華城西隱士 片島深淵子



武田家系圖

人皇五十六代

清和天皇 文德天皇第二皇子、諱惟仁、又號「水尾帝」。

貞純親王 第六皇子、號「桃園親王」。

經基 號「六孫王」、初て賜「源姓」。

滿仲 號「多田新發意」、從四位上、左馬權頭。

賴信 從四位上、河内守、鎮守府將軍。

賴義 正四位上、鎮守府將軍、伊豫守。

義光 新羅三郎、從五位下、左衛門尉、刑部少輔、弓馬達人。

義清 武田冠者、刑部三郎、清光 號「黑源太」、逸見冠者。

光長

逸見冠者、上總介、一説に邊見、逸見の祖なり。

信義

五歳の時に父卒す。故に十二年の間、板垣陣代す。光長と信義同日に生る。光長は巳の時生る。信義は午の時生る。世俗の説によつて、信義を兄とす。

信光

武田「一説に石和」武田伊豆守、從五位下、井澤五郎大膳大夫。

信政 小五郎、伊豆守、弓の達人。

信明 治部少輔、伊豆守、幼稚の間、十年安田陣代。

時繩

六郎、伊豆守、安藝守、信宗 孫六、伊豆守、甲斐守、陸奥守、伊豆守、九州探題八幡寺殿と號す。

信武 甲斐守、陸奥守、伊豆守、九州探題八幡寺殿と號す。

信成

大膳大夫、刑部大輔。

信春 大膳大夫、幼稚の間、九年加々美陣代。

直信

四郎、彈正少弼、左馬頭、安藝守護。

信綱 伊豆守、左馬助。

信賢

大膳大夫、治部大輔、歌人、新苑政波集に入る。

信昌

三歳の時父卒す。故に十年幼稚の間、十年板垣陣代。

信繩

信重 太郎、武田中興武勇なり。幼稚の間、十年板垣陣代。信森 幼稚の間、十年安田陣代。

國信

大膳大夫、若狭を領す。若狭の武田と號す。

信政 治部少輔、伊豆守、大膳大夫。

信時

若州大守、永祿年中、公方の味方に參る。

義頼 左京大夫、法名崇喜。

元信

伊豆守、

信統 彦五郎、中國にて病死。

元隆

元繼

義信

太郎、隱謀の聞えあるに依つて自害。盲目なり。海野の名跡となる。

隆寶君

伊奈四郎、母諏訪頼茂女。依つて諏訪の名跡を繼ぐ。玉山龍公大禪定門と號す。

信盛

油川腹、仁科の名跡、仁科五郎。

女子

定山殿室。

女子

北條氏政室。

勝頼

太郎、童名竹王丸。武田の家督を繼ぐ。幼少の間、父の勝頼後見。天正十年壬午三月十一日、田野天目山に於て、勝頼父子自害。行年十六歳。春山花公大禪定門と號す。

信勝

信繁 四年、河中島合戦に死す。

信連

孫六、入道逍遙軒。

女子

今川義元室。

信豊

左馬助、童名長老、天正十年三月卒去。號「英叟知雄大禪定門」。



# 武田三代軍記 卷之第一

## 甲州武田家濫觴附家傳の事

夫れ事の相叛く者、勇と怯とに如くはなし。相近き者も、亦、勇と怯とに如くはなし。奮然として勁悍し、怯と相近き者は小勇なり。退然として温克に、怯と相近き者は大勇なり。何をか小勇といふ。小敵に勝つ者は是なり。何をか大勇といふ。大敵に勝つ者は是なり。寇敵の來る、多き事百萬といふとも、其兵を知る者、之を麾けば、枯かれを摧くだき、槁かわらを振ふるふが如し。何ぞ之を大敵とするに足らんや。爰に我朝、足利家治世の末に當つて、國家互に勇を争ひ、境を論じ、鯨の如くに呑み、蜂の如くに起りて、海内一日も靜なる事なし。就中、甲陽の武田家、謀略四海に震ひ、古今に獨歩し、正兵の奇術を窮め、其名、天下に轟く。之を稱して甲州流といふ。是れ兵家の

武田家の  
濫觴

一流にして、後代の將士、十が八九、其徒ならずといふ事なし。抑、武田家の濫觴を委しく尋ねれば、人皇五十六代、清和天皇第六の皇子桃園の貞純親王に、始めて源の姓を賜ふ。其御子鎮守府將軍經基、軍略に長じ、智勇兼備し給へるを以て、初めて武臣となり給へり。其子左馬頭滿仲、其子冷泉院判官代頼信、六箇國の受領を経て、河内守と號し、鎮守府將軍に任ぜらる。其家嫡伊豫守頼義、相續いて鎮守府將軍に任ず。後冷泉院の御宇、天喜二年、奥州安倍貞任、舍弟致任等が謀叛に依つて、陸奥に下向あつて、康平六年三月十六日、彼の朝敵等を誅伐ある。凡そ敵の斬首一萬五千餘級なり。斯くて頼義朝臣、一字の堂舎を建立し、其討捕る所の敵の片耳を納めて、耳納寺とぞ號せられける。頼義朝臣に、男子餘多ましましけり。嫡子八幡太郎義家、續いて鎮守府將軍に任じ、陸奥守となつて、内の昇殿を聽ゆさる。二男賀茂次郎義綱、三男新羅三郎義光と號す。然るに義光、母は二位の法印尊長が女なり。此時の勳功に依つて、後冷泉院、叡威の餘りに、御旗鎧を下し賜ふ。彼の冑と申すは、胴丸にして、大袖金具には、割菱の紋を附けられたり。世に之を武田菱



甲斐源氏  
武田家の  
由來

とぞ申しける。則ち義光、從五位下に敍し、刑部丞になつて、甲斐國に住せらる。是より子孫繁榮して、甲斐源氏とは申すなり。佐竹・逸見・板垣・一條・錦織・平賀・柏木・南部・下山・小笠原等の大祖なり。其子武田刑部三郎義清と號す。義清、父祖の業を受け、弓馬の道に長じ、武勇の徳、綿々たるを以て、武田と稱せらるゝ事、例少き龜鑑なり。舍弟刑部四郎盛義、是れ平賀の元祖なり。義清の子黒源太清光、其子武田太郎信義・同逸見上總介光長・同加々美次郎遠光・同安田三郎義定・同安井四郎清隆・同河内五郎長義・同田井五郎光義・同曾禰禪師坊嚴尊・同奈古藏人義行・同淺利與市義遠・同八代與三信清と號しける。是より、逸見・加々美・安田以下に分れたり。加々美次郎遠光が嫡子を、秋山太郎光朝と號す。其次信濃守長清、是れ小笠原の祖なり。舍弟三郎光行、是れ南部の元祖なり。其次四郎經光、是れ於曾氏の祖なりけり。然るに、太郎信義、右大將頼朝卿義兵の時、一族を語らひ、駿河國浮島が原に出向ひ、奇謀を以て、平家の大勢を追歸す。其大功を感賞せられて、一番に駿河國をぞ給はりける。其嫡子一條次郎忠頼、元暦元年、隱謀の聞えあつて、頼朝卿、天野藤

小笠原氏  
先祖  
南部氏先  
祖  
於曾氏先  
祖

一條の先  
祖

藝州の武  
田  
武田家の  
中興

無楯の冑

内遠景に命じて、鎌倉殿中に於て誅せらる。其次、板垣三郎兼信・同武田兵衛尉有義・同五郎信光、大膳大夫と號す。其子伊豆守信政舍弟六郎信長、これ一條の元祖なり、伊豆守信政の曾孫伊豆守信宗、甲斐・安藝の兩國を給はつて、守護職に任ず。其子伊豆守信武、尊氏卿に仕へて、武名、尤も隱なし。其子信成、父の家督を繼いで、甲州に在住す。舍弟左馬頭直信は、安藝の國を給はつて、彼の國の守護職となれり。之を稱して、藝州の武田といへり。信成三代の後胤伊豆守信重、足利に仕へて、勳功莫大なれば、公方、其忠貞を賞し、朱の采配を給はるに依つて、武勇、武田の家の中興なりと、世人普く之を感ず。信重の孫信昌は、纔か三歳にして、父信森、卒去せられしかば、十五歳に至る迄は、老臣跡部上野介、後見として大小となく執行ふ。此故に、昔、後冷泉院より賜はりし御旗、無楯の冑、皆此家に傳はりしを、信昌、十九歳の時、執權跡部上野介と、不快の事出來つて、當國石和の郷に於て戰を挑む。此時、跡部、彼の無楯の冑を着せり。然るに信昌、心中に祈念して、上野介を唯一箭に射殺し給ひける。無楯に、其跡明かに残り。斯くて凱陣の後、信昌宣ひけるは、



無楯の冑は、元祖新羅三郎義光より、當家重代の家寶なり。然るに、一矢に射通しぬる事、偏に末世になり下り、無楯の威力も衰へぬるにこそ。尤も歎かはしき事ならずや。我思ふ仔細あれば、一命を捨て、無楯の威力の有無を試んと自ら彼の冑を着し、精兵の射手を選まれけるに、武藤五郎七郎出田小十郎三枝式部とて、當國にて名を顯せる強弓なり。是等三人、前後に立ち分れて、主君信昌を射たりけるに、其矢、一筋も冑に立つ事能はず、盡く飛び歸りけるこそ、不思議の例なれ。扱は、無楯の靈威新たなり。家運彌々長久なるべしとぞ悦ばれける。其子信繩、其子を左京大夫信虎とぞ號しける。

### 武田家門葉の事

左京大夫信虎は、父信繩の家督を續ぎ給ひて、新羅三郎十八代に相當れり。先祖義光朝臣の時、冷泉院より賜はりし御旗・無楯の冑・諏訪法性の甲・義弘の太刀・左文字の刀・同短刀を始め、様々の家寶、此家に傳はれり。之を甲州の御屋形と號して、其

武田の一  
族

威を隣國に震ひ給ふ。一家には、安田・淺利・逸見・一條・南部・秋山・板垣・下山・加々美・勝沼・櫻井・小佐手・曾根・於曾・數野等の人々あり。中にも下山、其頃は穴山と號す。

武田の老  
臣

此穴山殿の息女を、信虎の室家となし給ひければ、是より國中の者共、穴山殿を重じ參らす事、日頃に十倍せり。穴山左衛門佐信行と申せしは、此御臺所の御舍弟なり。家臣には、山縣河内守虎清・馬場伊豆守虎貞・工藤下總守虎豊・内藤相模守虎資、之を四人の老臣として、原能登守友胤・小幡山城守虎盛・小山田備中守などいへる、何れも一人當千の勇士等、計ふるに違あらず。然るに信虎、武勇世に類なく、權謀

信虎、一  
族を討滅  
す

に於ては、他に異なりと雖も、飽く迄短慮にましまして、世を世とも思ひ給はず、人を人ともし給はず。一族安田・淺利・逸見・勝沼・櫻井・小佐手を始め、大方攻滅して、其所領を奪ひ、勢、遠境に震はれしかば、誰が身にか殃の來らんと、一門の人は、安き心もなかりけり。智ある老臣等は、如何なる天魔の御心に入變つて、骨肉の好を忘れ、斯く門葉を滅し給ふらん。積惡の家には、必ず餘殃ありといへり。末如何ならんと悲みて、様々諫め參らすれども、曾て許容し給はず。うたてかりし事ども



なり。

武田信虎、加々美四郎と確執の事

茲に、信州葛尾の城主村上頼平は、年來、武田家と、互に害心を挿んで、合戦絶ゆる間なし。時に武田の一族に、加々美四郎といふ人あり。彼の家人石原小六といへる者は、大剛の譽ありて、己が武勇に慢じ、人を人ともせざりけるが、或時、四郎が寵愛の小姓神田磯松といへる者と、口論をし出したり。其故は、磯松は、主君の愛童なるを以て、其寵に誇り、傍輩を輕じ、侮る事甚し。又石原は、武邊の覺を高慢して、常に主命をも、用ひざる程の者なりければ、互に威を争ひ、口論に及びけるが、小六、大剛の者なれば、磯松を唯一討に害して、忽ち其場より、逐電して甲府に來り、信虎を頼み、身を隠してぞ居たりける。信虎も、彼の石原が勇名を、兼ねて聞及び給へば、手の者になしてぞ召使はれける。此由を傳へ聞きて、加々美四郎、大に怒り、某が郎等の、不義あつて逐電したるを、當屋形の抱へ置き給ふ事、いはれな

武田信虎  
加々美四郎  
と確執

し。急ぎ此方へ給はるべし。誅罰を加へ申し度候と、再三、使者を以て、申されけれども、此信虎を頼むとて、來りたる者を、何者にもせよ、得こを出すまじけれ。重ねて申し來りなば、使者を討つて捨てんと、大に怒りて、使を歸されける。加々美、安からず思ひけれども、流石、信虎は門葉の棟梁なれば、如何ともすべき様なくして、憤を押へ居られけるに、石原、己が法令に背きたる事をばいはず、却つて、信虎に讒しけるは、加々美四郎儀は、内々、葛尾の村上頼平に、心を通じ、別心の企、様様に候と、佞臣輕薄の黨を語らひて、辯才を盡して支へける。元來、信虎、心荒き人なれば、其實否をも正さず、大に腹立し、頓て使者を以て、傳へ聞けば、累代の恩顧を忘れ、骨肉の好よしみを捨て、村上に内通し、信虎を失はんと、相巧まるゝの由、其不義、顯然として隠なし。抑、其意趣何事ぞや。悉く以て之を聞かん。若し又、不實なるに於ては、早速、甲府に來つて、誤なき所を、明白に申開かるべしとぞ、いはせられける。四郎、使者に對面し、こは屋形の仰とも覺えず候。何の遺恨あつてか、今更、敵に一味仕らん。身に取つて覺え候はず。今我、骨肉の好を翻し、故なうし



て、敵に與せんは、何ぞ勇士の道にあらんや。按ずるに、讒人、府君の側にあつて、某を申沈むるか。附きては又、石原小六、法令を犯し、傍輩を殺害し、甲府に逃げ至つて、一命を助かる。其恩の忝き餘りに、輕薄比興の心底を以て、予を讒言するか。又は某、別心に事を寄せ、加々美の家を攻滅し、一跡を横領せんとの巧ならんか。信虎、欲心強盛の大將故、一族を滅し、其門葉を絶して、其地を奪はんと、晝夜相巧まるゝ事、世人の皆知る所なり。某、心中に毛頭僞る所なければ、甲府に參つて、陳謝するに及ばず。夫れとても、事の實否を、面談に聞きたく思召さば、當城へ御越あるべし。僞なき旨を申開かん。又、最前に申す如く、我が家、斷滅せんとならば、軍勢を差向けらるゝに及ばず。腹搔切つて、所領を參らすべしと、荒らかに、返事を述べられける。使者、此由を傳説して、信虎に、斯くとぞ申しける。

### 加々美四郎夜討、小熊部合戦の事

去る程に、左京大夫信虎は、加々美四郎が返詞を聞き、大に怒つて、惡き投舞かな。

其儀ならば、一時に踏潰して、四郎が首を梟すべしと、小幡入道日淨、原大隅守兩人を以て、隊將として、三百餘騎を指向けらる。永正十六年三月下旬、加々美が城より、二里北方なる小熊部に陣を取り、明日は城に攻寄せべしとぞ議したりける。加々美四郎、之を聞き、家人を集めて、いひ含めけるは、武田勢、今宵小熊部に陣取りたると聞ゆ。一定、明日は當城に攻寄せんとぞ極むらん。敵、さまでの大勢とも聞えず。先んずる時は、人を制し、先んぜらるゝ時は、人に制せらるといへり。軍は明日と心得て、何心なく油斷して、憇ひたらん所こそ、討ちよからんぞ。假令明日、敵城を卷かずといふとも、今宵の軍、然るべからん。敵、地利を知らざるの虚一つ、行軍に疲れたる弊一つ、今夜、深更に及んで討入り、一人も残さず討取るべし。夫れ兵勝の術は、不意を撃つに如かず。味方の勢を二手に分け、一手は敵陣の左の方に廻り、村中に忍び入り、路程は軍兵に枚を啣ませて、馬は轡のならざるやうに、手拭を以て之を卷き、静まり返つて押寄せ、正兵、急に進んで、敵の篝を打消し、番人、寢ほれたらん所を、騎士を以て、蹴立て切散し、無二無三に討つて入り、戦、半ならん



小  
熊  
部  
夜  
合  
戦

時、以前に廻りし一隊は、奇兵となつて、横に當り、爰に顯はれ、彼所に突出て、鬨を作りて、千變萬化し、勝負を一戦に決すべしと、能々、術をいひ含め、相言葉を定め、兵糧をつかはせ、其夜の子の刻に城を出て、小熊部に押寄せたり。武田勢は、若し夜討や寄すらんと、篝火を燒きて待ち明す。然る所に、加々美勢、張番の軍勢を蹴立てて、鬨を作り、直に本陣に討つて懸る。武田勢、少しも騒がず、鬨を合せて馳合はす。中にも、多賀左近兵衛、真先に進んで、一番に鎧を合はする。是に續いて、曾根甚内、山脇小市、木戸將監を始め、一騎當千の兵共、鎧を提げ、突出て、爰に顯はれ、彼所に進んで、命を風塵に比して防戦ふ。多賀左近兵衛は、先登の勇士と鎧を合せ、忽ち其敵を突伏せて、猶ほ、敵中に進む所に、相木森之介と名乗つて、大太刀を打振り、切つて懸る。左近兵衛、己が持ちたる鎧を、切折られて抛捨て、腰の刀を抜合せて渡し合ふ。相木、透間をかぞへて踏込み、多賀が膝口を、したゝかに割る。痛手なれば働き得ず、營中に引退く。山脇小市は、敵一騎討取つたり。岩村助三郎は、大長刀を水車に振廻し、邊を拂つて戦ひけるが、加々美勢の物頭落合源次兵衛と引組

んで、雙方、劣らぬ勇士なれば、組敷くと雖も、又刎返し、首を搔かんとすれば、刎返され、更に勝負、見えざる所に落合ひ、力や優りけん、難なく岩村を取つて押へ、首を搔かんとする所を、助三郎が弟同じく助十郎、馳寄つて、落合が内甲に、手を入れ、引仰のけて、上なるが岩村か、下なるが助三郎かと呼ばはる。岩村、下より、上なるこそ敵よといふより、早く刎返して、落合が首を取る。斯かりける所に、左の方の村中より、加々美が軍勢、横合にどつと懸る。是に依つて、武田勢、少ししどろになる所を、隊將小幡入道日淨、采配を振つて、馬を乗廻し、旗の手を静め、守返しの場を下知し、我が馬廻りの歩卒をば、折しかせ、鎧倉を作つて、嘩と駈散し、追ひつ返しつ相戦ふ。鋒先より火焰を出し、萬卒に面を向ふ有様は、唯、百千の雷の、一度に落懸るかとあやまたる。抑、此小幡入道日淨は、元は遠州勝股の者なりけるが、信虎、十九歳の時より、甲府に來り、武田家に仕へて、數度の戦に高名を顯はし、武功名才の勇者なれば、従ふ所の兵卒、各、劣らぬ者共なり。既に横雲引分れて、黎明の頃になりけれども、互に勝負も見えざりければ、大將加々美四郎、諸



卒に命じて曰、夜も頓て明けぬべし。暗きに紛れて引取れと、頻に下知して、軍勢を纏め、引揚ぐれば、武田勢、之を見て、敵は引くぞ、討留めよと、我先にと、喰留めんとするを、殿に控へたる西久保左兵衛、取つて返して、之を防ぐ。小幡入道・原大隅・大剛の者共なれば、さのみ敵を追ふべからず。此地、先きに至つて切所あり、敵は案内を能くしれり。難所に味方を、おびき寄せ、大返にして戦はゞ、必定、味方の敗ならん。長追をすべからずと、軍勢を引揚げたり。武田家の軍令、流石、名將の徳化なれば、敵、不意を窺ふと雖も、終に勝つことを得ずして、己が居城に打納れけり。

### 加々美四郎籠城附原小幡城攻の事

斯くて、小幡入道日淨・原大隅守、敵に息を續がすなとて、其翌日、打立つて敵城に押寄せたり。寄手の軍勢、勇み進んで、城際につくとひとしく、関の聲を嘯と揚げ、一時に之を乗取らんと、喚き叫んで、堀際に押付けたり。城中にも、待ち設けたる事

なれば、同じく鯨波を合せ、精兵の手垂共、櫓狭間を押開きて、散々にこそ射出しけれ。寄手の足輕、同じく狭間を閉ぢんとすれども、強く城兵に射すくめられて、人を楯にして、其場をこたへんとするに、矢場に、十三人、射伏せられけり。されども寄手、之を用ひず、楯を一面につき竝べて、曳々聲を出して攻寄する。城中より射出す矢は、岡野を過ぐる夕立の、風に競ふが如くなれば、寄手も急に進み得ず。只、矢戦に數刻移りて、既に夕陽に及びければ、原小幡、軍勢を引揚げ、陣を取り、日々夜々に足輕を出し、矢戦計りをぞしたりける。斯くて、何<sup>い</sup>まで日を重ね、是程の小城を抜き得ずして、人口、塞ぐに所なからんと、原小幡、會評して合戦の利害をはかり、既に明日と相定めて、陣中、其用意をしたりけるに、兩將、軍勢に向つていひけるは、去ぬる頃の城攻、勿論、味方小勢なりと雖も、即日にして、城を抜く事能はず。いひ甲斐なき働とせんか。味方、手負ひ或は戦死するもの、少からずと雖も、敵、虎口を出てざれば、彼を撃捕るに及ばず。旁、是非なき次第なり。明日に於ては、有無の勝負を決せん。各の一命、兩將申預かる上は、少しも法を犯すべか



らず。唯、射るとも突くとも用ひず、鞆しころを傾けて、總軍の節制を守るべしとぞいひ含めける。斯くて、其夜も東雲の頃になりしかば、三段に備を分けて、楯めんどりばを雌羽に衝竝べ、太鼓を打つて、直ちに堀際に攻付き、埋草を以て之を埋め、組橋を渡して、一舉に城を乗取らんとす。城中には、兼ねて用意をしたりければ、大力の兵共を倭すくつて、塀裏に立て、地利に随つて、大木・大石を、抛懸けく防ぎければ、楯も鎧も忪へばこそ、將碁倒しに異らず。矢面に立ちたる究竟の兵三十餘人、同じ枕に薙伏せらる。猶ほ寄手、是にも臆せず。味方の手負・死人を踏越し、義を金石に比し、命を塵芥よりも軽くし、関の聲を揚げて、後へ一足も引退かず。手に手を取組み、鎧先を雙べて、曳々聲を揚げ、塀に熊手を打懸けて、既に攻入らんとするに、大將加々美四郎、仁義の勇士なれば、城、縷の如くなれども、膚、猶も撓まずして、勇士を勇めて曰、汝等、義を思はば、當城を枕にして、潔く討死し、骸は苔に埋むとも、名を後代に残すべし。死生、我と共にせば、必ず泉下にて其功を賞すべしと、采配を取つて馳廻れば、士卒、心を一致にして、爰を先途と防戦す。寄手も、今は攻あつ僅あつんで、少し虎

口をくつろげて、持楯の陰にさつと引き、暫く息を入れんとす。時に原小幡、下知して、漸く軍兵を引揚げたり。此時、城兵、城戸を開き、穂先を雙べて駈出し、隊むねを魚鱗に作つて、弓取る敵を、突崩さんとす。四郎、之をさつと見て、必ず長く追ふべからず。夫れ城に籠るの法は、抜かれざるを以て勝とす。十分に勝つ時は、亢龍の悔あるものぞ、節を守れと、身を揉み、馬を乗廻し下知しければ、士卒、爰に於て踏留る。斯くて、城中に引入れ、城門を差堅め、暫く忍の緒をくつろげて、士卒、息をぞ繼ぎたりける。

### 加々美四郎没落の事

然るに、加々美四郎は、武田の軍士、攻寄せざる以前に、葛尾の城主村上頼平が方に使を馳せて、さても左京大夫信虎、慾心強盛にして、一族の好よしみを忘れ、某を攻潰し、所領を奪はんが爲めに、無體に逆心の企ある由、種々に難題を揚げて、我を譴とがむ。其不儀不道の甚しき事、勝げて數へ難し。此上は、某、御幕下に屬したひ、日頃の憤を散

加々美四郎、村上頼平に援を乞ふ



頼平、後詰を諾す

ぜんと欲す。天の照臨、實あらば、武田の家、滅亡近きにあるべきか。向後、力の及ぶ所、軍忠を勵み申すべし。就きては武田勢、近日、居城を取巻くべし。存亡、此一舉に候。然れば急ぎ、御加勢を頼み存ずる所なりと、いひ送りけるに、頼平も許諾し、人質等の事迄相調へ、頼平、後援に出づべきにぞ極りける。然るに頼平、折節、病氣差發つて、彼是援兵遲滞に及ぶ。去る程に、信虎は、小幡日淨、原大隅、攻僅んだる由を聞き給ひて、甚だ怒り、加々美四郎が武略、何程の事かあるべき。察するに、城兵等、村上が後詰を頼んで、機を屈せず、防ぎ戦ふと覺えたり。其儘にして差置かば、頼平、後巻して、猶ほ味方、難儀に及ぶべし。一時に踏破つて、四郎を始め、城中の者共、一人も残さず撫切にし、不義の程を思知らせん物をとて、山縣河内守虎清、内藤相模守虎資、原能登守友胤、横田備中守、鎌田織部、多田三八以下、人數三千五百餘人を引牽し、先祖新羅三郎より、傳はりし御旗のうつし、地黒に上に朱の丸、中に朱の横筋、裾には朱にて、武田菱の紋附きたる旗を、眞先に押立てさせて攻寄せらる。城の大將、加々美四郎は、之を見て、大將信虎、自身出てたりと覺ゆるぞ。

信虎自ら城攻に向ふ

信虎奮戦

此人、極めて心荒く、片側破りの猪武者、生得の短氣に任せ、雅攻にして、一刻に揉落さんとぞ働くべし。敵あびき出すとも、我、下知をなさざるの内は、一人も討つて出づべからず。精兵の射手を選んで、唯、矢種のあらん限りは、射取るの外、あるべからずとて、塀に歩行を渡し、家々の紋附きたるかひ楯を、とりはかされ羽重に衝竝べて、矢倉狭間を一度に開き、差取り引詰め、散々に射出す。寄手、むらがり立ちたれば、疵を蒙る者、命を落す者少からず。然りと雖も、猛勇の信虎、寔に虎の威勢を振ひ、無體に下知をし給ひければ、親、討たるゝと雖も、子、之を顧みず。主君、疵を蒙れども、之を引退くるに違なくて、一向、城に攻近づく。城兵防ぎ兼ねて、弓弩の遅速、自然として怠りあれば、信虎、楯面に立ち顯はれ、大音を揚げて下知し給ふは、如何に者共、敵は數日の籠城に力疲れ、射る矢と雖も、武具の裏をかへず。幾筋なりとも、鎧に請留め、唯、透間を射すすな。鎧づきして鉢を傾けよ。一足も後へ引くべからず。我れ後よりよく見居るぞ。後難を思ひ、義を守らば、必死に虎口をくつるべからず。埋草を入れて堀を渡れ、山縣横田はなきか。城門を打破れ、



多田・鎌田はなきか。切つて入れとぞ下知せられける。斯くて、埋草を以て、片時の間に、追手の堀を埋上げたり。寄手、彌氣に乗つて、彼の埋草を渡り、大勢、塀際に攻近づく。中にも、黒絲の鎧着たる武者一騎、朱の半月の二尺餘なる前立に、紅の纒かけ、多田三八と名乗つて、今日の一番乗ぞ。後に争ふ事なかれと、城中に乗込まんとす。城兵、之を突落さんと、鎧を差延べ、内甲へ突入る。三八、無雙の勇士にて、心早き男なれば、振りはずして、鎧の柄に取附き、難なく塀を乗越し、則ち其敵を討取つたり。是に續いて、跡部勝五郎、乗込んで働きしを、相木森之介、能き敵ぞと打笑つて、押雙びて組みたりしが、相木、元より大力なれば、跡部を取つて押へ、終に首を搔落しけり。信虎、此者共が働を見給ひて、半月の前立は、多田三八と覺えたり。早は一番乗をしたるぞ。續いて二番に乗つたるは、跡部と見えたり。兩人を討たすな。續けや者共、あれこそ一人當千の働なれと、稱美し給ひければ、内藤相模守虎資・山縣河内守虎清・小幡横田・原・鎌田などを始めとして、總勢、一度に乗込んだり。さしもの城兵、今は防戦に術盡きて、一支も支へず、二の丸へ引入

れ、門を堅め、射手を揃へて防ぎけり。原大隅は、此度、討手を奉り乍ら、我が働を以て、城を取らざる事を、無念に思ひ、我が手の足輕、笥十兵衛とて、隠なき大力ありけるを招きて、何卒して、汝、此門を打破れと言附くれば、笥、心得申すといひて、あたりをきつと見れば、大きな材木の、多く積みてありける中に、其長さ二丈計りも、あるらんと覺えたるを、輕々と提げて走り寄り、關貫と思ふあたりを、曳々聲を出して突きけるに、扉くだけで、關貫折れ、雙方へ開きけり。得たり賢しと、原大隅、一番に馳入る。押續いて軍勢共、我、劣らじと込入れば、城兵等、途を失ひ、爰に群り、彼處に集り、色を變じ、機を失ひたるを、追詰め、討取つたり。城の大將加々美四郎、心は矢猛に勇むと雖も、防ぐべき様なかりければ、此上は叶はじ。我討死すべけれども、暫時、命を全うして、重ねて本意を達すべしと、本丸に火を懸け烟に紛れて落行きけり。大將、斯くの如くなれば、士卒も思ひ、に落去りぬ。武田勢は、城を攻落して、勝鬨を執行ひ、靜に首實檢あつて、城已下の政事、つどに沙汰ありて、其後、甲府に馬を入れ給ひける。



武田・櫻井不快の事

茲に、櫻井兵部少輔は、武田の門葉たりと雖も、近年、加々美四郎と、縁者の好あつて、親しく睦み交りければ、信虎、思慮を廻らされけるは、此度、加々美を攻滅しぬる事、櫻井、やはか意恨を含まではあるべからず。逆心を企てんは、必定たるべし。先づ使者を以て、心中を引見んとて、此度、加々美四郎、不義の舉動あるを以て、早速、誅を加へ畢んぬ。是れ天道、其不義を惡み給ふの所謂か。全く信虎が、私に之を亡したるにあらず。天道の政を受くるなり。就きては貴邊の儀、加々美と親み深し。さるに依つて、信虎を恨み憤り、逆心の企ある由、世以て風聞す。若し實に於ては、其結構何事ぞや。石を懐いて、淵に入るに似たるべし。但し、加々美四郎と、縁者の親あるを以て、世人、推量して虚説を吐くか、其實否を知らず。若し心中、相巧まるゝ事なきに於ては、早速、參府して誤らざるの旨を、申し開かるべしとぞ、いはせられける。兵部少輔、使者に對面して、今度、四郎滅亡の儀、己が身に不義あ

武田櫻井  
不和

つて、天誅を受くる。某、不肖なりと雖も、門葉の列に連る身の、何んぞ惡人に徒黨して、御屋形に對し、不義の弓を引かん。某、近年、加々美と類縁の親あるを以て、世人、推量して虚名を得るの所、尤も不幸といひつべし。兒童の説を以て、讒人、府君の側に在つて、我を申沈むると覺えたり。早速、伺候仕りて誤なき旨を、申上げ候はんとぞ、返事せられける。斯くて兵部少輔、甲府に赴かんと、用意ある所に、家人上原大右衛門申しけるは、此度、甲府に赴かん事、御遠慮なき所なるべし。御存の如く、信虎、人を人とも思召さず。萬づ、心に任せて、惡逆を舉動ふるまひ、大方ならぬ狂氣人故、無實の讒を信じて、既に四郎殿を攻潰され候。是のみに限り候はず。今迄の御行路を見候に、骨肉親疎の別もなく、左右に事寄せ、誅罰して其所領を奪ひ、大身にならんとの心入れと存じ候。然る時は、四郎殿の儀に就きて、其を幸に、櫻井の家をも斷滅せんとの企かと存じ候。推量の及ぶ所、斯くの如し。君、甲府に御越し候はゞ、御屋形に召寄せられ、力者共に命じ、方便たばかり討たんとの謀ならんか。尤も一大事の御事にて候ふべし。某、愚案の及ぶ所は、兎に角に、先づ今度の御越



は、御無用になされ、重ねて御尋ねあらんに於ては、虚病を構へて、事の様子を御窺ひなされ、其上にて如何様の御思案も候ふべし。能々、思召し定めらるべしとぞ申しける。兵部少輔、情々と打聞きて、汝が申す所、理に中れり。無道至極の大將なれば、如何様の謀あつて、某を失はんと巧まるゝも知らず。先づ此度は、延引せんとして、引籠りてぞ居られける。斯くて信虎は、櫻井が參府、遅々に及ぶは心得ずと、重ねて催促せらるゝ所に、仰の旨、恐入りて候故、萬事取敢へず、伺候仕らんと相催し候所に、計らず瘡病に相侵され、身心惱亂致し、心ならず遲滞仕るにて候。これ止む事を得ざる所なり。何様、本腹仕り次第、伺候致し候はんとて、使者をば歸されける。信虎、左思ひつる事よ。櫻井、隱謀を企つるに紛なし。急ぎ出馬して、踏潰さんとて、已に陣觸をぞし給ひける。

### 櫻井落城の事

去る程に、左京大夫信虎は、櫻井誅伐の爲め、馬場伊豆守虎貞・内藤相模守虎資・横田

信虎、櫻井誅伐の爲め出馬

兩軍合戦

備中守・小幡入道・荻原常陸介・原大隅守・鎌田織部・多田三八を始め、四千餘人の士卒を従へ、永正十六年八月十三日、甲府を出馬あつて、櫻井に發向し給ふ。櫻井兵部少輔は、信虎出馬の由を聞き、中途に馳向つて、雌雄を一戦に決すべしと、手の郎從等を引率し、城を出て陣を取り、其守り、嚴重にして待ちかけたり。既に武田勢、相近づかば、兩陣、互に矢一筋射違ふる程こそあれ。鎌田織部・多田三八、真先に進んで突入りたり。之を見て、死生知らずの甲府勢、人に先をせられじと、無二無三に切つて入り、互に追ひつ返しつ、火出づる程こそ戦ひけれ。櫻井方は、小勢なりと雖も、大將兵部少輔、究竟の兵なりければ、士卒を恥しめて曰、敵と雖も、互に類家の事なれば、知り知られたる中なるぞ。一命を義に代へて、今日の軍に討死せよ。前には一足も進むとも、後へとは引くべからず。唯、死ねや〜と下知して、近づく敵を、二三騎、鎧の鼻にて駈倒し、一文字に敵中に、自ら切つて入りければ、從軍、何かは猶豫ためらふべき。一同に嚏と入り亂れ、西より東へ駈靡け、北より南へ馳せ通る。互に破られず圍まれず、引組んで落つる所もあり。押へて首を取るも



あり、取らるゝもあり。何れ隙ありとも見えず戦ふ所に、武田勢、少し色めき立つて、三方に分れて引退く。櫻井勢、機に乗つて、備を亂して之を追ふ。信虎、飽迄不敵の將なれば、ちつとも騒がず、重代の旗を立居多させ、穢はし汝等、信虎、是にあり。返し合せて、討死せよ。何國へか落行くべき。返せ〜と大聲揚げて、椋の木の太木、二三本繁りたる陰に、敵勢を待懸けて、馬に輪を懸けてぞ御座しける。然る所に、馬場伊豆守、五六騎にて馳來り、引行く勢を恥しめ勇めて、下知をなせば、此時、總勢、大返しにして、難なく芝居を踏堅め、旗を揃へて散々に射る。櫻井勢は備を亂して駈來りしに、大返しに突立てられて、馬の足を立て兼ね、人を楯に取らんとす。馬場伊豆守、横田備中守、時分は能きぞ。一度に鎧を入れよと下知す。士卒、一同に穂先を揃へ、喧と喚いて突入れば、櫻井勢崩れ立ち、城中を指して引退く。寄手、愈、機に乗つて攻付け〜、堀際迄詰寄せて、一舉に城を乗取らんとす。馬場横田、深く制して、必ず勢に乗るべからず、日既に夕陽に及ぶ。旁、軍を揚げよと下知して、虎口をくつろげ陣を取る。其夜は、人馬の息を休めて、翌早朝、士卒に

櫻井落城

兵糧已下を支度させて、今日は無二無三に城を乗取るべしと、示し合せて、堀際に攻寄せ、関の聲を揚げしかども、城中には、静まり返つて、更に人音もせず。甲府勢、勇みに勇んで屏につき、我先にと乗込みたれば、城中には、早や落失せて、兵部少輔を始めとして、一人もなかりけり。信虎、齒を切り、兵部目を討取らざることを、安からねとて、夫より陣拂して、甲府に歸陣し給ひけり。

## 山縣河内守虎清諫言の事

扱も、武田左京大夫信虎、極めて心荒く座す故、一族骨肉の好もなく、我意に任せて、門葉を攻亡し、譜代忠功の郎従と雖も、少しの過ある時は、忽ち縛り、首を刎ねさせ、或は自身手討にし給ひ、之を心地よしとて悦び給ふ。さるに依つて、一家の人々を始め、譜代恩顧の郎従等も、信虎に親み參らす事なく、明日にも我が身の上に、如何なる事か出来んと、安き心もなかりけり。泰平の時すら、賞罰に私ある時は、國を治むる事難し。益ていはんや、今、戰國の時に當つて、斯かる無道の振舞し給ひて



は、目の下あたりに、家を滅し國を失ひ給はん事、遠かるべからずと、諸人歎き合へり。斯かりければ、或時、山縣河内守虎清、信虎の御前に參り、謹んで申しけるは、扱も加々美四郎殿、御敵となられ候事、退いて愚按を廻し候に、皆これ、讒臣、君の側にあつて、申沈め候と推量仕りて候。加々美隱謀の企は、曾て之なき虚言にて候ひける由、委く承り候。加々美と櫻井、縁者の好淺からざるを以て、櫻井氏も同じく逆意を挿むるの由にて、兩人、已に滅亡に及ばれ候。是皆、奸曲の邪臣等、風聞せしめたるか。元來、兒女の説より出て、曾て證なき所なり。其實否をも正されず。誅伐の爲め一戦に及び、是非なき成行、尤も悔しき所なり。御一家の廣きことを、御家の繁昌とも申すべけれ。骨肉の好を思召し忘れられ、御一家を斷滅なされ、累代の郎從等を、少しの罪科に依つて、死罪に行はれ、御手討などにし給ふ事、慈愛の御心なき故なり。君視<sub>レ</sub>臣如<sub>二</sub>土芥<sub>一</sub>、則臣、視<sub>レ</sub>君如<sub>二</sub>寇讐<sub>一</sub>とこそ承り候へ。今日本國中、縷の如くに分れ、蜂の如くに起り、國々に割據し、所々に椅拵して、一日も戰の止む隙なし。村上・小笠原・平賀等の大敵、目の前にあつて、味方の虚分を計り、時節を窺ふの

最中にて候。内、和せざる時は、敵、外より窺ふ事、古今珍しからず。然るに、御門葉の人々を、敵になされ、譜代の郎從等を、動もして刑罰に行ひ給はんは、敵の種を植ゑて、味方の根を枯すと、いふ者にては候はずや。仁義を以て士を懷け、罰を以て軽くし、賞を以て重くする時は、諸人親まずといふ事なし。其徳、四方に隱なき時は、勇士等、招かざるに馳集り、御恩を蒙らん事を望むべし。さあらんに於ては、御馬を向けらるゝ所、皆味方に歸服して、戰はずして御勝利あるの道、全く備るべし。行々は、東國・北國をも、御手に入れ給はん事、疑あるべからず。御家、繁榮座してこそ、御先祖への孝行ともなり、新羅三郎殿より以來、十八代の御名をも擧げらるべけれ。生得、御短慮に荒々しく座すを、御心に誠もなく、思召すまゝに、擧動はせ給ひなば、御當家の滅亡、近きに候ふべし。兎に角に、御短慮を止めらるゝ様にと、且つは諫め、且つはなだめ、涙を流して憚る所なくぞ申しける。信虎、不興の顔色にて、倩々と聞き居給ひけるが、暫時あつて、山縣が申す所、一理なきにあらず。扱又、加々美・櫻井等は、皆共に隱謀疑なし。何ぞ累代の恩を捨て、一族の端に連



りながら、信虎を傾けんと企つるの條、其罪輕からず。故に我、惡を責めて罰を加ふる所なり。其根を強くせずんば、争てか、枝葉繁らんや。汝重ねて、いふ事なかれとて、帳内に入り給ひければ、山縣も是非なく、眉を擡めて出てにけり。

鹽川合戰 附 横田備中・多田三八八度の鎗

同平賀成頼敗北の事

國に諫臣なき時は、其國必ず亡ぶ。家に諫むる子なき時は、其家必ず敗るといへり。山縣、忠臣の道を守つて、諫むといへども、信虎、曾て許容し給はざれば、亡國の端ならんと、皆人恐れ悲みけり。然る所に、武田家の調はざる所を窺ひ知つて、平賀成頼、四千五百の勢を率し、若御子を打越して、駒井迄押寄せたり。此平賀成頼は、武田家と、年來雌雄を争ひしが、今、此弊つひえに乗つて、甲府を押し倒さんとす。之を註進する事、只、櫛の齒を引くが如し。諸人皆、山縣が申しつる事は、爰なるものを、哀れ、武田殿には、野狐の一心に入變りぬるか。身の程をも知らぬ、狂氣人かなとぞ私語

平賀成頼  
武田信虎  
を攻む

鹽川合戰

きける。信虎は、些も驚く氣色もし給はず。何條、平賀が打つて出でたりとも、何程の事かあるべき。信虎が鋒に懸けて、生首を切離して除けんものをとて、先づ軍勢を集められ、自身、馬をぞ出されける。相從ふ者共には、馬場伊豆守虎貞、板垣駿河守信形、土藤下總守虎豊、荻原常陸介、跡部尾張守、原大隅守、横田備中守、小幡入道、安間三右衛門尉、多田三八を始めとして、其勢三千餘、甲府筋を押し出して、鹽川を前に當て、陣を取る。兩陣、互に相近づき、雙方機權を廻しけるは、鹽川を越してや戰はん。又渡さずや勝負を決せんと、白眼合ひてぞ控へける。暫時、見合ひ居る程こそあれ。早雄の甲府勢、鹽川を一同に颯と打濟して、敵陣に押懸り、一聲鬨を作り、矢一筋、射違ふると等しく、横田備中・多田三八、一番に鎧を入る。是に劣らじと、總勢、鎧を提げ、馳合す。兩陣、互に入亂れて、或は組んで勝負をするもあり、刺違へて共に死するもあり。塵烟尺を掠め、馬蹄地を轟かして、一時計り相戦ふ。然りと雖も、雌雄、未だ決せず。斯かければ、敵味方の陣將、互に人數を引揚げ、暫く息を休め、又相懸りに懸つて攻戦ふ。此度も亦、多田・横田、一番に鎧を入



る。備中は、敵二騎突倒し、中間に首を取らせ、猶も深く進んだり。多田も、敵二騎討取つて、横田に續いて敵中へ入る。渠等が働に、平賀少し辟易して、馬を立直さんとする所を、信虎、采配を振立て、敵は色めくぞ、懸れや〜と下知し給へば、跡部尾張守・安間三右衛門、直驀になつて、馬を馳入るれば、諸勢、一度に撞と懸つて、井の字に乘切り、巴の字に駈亂れて、萬卒に面を向ふ。猶も勝負は決せずして、東西に引分れ、一息ついでには駈合せ、離れては又合して、雙方、互に刃を削れば、敢て死するを顧みず、都合八度の駈合にて、前代例なき戦なり。多田・横田の兩雄は、八度ながら一番に鑣を入れて、能き首共を討取つて、四つの鞆にく〜りつけ、静々と引退く形勢、偏に鬼神の如くなり。爰に白畑助之丞といふ者は、信虎の逞兵二百二十人勝り出し、其中より七十五人選び、七十五人の中より、又卅三人選び出し、身を離さず、召仕はれける其一人なるが、今日の軍に、させる働もなく、何卒と心懸けて、深く敵中に働き入り、神命を限りに戦うたり。信濃勢の中に、飯室右京亮といふ者、椎形の甲に、柏の葉の前立物打つたるを着て、白き練絹に、不動明王を畫きた

る指物、駿の馬の太く逞きに打乗つて、采配を持つて馳廻りける。白畑、之を吃と見て、天晴敵やと悦んで、鑣引きをばめ突いて懸る。左京も、太刀を抜合せて、暫し戦ふとぞ見えしが、右京、痛手を蒙つて、馬より逆様に、どうと落つる。白畑、馳寄せて乗つ懸り、終に右京を討捕りけり。則ち其首に、采配を添へて退かんとするを、平賀勢、之を見て、白畑を中に取込めて、散々にこそ舉動ひけれ。斯かりければ、助之丞、忽ちに討たれぬべく見ゆる所に、横田備中守、之を見付けて、附卒に下知し、白畑、難戦して必死に谷れり。あれ馳寄せて、白畑を救へといふより早く、十四五人、喚いて鎗を入れけるにぞ、敵勢、四方に離散しける。助之丞、痛手を負ひければ、中間の肩に懸つて、後陣を指して引退く。横田なかりせば、危き白畑が命なり。斯くて戦半なるに、板垣信形・馬場虎貞兩將が備を一つになし、葦崎の北、穴観音の後へ押廻し、香象の波を踏んで、大海を濟る勢を見せ、敵陣の横を突抜かんと、急の太鼓を打つて、頻に進めば、信州勢、大に色めき、四度路になりて、後陣より崩れ立ち、故多川を西へ敗北す。甲州勢、逃ぐるを追うて、此所に追詰め、彼所に馳寄せ討取



りける。味方、今日の軍に打勝つて、勝鬨を執行ひ、甲府に馬を打入れらる。馬場板垣・多田・横田・白畑等に感狀を與へ、加恩を授けられ、其器を愛し給ひける。

武田三代軍記 卷之第一終

武田三代軍記 卷之第二

後柏原院御即位并福島上總介甲州亂入の事

後土御門院崩御

後柏原院踐祚

人皇一百四代の聖主後土御門院、去ぬる明應九年九月廿八日、御歳五十九歳にして、黒戸に於て、崩御ありしかば、泉涌寺に葬り奉り、法諱を正等觀と號し奉る。同じき十月廿五日、皇子勝仁親王、踐祚ましまし、百五代の寶位を續がせ給ふ。後柏原院と申し奉る。御母は准三后朝子、蒼玉門院とぞ申しける。寛正五甲申年十月二十日、降誕ましまし、文明十二年十月三日、親王の宣下を蒙らせ給ひ、同じき二十日、前の左大臣の小河の亭にて、元服あり。明應二年正月六日、三品に敍し給ひけり。然るに明應十年、改元あつて元龜と號す。斯くて今年、大永元年に至る迄、已に廿一年に及べども、御即位の禮を行はれず。去ぬる應仁の大亂より以來、天下

後柏原院御即位并福島上總介甲州亂入の事

三



今川義元  
の老臣甲斐  
に亂入す

日も穩ならず。日本六十餘州に、兵革の止む隙なく、公武、共に衰微して、此大禮延引しけるとぞ聞えし。時に、三條内大臣實隆入道堯空道遙院殿と號す、大に之を歎き給ひけるが、此入道殿の計らひにて、本願寺顯如上人より、御即位料を調進ありて、大禮事故なく、遂に行はせ給ひける。是に依つて、顯如上人に、永代二品親王の綸旨をなし下されけり。然る所に、同じき三月廿五日、將軍源義植、京都を出奔あつて、淡州に赴かせ給ふ。京都は足利一家の人々、細川・畠山已下、互に寇を含み、恨を結んで、戰、絶ゆる間なく、國々には處々に割據し、彼を討ち此を攻めて、晝夜、靜かなる事なければ、如何に成行くべき世の中ぞと、諸人悲み合ひにけり。茲に、今川駿河守義元の老臣、遠江の國高天神の城主福島上總介といふ者あり。己が威勢の強きに誇り、主君義元をも侮り恥しめ、一身の計略を以て、甲州武田を攻滅し、我物にせんと思案して、叔父山形淡路守を先陣とし、嫡子常陸介と共に、駿河・遠江二箇國の勢、一萬五千餘騎を引率し、下山筋を押來つて、甲州に攻入りけり。其頃、左京大夫信虎、一族郎從に親しからず。萬づ心にまかせて、悪行、日々に超過しければ、諸

人、大に疎み果て、一門の人々を始め、累代恩顧の郎從と雖も、悉く身構をなし、己々が居所に引籠り、世の有様を淡うかふ。斯かる時節なれば、誰か出でて、支へんとするものなく、信虎、安からず思ひ給へども、參り集る勢なければ、さしもの信虎、如何はせんと、仰天してぞ御座しける。然れども、福島が勢、已に先陣、山形淡路守は、十日市場まで押寄せ、本陣を龍路に居ゑて、近日、甲府に押寄せると聞えければ、小勢なりとも討つて出で、骸を戦場の苔にさらすべしとて、信虎を始め、相從ふ人々には、穴山左衛門大夫信行・板垣駿河守信形・工藤下總守虎豊・馬場伊豆守虎貞・山縣河内守虎清・内藤相模守虎資・荻原常陸介昌勝・原能登守友胤・嫡子美濃守虎胤・同名大隅守・小幡入道日淨・嫡子山城守虎盛・甘利備前守・横田備中守・飯富兵部少輔虎昌・跡部尾張守・安間三右衛門尉・鎌田織部正・白畑助之丞・野村・多田已下、纔に二千餘人、千塚邊に打出て、飯田川を前に當て、對陣、數日に及びけり。遠州勢は、多勢なりと雖も、案内を知らぬ敵地といひ、殊に武田の陣法、他家に勝れければ、卒爾に備を動かさず。日々、足輕を出し迫合せて、矢軍に日をを送りける。斯くて、いつ果つ

福島、武  
田合戦

後柏原院御即位并福島上總介甲州亂入の事



荻原昌勝  
の奇謀

べき事ならずと、戦を始め、毎日、雌雄を争ひしかば、既に武田家、滅亡に至りぬと、甲府の民百姓等、周章て騒ぐこと斜ならず。茲に、荻原常陸介昌勝は、信虎の軍術の師範として、智勇兼備へたれば、此度の軍、常の如くにしては、中々味方の勝利あるべからず。如何はせんと、肺肝を碎き思慮せしが、古へ、伊勢の國にての漁夫が物語を、思出し、相圖の據旗こぼたといふものを作り、大將信虎と密談し、甲府の町人、其外、國中の百姓等に觸をなし、女童までも駆催し、御館の後、長禪寺山、或は和田山などに取續け、旗を差上げ、夜は篝火を燒續け、後詰の大軍、近づく體をば見せたりける。荻野、奇妙の謀をなし、作勢伏兵等の備を、旗の割符を以て彩り、飯田川を打越して、敵陣に押懸り、関を噓と作る程こそあれ。一騎當千の兵共、我も我もと鎗を入る。福島が勢も、爰を先途と相戦ふ。太公が鳥雲の陣、唐の李衛公が奇正の術、互に知つたる道なれば、陽に開き陰に閉ぢ、弓手を撃ち馬手を遮り、唯一時に勝負を決せんと、雙方、一足も引かず相戦ふ。然りと雖も、甲府勢、必死になつて戦へば、寄手少し四度路になりて、兩方へ別れて引退く。大將福島、大に怒つ

福島上總  
介敗走

て、武田勢、何程の事かあるべき。我が旗本を押出して、一戦に討散らさんと、采配を振つて、頻に備を進め、常陸介が手に突懸つて、相戦ふと雖も、樊噲陳平をも、欺く荻原なれば、敢て備を亂さず、士卒を勇めて馳廻れば、寄手、大勢なりと雖も、昌勝が一時の謀に陥つて、諸卒の心、大に變じ、臆病神に誘はれて、一致の心、碎けしかば、福島が軍、敗走して本の陣所に引退く。武田勢も、疲れぬれば、相引にして陣を取る。斯くて荻原昌勝、敵の心を察し、味方の軍士を勇めて、彼に勝つべき事の大意を知らしめ、問者を遣し、和睦の儀をぞ謀りける。さしも大剛の福島、荻原が謀略に氣を許して、和睦、調ふべきにぞ定めける。其上、人質の事迄沙汰せしめ、頓て遠州に、歸陣すべしとぞ聞えける。福島が軍勢、大に悦び、いつしか鬪戦の心を緩くして、自然と怠の氣を顯しける。昌勝、信虎の御前に參り、今は思ふ儘に、福島を方便たばかり候。早々、快よく一戦を遂げられ、一人も残さず、御討取あるべしといへば、信虎、大に悦び給ひ、汝は、古の韓信、張良が謀にも、劣るべからず。其上、此度、不思議の瑞相ある事、八幡菩薩、諏訪大明神も、未だ當家を捨て給はずと覺えた



り。急に懸つて討取れやと、陣中を觸渡して、已に用意をぞし給ひける。

### 飯田川原合戦附福島・山形討死の事

斯くて、武田の軍勢共、未だ横雲も引分れざるに、飯田川原に取懸つて、急に旗の手を進め、関の聲をぞ揚げたりける。寄手は、思ひ寄らざる事なれば、あわて騒ぐ事、斜ならず。定めて大勢ならんと、途に迷ひて、駈合はんとする者なかりけり。爰に、味方の陣より、白畑助之丞、一番鎧と名乗つて、真先に進んで鎧を入る。福島が先陣、山形淡路守、剛の者なれば、介副の鎧を追取つて肩に懸け、馬引寄せ打乗り、敵は、此間の和睦の約を變改して、味方を方便たばかり討たんと、巧みたる穢さよ。續けや者共とて、自ら鎧を追取つて突出でしかば、士卒、争てか猶豫すべき。皆、得道具を提げ、攻合はす。然りと雖も、遠州勢、大に不意を討たれて、其列、五伍を失ひしかば、戦ふに術なくして、龍路を指して、後陣の勢になだれかゝる。山形、大に怒つて、蓬きたなし者共、爰を引いて、何國へか落行くべき。敵は少勢なるぞ。返合せて備

飯田川原  
合戦

福島勢敗  
北

を立てよ。骸を苔に埋めて、美名を後世に残せと、身を揉み下知を加へければ、流石の勇士、百騎計り、一度に嘩と返合せ、引組んで落つる所もあり。差違へて共に泉下に赴くもあり。分捕高名、様々なり。されども、一陣破れて、後、殘黨全からざるの謂なれば、終に福島が總軍、敗北に及ぶ。山形も戦ひ疲れ、矢疵少々蒙りければ、今は、とても叶ふべき事にあらずと、駒の頭を立直し、引退かんとして、鎧に立つ矢を折懸け、馬に鎧を當てける所に、小幡山城守、之を見て、鞭鎧を合せて蒐來り、先陣の大將、山形殿と見るは僻目か。穢くも敵に、後を見する武者振の見苦しきよ。返して勝負をし給へ。雙方、不足なき敵ならんぞ。小幡山城守なりと伺りければ、元來、剛なる淡路守、莞爾と笑つて引返すを、山形が着たる鍔かぶとの鉢を、微塵になれと、丁と打つ。討たれて太刀を抜合せ、切拂はんとする所を、續け様に二打三打、したゝかに打ちければ、山形大力に鍔を打据られ、目暗れ心腦亂して、鞍の前輪に、手を懸けて差俯き居る所を、小幡、馬を馳竝べて引組み、どうと落ち、頓て上に乘懸り、山形が首を搔落す。之を見て、郎従ども十四五騎、取つて返し、小幡



を中に取籠みて、既に危く見えける所に、虎盛が郎徒、主を討たせじと、大勢馳來つて、敵を追散らし、味方の陣に引退く。斯かりければ、先陣悉く敗北して、右往左往に亂るゝを、武田勢、大に競ひ懸り、勝鬨を作りかけ、他の陣には、目を懸けず、大將福島が陣に討つて懸る。上總介、此由を見て、敵は少勢なるどとて、備を鶴翼に連ねて、中に取籠めんとするを、甲府勢、又魚鱗に備へて、敵の中を割通る。信虎、大剛の猛將なれば、眞先に進んで、下知し給へば、士卒、義を金石に比し、命を塵芥よりも輕じ、短兵急に進んで、堅さを摧き、強さを破つて捫合ひければ、福島、一騎當千と頼みける三田崎・奈良川・土肥・熊井・佐田・神原の一黨を始め、宗徒の者共、許多討たれければ、上總介、怒れる眼に血を注いで、いひ甲斐なき者共の舉動かな。汝等、國を出てしより、再び生きて歸らんと思ひけるか。爰を逃れて、誰にか又面を向ふべき。骸は龍門原上の土に埋むといふとも、譽を後天に擧ぐべしとは、思はざるやと、鞍笠になりて、鬮り勇むれば、大將に義を進められて、引返し討死するもあり。聞かぬふりして、退くもあり。已に寄手、大崩になりて敗走すれども、福島

は一足も退かじと、思ひ込んだる事なれば、氣色、眼の色に顯はれて、殘黨二十騎計り、前後左右に従へ、暫く控へ居る所に、飯富兵部少輔虎昌・原美濃守虎胤、之を見て、旗一旒、押立てさせ、二三十騎、眞丸控へたるこそ、大將福島よ。遁すな。一人も殘さず討捕れと、瞳と喚いて切つて懸る。上總介を始め、盛返したる殘黨、一つに引堅まつて、何れも馬の鼻を雙べ、福島が矢面に蒐塞つて、必死になりて攻戦ふ。原美濃守虎胤は、鬼美濃と呼ばれたる大剛の勇士なれば、大半月の前立打つたる鎧を着、黒き馬の太く逞きに、鏡鞍、置いて乗りけるが、福島を目に懸けて相近づく。上總も、同じく尋常に馬を乗寄せて、あはや太刀届きになると見えしが、美濃守、三尺餘の刀を、抜き打に丁と打つ。福島、同じく拔合せて、しと、受け、馬に雙方、輪を駈けて暫く戦ふとぞ見えし。然りと雖も、互に逸物の馬共にて、自由に勝負、心に任せずとぞ見えにける。良ありて美濃守、馬をつと馳寄せて、上總が左の太股、草摺の透間を、鋒先はづれに、健したにこそ切込みけれ。福島、鎧を踏兼ねて、馬手に百ぞうと落ちたりけるを、原、下立ちて乗懸り、首を搔かんとせしかども、上總、元來大剛の者に



福島上總  
介討たる

て、差添を抜きてあげざまに、虎胤が鎧の透間を突かんとす。虎胤、其手を取つて、己が膝の下に、しかと敷き、些とも働かせず、首、搔落し立上る。従兵、何れも猛勇の者なれば、斯程の亂軍なりければ、主人の戦を助くるに及ばず、暗々と討たれしかば、何れも死狂に戦ひて、一人も残さず討たれにけり。斯かりければ、總軍、一同に敗北して、思ひくゝに引退くを、追懸けくゝ生捕分捕、一人として、味方の兵印を得ずといふ事なく、切捨てたる骸は、累々として屠所の如く、紅波、漲り流れて楯を浮べ、淺ましかりし分野なり。去る程に、左京大夫信虎は、萩原が奇術を以て、一戦に勝利を得、勝鬨を執行はせ、心靜に首實檢ましゝて、大に喜び居給ひけるに、甲府の御館より、飛脚到來して、若君御誕生まします由、迫々に註進すれば、信虎、悦に喜を重ね給ひ、勇みわたつて、甲府に凱陣ましましけり。

信虎凱旋

諏訪大明神靈驗附勝千代殿御誕生の事

此度、福島上總介、甲州に亂入せしかば、六十餘日が間、對陣に及びけるに、不思議

諏訪大明  
神の示現

の事共も多かりけり。其對陣の初め、立烏帽子に、白張の裝束着たる男一人、是は諏訪大明神の御使なり。今般の合戦は、武田の若君の勝利なりとぞ。甲府の町中を觸廻つて、通りけるが、其後、何處に行きたるといふ事を知る者なし。諸人驚き、こは不思議の珍事かな。扱は諏訪大明神の應護し給ふにやと、大に頼もしくぞ思ひける。其後又程經て、何處ともなく、又例の男、拳しらふに白彪の鷹を居ゑ來り、忝くも諏訪大明神の御鷹なりと、町中を觸れて、行方知れずなりぬ。是に依つて、諸人、愈々頼もしく、有難くぞ思ひける。然る所に、萩原常陸介昌勝が謀にて、大敵を一戦に討滅し給ふに、其時刻に、若君、誕生ありけるこそ不思議なれ。信虎、凱陣ましまして、若君を御覽なされ、喜び給ふ事斜ならず。吾聞く、古は喜ぶ事あれば、則ち以て物に名付く。忘れざる事を示すなり。周公は、禾を得て以て、其書に名け、漢武は、鼎を得て、以て其年に名付け、叔孫は敵に勝つて、以て其子こに名付くといへり。今般、福島を討滅したる、其同刻に生れたればとて、御名をば、勝千代丸殿とぞ附け給ひける。後に大膳大夫晴信入道、法性院大僧正祝山信玄と申しけるは、此勝千代

武田勝千  
代誕生



殿の御事なり。殊更、信虎、今年纔に、廿八歳にして、儲け給へる世繼なれば、悦び給ふも理なり。斯くて、都より敕使立つて、信虎を從五位上左衛門尉に、なし下されしかば、信虎、恐悦甚しく、敕使を種々饗應、善盡し美盡せり。敕使も、大悦斜ならず、歸洛に赴き給ひけり。

### 井上鐵炮を獻ずる事

京都には、將軍義植、淡路に没落ましまし、後は細川右京大夫高國が計らひにて、故法住院義澄征夷大將軍の御子義晴朝臣、播州におはせしを、呼び迎へ奉り、足利十二代の公方と仰ぎ奉れば、則ち征夷大將軍の宣下あり。高國、管領となりて、威勢日頃に百倍せり。斯くて、大永六年四月七日、後柏原院、御年六十三にして、崩御ありしかば、武家よりの計らひとして、第一皇子知仁親王、同じき廿九日、踐祚あつて、萬乗の寶位にぞなり給ふ。御母は、准三后藤子儀、同三司教秀卿の女なり。此君を、後奈良院と申し奉る。然るに今年、西國の牢人井上新左衛門尉といふ者、甲府に來つて、

後柏原院  
崩御

後奈良院  
踐祚

様々と所縁を求め、信虎へ奉公に出てけるが、鐵炮を持ち下つて、信虎に獻上す。諸士に仰せて、之を試み給ひけるに、其音、雷霆の如く、當る事速かなれば、是れ戰に用ひて、尤も最上の兵器なりとて、大に喜び給ひける。甲州に鐵炮出来る事、此時より始まれり。是よりして、東國・北國にも始まりしとかや。

### 信虎惡行附馬場山縣諫死

去る程に、左衛門尉信虎朝臣、今川家の老臣福島上總介を、討取り給ひしより、其威彌、盛になり、其勇に誇り、益々惡行、心の儘にぞ舉動れける。吾れ累代甲州の大守として、威を遠境に震ひ、萬事、心に任せずといふ事なし。然れども、未だ懷胎したる女の腹の中、見度く思ふ事の、今に心に任せぬとて、夫より孕みたる女を、尋ね出させ、當月懷胎の女よりして、二月三月乃至十月迄の、女の腹を切裂きて、男子・女子の境を見分け、又は十月迄の其間、月々の形勢を、見定め給ふに、既に十三人迄、其腹を切裂き、殺されけるは目も當てられぬ分野にて、皆人、大に恐れけり。長臣



馬場伊豆守虎貞・山縣河内守虎清は、信虎の惡虐を見るに忍びず、大に歎き悲み、兩人心を合せ、五十七箇條の書付を以て、主君信虎を諫め參らするに、少しも其言を用ひ給はず。結句引籠つて、馬場・山縣に對面し給はず。兩人、如何ともすべき様なくして、密に評議しけるは、諫むべきを見て、諫めざるは、臣たるの道にあらず。よしや御意に違ひて、死罪に行はるゝとも、伍子胥が昔の忠貞を慕ひ、是非とも諫め奉らんと、二人、心を睨と合せ、或日の早朝に出仕し、刀士・阿筑とて、二人の局を以て申しけるは、一揆の奴原、起つて當國山梨邊迄亂入し、民屋を侵し掠むる由、今朝告げ來り候。急ぎ御出馬あつて、御退治あるべき由を申す。信虎、之を寔と心得、大に驚き給ひ、急ぎ兩人を寢所に召され、右の次第を御聞きある。其時、馬場・山縣、御側近く參り、畏つて、さん候。一揆の起りたると申すは、僞にて候。我々兩人、臣たる者の道を守り、此間、數箇條を書きて、諫め奉れども、曾て一事も御許容なく、剩へ、夫よりして御目見をも許されず。今は何として、申上ぐべき便りだに候はず。左ありとて、打捨て置きなば、恐れながら、當家の滅亡、近きにあるべく候。惡名を

馬場・山縣死を以て信虎を諫む

永く末代に、殘させ給ふべし。心ある者は、何んぞ此事を歎かざらん。されば諸人、深淵に臨んで、薄氷を履む思をなすと雖も、君の御怒あらん事を恐れ、己が身を顧みて、一言の諫を、申上ぐる者も候はず。今、戰國の最中にして、村上・平賀・小笠原等の大敵、信州に充滿し、味方の虛を窺ふ時節なり。我々の諫言を、御許容なくんば、必定、御家を亡さん事、目の邊りに候はんと、憚る所なく申しければ、信虎、顔色變り給ひて、二人の者を、碯と白眼み、我れ汝等に諫められて、國を治めんか。其上、我を侮つて、僞を以て、予を方便る事こそ安からねと、御重代の左文字の刀を抜はづし、直ちに山縣を一打に切つて捨てられける。虎貞、少しも騒がず、畏つて候ひけるを、馬場、之を見たるやと宣ひ、にがり切つて立ち給ふ。伊豆守承り諫め争うて、死を給ふは、臣たる者の道にして、又君たる者の道にあらず、古今、例多く候。身を顧る心底にて、何ぞ諫を申さん。俱に比干が刑を給はつて、快く相果て候はんと、いふも終てぬに、肩先よりずんと切つてぞ離されける。是より諸人、怖れをののき、諫言を申す者なければ、彌、惡行をぞ舉動はれける。



佐保原合戦の事

今川義元  
信虎の婿  
となる

斯くて、左衛門尉信虎、武威、盛なる上に、駿州大守、今川治部大輔義元を婿に取りて、彌、威勢を振ひ給ひけり。其由來を悉く尋ぬるに、去ぬる應仁三年、伊勢新九郎氏茂といふ者、牢浪の身となりて、駿河に下り、今川家の高恩を蒙り、次第に立身し、相州小田原に在城し、兩上杉を敵に受け、合戦の止む間なく、氏茂、稱號を改めて北條と號し、入道して早雲庵宗瑞とぞ申しける。去ぬる永正十六年八月十五日、豆州葦山の城にて、終に卒去せられければ、嫡子新九郎氏綱、父の遺跡を守つて、威光を關八州に輝し、今川家の重恩を受けながら、駿河國に亂入し、富士川の北、悉く北條家の手に入りけり。然る所に、享祿四年、北條氏綱、六千餘騎を引率し、甲州を攻取らんと、駿州足高山の裾を、東へ押出し、佐保原に陣を取る。信虎、之を聞き給ひ、何條、浪人新九郎、今川家の情にて、大名となり、伊豆相模を討從へたりし。其子氏綱が分際にて、甲州へ手を指さんと、するこそ優しけれ。氏綱が勇武、恐るゝ

北條氏綱  
駿河に亂  
入す

信虎、北  
條氏綱と  
佐保原に  
對陣

佐保原合  
戦

に足らず。さあらば、出向ひて蹴散らせとて、已に出陣と聞えける。相従ふ人々には、穴山伊豆守信行、板垣駿河守信形、逸見一條、於曾の人々を始めとして、工藤下總守虎豊、内藤相模守虎資、飯富兵部少輔虎昌、跡部尾張守、原美濃守、小幡入道、教來石民部少輔、小山田備中守以下、四千餘人を引率し、駿州佐保原に討出てらる。先陣は板垣信形、奉つて馳向ふ。北條の先手は、松田左衛門佐なり。斯くて、雙方、備を設け、列を正しうして、懸らず退かず、互に機を窺ふ所に、板垣、いらつて松田が備に押懸り、矢一筋、射違ふる程こそあれ。兩方、一度に驅つて鎧を合せ、入亂れて攻戦ふ兩方、互に猛勇の將といひ、敵、魚鱗に連ねて、突破らんとすれば、味方、鶴翼に解いて引包み、入違へ揉合うて、暫く白刃を削ると雖も、一手の戦にして、總軍の勝負にあらざれば、士卒も甚だ戦疲れ、兩方に引分れて、正兵、已に息を休む。二陣の穴山、飯富は、大道寺が陣へ押懸けて、十文字に駈破り、巴の字に廻つて突立つれば、大道寺、大に辟易して、既に敗走に及ぶと見えしかば、大將氏綱、身を揉み、大道寺を討たすなど、いひもあへず、旗本の備を押出し、鞆しころを傾けて切つて懸る。信虎



も、旗本を以て、相懸りにかけられたり。今は兩方の諸手、一つになりて、敵味方一萬餘騎、入亂れ駈違ひ、関の聲矢叫の音、天地を響し、坤軸も砕けつべくぞ覺えける。爰に、教來子民郡少輔景政は、生年十八歳、今日、初陣にてありけるが、相模勢の武者大將神谷兵庫助友忠と組んで、上を下へと争ひけるが、難なく兵庫を組伏せて、首搔切つて、采配指物を添へて分捕し、我が從者に渡して、馬引寄せ打乗り、又、敵中に駈入りて、能き武者二騎に近づき、手もなく馬より切つて落し、二つの首を、我が乗つたる馬の取付に付けて引退く。安間三右衛門も、敵二騎、討取つて駈出たり。斯くて戰、半なるに、内藤相模守・原美濃守、敵陣の横に、無二無三に突懸りければ、伊豆・相模の軍勢等、此奇術に列を失ひて、しどろになりて敗走す。松田・大道寺等の剛兵共、足を立て兼ねて、漸、殿を備へて、折々返合せ引退く。氏綱の旗本勢、大に散亂して引きければ、氏綱、既に危き場を逃れて、這々の體にて引入らる。此競を以て、北條の手に入られたる富士川の北、悉く信虎の御手に従ひける。此形勢なりければ、興國寺の城主青沼飛驒守、人より先に降參しければ、信虎、大に喜び

北條氏綱  
の敗軍

給ひ、飛驒守が嫡子與十郎を以て、足輕大將小幡日淨が、婿にすべしとぞ、仰付けられける。斯く信虎の威勢、日々に盛になりければ、今川家より懇望ありて、息女を義元の室家にぞなされける。此時、信虎、息女の假粧領として、北條と戦うて、切取り給ふ彼の駿州富士川の北、悉く今川殿へぞ渡されける。北條入道早雲は、元、今川の重恩を蒙り立身し、氏綱に至つては、猶ほ武威を振ふ。然るに、彼の富士川の北も、氏綱、出でて切取ると雖も、程なく信虎に取られ、再び今川の手に渡されける。天道自然なりとて、皆人いひ合へり。

### 信虎惡行諫言に就き工藤・内藤手討に逢ふ事

左衛門尉信虎は、惡行尙も超過して、信州岩田村の律宗の寺二箇寺、敵に内通の様子ありとて、忽ち焼拂ひ給ふに、寺僧六十餘人、悉く焼殺されけるこそ、哀れに覺えけれ。長臣内藤相模守虎資、之を歎き、不義惡行の品々を集めて、言葉を盡し諫めしかば、信虎、何とも言を宣はず、例の左文字の御刀を以て、拔打に討つて捨て給



ふ。工藤下總守、間を隔て、之を見付け、押止め參らせんと、走り來るを、信虎、振返り、屹と見給ひ、己も内藤に一味して、我に不禮をせんとするかと、彼の血刀を打振つて、一打にと進み給へば、工藤驚き、其席を退かんとするに、何とかしたりけん、椽の闕に躓いて、屏風を倒す如くに、百と伏すを、續けて二太刀打ち給へば、工藤も空しく死にける。武田累代の四臣といはれし馬場・山縣・工藤・内藤四人を始めとして、文武兼備の勇士等を、卅七人迄、手づから切殺し給ひければ、諸人、大に疎み果てたるも、理にぞ聞えける。今諸國干戈止む時なく、恰も戰國の七雄の如きの折なれば、互に隣境を侵して、我が手に從へん事を、日夜に工夫するの時節なるに、智謀の忠臣等を、片端より、心の儘に切殺し給ふ事、偏に武田の家の、滅ぶべき前表なりとて、悲まぬ者はなかりけり。

### 勝千代殿幼少の間行跡世に勝れたる事

勝千代九殿、幼少の行跡、兒童の舉動に勝れて、皆人、舌を振ふ事多かりし。其中、一

つ二つを擧げていへらく、八歳よりして、關山派の長禪寺へ、手習學問の爲に登山あり。一字を學んで、十字を知り、自然に虎爪龍牙の筆勢を備へ、尋常ならずを見え給ひける。或時、師の坊、一卷の書を取り出し、是は玄惠法師の作り置かれし庭訓往來と申す書なり。讀習ひ給ふべしとありければ、二三日の間に、早や其理に通達御座して、是はさのみ、武將の要とすべき物と覺えず。何にても、軍略に達すべき書を教導し給へとあれば、師の坊、大に驚いて、扱々、梅檀は二葉より香しとかや。流石、信虎君の若君にて御座すと、大に感じ、さらばとて、七書を出して、讀ましめ給へば、是こそ予が望む所に候とて、晝夜を分かず、勤學あれば、實に螢雪の功積みて、其理に悉く徹底し給ひぬ。夫より小僧に打交り、參禪參學し給ふにも、活達頓機、衆に超え、凡智にあらず見えにける。斯くて、月往き日來つて、勝千代殿、十二歳の秋の末、或夕暮に、御手水の爲めに、廣縁に立出でられしに、日頃に立置かせ給ふ木馬のありけるが、忽ち身震して、御名を呼びかくる。聞えぬ體にもてなして、餘り不思議さに、暫く其所にイみ給ふ。時に彼の木馬、又曰。如何に勝千代、軍術と



劔術、何れが是なりや。劔術・軍術、共に是なり。これ劔術の妙なりとて、抜打に丁と切り給へば、手答へして、縁より下へ百と落つる。其後、御小姓の今井市郎を呼び給ひて、廣縁の下に何事かある。見て參れと仰せらる。畏つて火を持ち、之を見るに、大きな狸の、血に染みて伏したり。扱又、十三歳になり給ふ春、野に出て遊び給ふに、四十餘の男、草にひれ臥して、物を窺ふ體に見えける。御小姓を以て、問はせられけるに、夕雲雀を取らん爲め、今朝より此野に罷あるといふ。勝千代殿、之を聞き給ひ、蟹は甲に合せて穴を穿つといふ。誠なるかな。然らば某、取つて見せんと宣ひて、少し高き所に登り、麥畑、或は芝の生茂りたる中へ、雲雀の下立つ所を見定め、大勢、手を分け、下知をなして、取らせ給ふにより、十巢二十巢程づゝ取り給ふ。又或時、信虎、人々を御伴ひありて、居物を遊しける。信虎、自ら切り給ひて、次郎に切れと仰せらる。畏つて次郎殿、手際よく切落し給ふ。其後、勝千代殿に仰付けらる。深く辭し給ふ氣色なれども、信虎の仰せらる儀なれば、止む事を得給はず、立寄り顔色變つて青くなり、手震ひ御座しけるに、果して切損じ

られける。信虎、大に怒り給ひて、次郎殿の手を引き、奥に入り給ふ。勝千代殿、其時、色直り、打笑つて御快げに相見えし有様、尋常の者共、嘲り笑ひしも理なり。萩原常陸介、之を見て、此人、大丈夫の器にして、大に智勇の二葉なりと感じて、其後、甘利備前守・板垣駿河守に語りて、其より密に、勝千代殿を深仰せし事、甚だなりしとかや。

### 信虎父子不和起るの事

勝千代殿御父子の間、不和になり給ふ起おこを尋ぬるに、晴信、十三歳になり給ふ時、信虎の祕藏の名馬、鬼鹿毛と聞えしを、所望し給ひける。抑、此馬と申すは、其長八寸八分にして、一度、鞭を當つる時は十丈の堀をも越えつべく、穆王の八匹の駒も、斯くやと思ふ計りなり。然るに勝千代殿、漸く十三歳になり給ひしかば、使を以て、父信虎へ、彼の鬼鹿毛を給るべしとぞ望まれける。信虎、元來の狂氣人に變りて、氣に合はざる體には、見え給へども、さのみ怒り給はず。勝千代は、未だ當年



十三歳と覺えたり。鬼鹿毛などの荒駒を、一若年の身には似合ふべからず。來年は十四歳なれば、元服をさすべし。其時、當家重代の御旗・無楯の鎧・義弘の太刀・左文字の刀・同短刀、悉く譲り與ふべしとぞ、返事し給ひける。勝千代殿、重ねて押返し、使を以て、當家重代の重寶共、悉く譲り下さるべき由、忝く奉存候。然れども、愚案に存ずる所は、御旗・無楯は、曩祖新羅三郎殿より、相傳の家寶なり。其外、太刀・刀等、皆以て、當家重代の物なれば、御家督を下されん時こそ、頂戴仕るべけれ。來年、首服を加へ侍ふとても、部屋住の體にては、争てか給はり候ふべき。彼の鬼鹿毛は、勝千代、唯今より乗習ひ候て、一兩年の間に、何方にもあれ、御馬を出されんには、某、若年には候へども、御後備を快く踏まへ申さんと存じてこそ、彼の馬を所望仕るに候。然るに、右の御返事共、更に心得申さずと、押返してぞ所望し給ひける。其時、信虎、大に怒り給ひ、眼をいらしげ、荒らかなる聲にて、宣ひけるは、汝等、よく聞け。家督を譲らんも、譲るまじきも、信虎が心中にあれば、誰か之を知らん。累代の家寶を譲り與へんといふに、夫を不足に存ぜんに於ては、弟の次第を、信虎

が總領となして、家督を渠に繼がせ、親の下知に従はざる奴を、追出して除けんものをとて、備前兼光の三尺三寸ありけるを、抜はづし、使の者を追懸け給ひければ、主殿を指して逃延び、危き命を助かりけり。さて、勝千代殿と、御中、不和にならせ給ひて、使の者を切り給ふ由を風聞して、甲府の町人等、是は大方の事にはあらず。事の基なりとて、騒動する事、斜ならず。されども、春巴和尚とて、曹洞宗の知識にて、信虎、歸依淺からざりければ、此和尚、色々詞を盡し、御中直し給ひければ、何の恙もなかりけり。夫より互に御心、解け給はず。動もすれば、勝千代殿に、辛き目を見せ給ふ。さるに依つて、郎從共も、皆悉く、舍弟次郎御曹子を、重じ參らせて、勝千代殿を侮りければ、次第に威勢、薄くなりて、後には勝千代殿は、ありてなきが如くなり。勝千代殿、此氣色を見付給ひて、至つて聰明なる人なれば、如何なる深き志や在しけん。小山田備中守と密談し給ひて、虚病を構へて、出仕を止め、密に御屋形を忍び出て、五六日ありて、歸り給ふ事などありけれども、之を知る人なかりけり。扱こそ、此時より御志ありけるとは、後にぞ思ひ當りける。十三歳や十四



歳にての御思慮、寔に恐しき事共なり。其後よりは、一向、虚氣たる風情にもてなし、馬より落ちては、背に土塵を附け、或は泥にまみれながら、父の御前に出て、御側にて物など書き給ふ時は、態と悪しく書き、川に入り水を泳ぎ給ふとても、深き所に至つて、水に溺れ、助けよと呼ばはりては、郎從等に取上げられ、又は大木・大石などを引かせ給ふにも、二郎殿に負けて、不首尾なる様にもてなし、御前の立舉動たちふるせうどう或時は、躓きて轉び、又は何の用もなきに、周章て騒ぎ、萬事につけて、武田の總領には、立ち給ふまじきなりと、何れも私語さけり。

### 勝千代殿元服の事

去る程に、天文五年三月、吉日良辰を選ばれ、今川義元の取持にて、勝千代殿、元服の儀式あり。此時、京都の將軍は、足利十三代の公方、大納言右大將源義晴卿にてましませしが、上野中務大輔清信を以て、甲州に差下され、將軍家、御諱の字を給はつて、武田太郎晴信とぞ名乗り給ひける。然る所に、主上後奈良院、敕使として、轉

晴信と名乗る

法輪三條左大將公頼卿、甲州に下向あり。晴信を、大膳大夫兼信濃守に任せらる。公頼卿の息女を以て、晴信に嫁すべき由の敕説にて、同じき七月、御輿入ありければ、猶ほ賑々しくぞなりにける。されども、信虎はさのみ悦び給ふ氣色もなく、唯、舍弟の次郎殿をのみ、寵愛あつて、國家を治むべき、其器に中れる晴信を、愛し給はざることを方見うたてけれ。

### 信州海野口の城軍の事

去る程に、信虎、信州海野口の城を、攻めらるべしとて發向あり。嫡子大膳大夫晴信、次男次郎信繁、穴山伊豆守信行、板垣駿河守信形、原能登守友胤、同美濃守虎胤、甘利備前守・加藤駿河守・跡部尾張守・飯富兵部少輔・教來・石民部、是等を宗徒の士大將にて、其勢、八千餘人を引率し、同じき十一月廿一日、甲府を御立あつて、海野口の城に攻寄せらる。城中には、平賀入道源心、勇猛の大將にて、力、七十人に對す。元來、武略通達の者なれば、持口々々差堅めて、射手を揃へて待懸けたり。甲府勢も

信虎、海野口の城を攻む



遠卷して、次第に攻口請取り、金鼓旌旗の節を違へず、嚴重の備を作りて、巻詰め、楯の羽を亂さず押寄せて、足輕を以てあやどり、駿兵を進めて、一時に乗破らんと、喚ぎ叫んで攻めたりける。城中、矢狭間を一度に開き、射手を揃へて、爰を破られじとぞ、防ぎ戦ひける。城中の女童迄、強く働きて、石瓦を以て、近づく敵を打倒し、霰の如くに礫を打懸ければ、寄手、多く是に僵んで、見えける所を、城門を開き、究竟の騎馬、嘩と一度に突出て駈立てければ、味方の軍勢、四度路になりて、色めき立ち、攻口を退かんとする所を、板垣・飯富・教來石等、楯面に馬を乗出で、頻に兵士を勇め、一足も退かねば、又、旗の手前に傾き、其場を争ひ、過半、城中に追込めけり。斯くて、戦終てざるに、板垣信形、御前に參り申しけるは、軍士等、命を捨て、手痛く攻寄せ、相戦ひ候と雖も、此軍の様體、中々、近日にして、落城仕らんとも覺えず。寒中、大に疲れ果て候はん條、今日は、先づ軍勢を揚げられ、然るべからんかと申しければ、信虎も、其理に伏せられ、汝、武略を以て人數を揚げよ。大事の場なるぞと仰せける。信形、畏つて敵味方、戦疲れたる中へ馬を乗入れ、味方を引揚げ

ける形勢、只、猿猴の梢を傳ふに異ならず。難なく備を立堅め、列を作つて、若し敵、慕はゞ防がんと、其守を備へし故、敵、敢て慕ふに及ばざりければ、向陣を取つて控へけるに、連日、大雪降積つて、人馬の足、自由ならざるにより、彌、戦ふべき方便なくて、日を暮す事、三十餘日に及びけり。斯くてあるべき事ならねば、十二月廿六日、信虎の御前に、穴山・板垣・甘利・加藤・教來石・跡部・荻原、以下の者共を集め、様様の軍議あり。時に、甘利・荻原兩人進み出でて、扱も、此間の大雪、例年に勝れ降り續いて、馬の足、自由ならず。殊に平賀源心法師といへる大剛の者楯籠り、城兵合せて三千餘人と承り候。尤も、當家の軍勢は八千餘人、急に我攻に遊ばされ候はゞ、落城仕るべく覺え候へども、其は味方大勢討たれて、勝利あつて益なき儀にして、大に味方の負なり。其上年内も、早や寸陰に及んで候へば、一先づ、甲府へ御歸陣あつて、來春、重ねて攻寄せられ候へかすと申上ぐる。信虎、此旨を聞召して、各の了簡理に當ると雖も、信虎、若年より卷きたる城を解きて、軍を廻せし例なし。若し又、敵に喰留められて、難儀に及ばゞ、悔ゆとも其甲斐あるべからず。此上は無二



無三に取懸けて、勝負を一戦の中に決せんと宣ふを、甘利・荻原、押返して、君の御軍旅の練れたる事、城兵、手竝を存じ候へば、雪は深し。附慕ふ事、百に一つもあるべからず。早々、當表を御引取然るべしと、衆口一同しければ、信虎も、澁々、此儀に従ひ給ふ。明朝未明に引取らんと、定めらるゝ處に、晴信、進み出で給ひて、明朝の後殿を、私に仰付けられ候へかすと、願ひ給ふ。信虎、聞き給ひて、大に笑ひて曰、武田の家の名折を申す者かな。甘利・荻原を始め、功者共が、敵の慕ふまじきといふを聞きて、後殿を望むこそ可笑しけれ。縦ひ信虎が殿をせよと、申付くとも、弟の次郎に、仰付けられ候へかしななどと申してこそ、當家の總領ともいふべけれ。次郎は中々、斯様の殿をば、望むまじきものと、大に怒つて鬮り給ふ。されども晴信、其に少しも恥ぢ給はず、頻に望み給ひければ、此上は是非に及ばず。左あらば、後殿を致すべしと、晴信に仰付けられ、明曉陣拂とぞ、定め給ひける。

### 海野口落城附平賀源心最期の事

信虎歸陣

明くれば、天文五年十二月廿七日、未だ拂曉に、武田左衛門尉信虎、軍勢を引率し、海野口を御立あつて、甲州に歸陣し給ひけり。嫡子大膳大夫晴信は、後殿を請取り給ひ、其勢、僅か三百餘人にて、東道三十里程、跡に残りて備へ給ふ。廿六日の夜宵に、晴信、我が軍勢に下知し給ふは、士卒、武具を着し、馬に物を能く飼ひ、鞍を置きて待明すべし。飯をも一人に、三人前計りの用意をせよ。極寒の時分なれば、打立つ期には、上戸・下戸に寄らず、酒を些<sup>ちと</sup>呑み過し候べし。五更に及ばず、打立つべきぞと、自身、觸れ廻り給ひける。士卒等、之を聞いて、晴信の深き謀をも辨へず。御父の誹り給ふも理かな。今、寒氣膚を犯し、大雪、誠に山の如くに積る時節に、何とて敵の慕はんや。大に敵を恐れ給ふ大將かなとて、片端に寄り合ひ私語さける。既に其夜も寅の刻、時分こそよけれ。すは打立てとて、甲府の方へは押し給はて、引返し海野口の城へ押懸けて、無二無三に攻寄せ給ふ。城中には、敵、引取ると聞いて、大に悦び、附慕ふ事は思ひも寄らず、虎口々々をくつろげて、此程の軍勞を休息し、春の營をもせんと、皆々、武具を解き去つて、一盃の酔を進め、沈眠する事、唯無人情な

晴信海野口城を攻む



り。源心法師は、兼ねて聞ゆる智勇の猛將なりけるが、籠城に疲れけるか。又は運や盡きたりけん。晴信の衝を、夢にも知らず。愚昧一孤の軍卒と酔を同じうし、枕を傾ける、折節、鬨の聲聞えければ、介副の鎧を、漸々肩にかけ、追捕太刀にて駈出でたり。其外の従兵等、大に騒ぎ立つて、少々打出で、防ぎ戦ふと雖も、寄手は之を事ともせず、屏際に着くとひとしく、乗込み、我劣らじと切つて入る。城兵は、寄手の是程に、少勢にあるべきとは、思ひも寄らず、大將信虎、總軍を以て乗り給ふと心得て、敵は一萬餘もあらん。如何に猛く思ふとも、何としてか持忪ふべき。命ありてこそ、後、幸も待つべけれど、妻子を引連れて、我先にと逃ぐる程に、岸より押落されて、谷に陥り死する者、其數を知らず。源心法師は、黒絲緘の鎧に、四尺三寸の大太刀を、眞向に差挿し、日頃は音にも聞くらん。今こそ近づきて能く見置け。平賀の源心法師が、死狂しにぐるひをするどとて、群る敵を、弓手に相付け、馬手に請けて、或は甲の眞向、綿嚙のはづれ、切立て、あたりを拂つて戦ひけり。寄手、若干切落され、敢て羽向ふ兵なく、四方に颯と引分れ、暫く息を休めんとす。源心、少し小高き所に上りて、大太刀を杖につき、己が額に柄を當て、眼を塞ぎ立ちたりけり。暫くあれば、又、寄手、四方より群り來り、源心は手を負ひたるが、斯かる勇士は、立づくみになりて死する事、古より例あり。痛手負うて死したるか。我れ首を取らんと争ふ所に、源心、眼を見開き、戦ひ疲れて休息するを、推參なり。汝等も、此法師が首を取るべきかと、彼の太刀を取直し、又、大勢の中へ切つて入れば、寄手、四方に散亂る。兎角に打物の業に叶ふまじと、射手を揃へて、散々に射たりければ、源心、猛しと雖も、其身、金石にあらざれば、數箇所痛手に弱る所を、大勢、走り寄つて、終に源心を討取りけり。去る程に、晴信は何の苦戦もし給はず。海野口の城を攻落し、源心法師を討取り、則ち太刀鎧迄相添へて、跡部を以て、しかくの由、披露あるに、信虎、仰せけるは、晴信が敵城を乗取りたるは、働あるに似たれども、城に残り留つて、使者を以てこそ申すべきに、打捨て來るは、臆病の舉動なりとて、此度の初陣の功を賞し給はず。以の外、御機嫌悪くて、父子の對面にだに及ばれず。彌、不和の基となりて、苦々しくぞ聞えし。斯くて、初陣の御譽なれば、彼の源心法師を、石の

信虎、晴  
初陣の  
功を賞  
せず



地藏に刻み、大門峠に立ち置かせ給ふ。又、源心が最期に帶したる四尺三寸の大太刀は、常に御弓の番所に、源心が太刀とて置かれたり。扱も大勇猛の信虎、攻落し得給はず、卷き解し給ふ城を、晴信、未だ十六歳、僅に三百餘人を以て、暫時に乘取られし事、皆、天の時を考へ、備の有無、彼我の虚實を察し、必勝の道理を知り給ひて、一舉に勝利を得給ふ。これ凡慮の及ぶ所にあらず。老後如何なる名將にかなり給はんと、皆人、感稱せずといふ事なし。

武田三代軍記 卷之第二 終

武田三代軍記 卷之第三

今井木工允貞邦禁籠の事

去る程に、甲陽の源府君左衛門尉信虎は、勇武、萬人に超倫を離れ、類に絶えて、剛強の猛將なれば、向ふ所には敵を靡け、攻むる時には忽ち城を陥れ、強きを破り、堅きを碎き給ふ事、さながら竹を破るが如し。去る鹽川合戦に、平賀成瀬に、戦ひ勝ち、敵を討つ事數を知らず。是より平賀も滅亡し、又其外、信州に更科の村上義清、深志ふかしの小笠原右馬助長時、伊奈の諏訪頼茂等、何れも大身といひ、勇將なりしが、信虎の鋒先ほこさきに當り難く、千度萬度戦ふと雖も、甲州勢、一度も敗北の名を聞かず。是に依つて、村上、諏訪、小笠原の人々、何卒一つの計略を設け、本望を達せんと、晝夜、心を碎き、時節を窺ひ、折を待つて居たりければ、武田家譜代思願の者共も、



信虎猿を  
愛す

暫く泰平の思をなし、累年の軍勢を休めけり。然る所に、うたてしき事こそ出来たりけれ。信虎、平生猿を愛し、御膝元を去らずして召置かれける。其名を白山と號なづけ給ふ。信虎、常に居給ふ所を、竹の間と號し、四方に竹を畫かせられてありける。常々仰せけるは、虎は百獸の長にして、一切の獸類、其威に恐れ伏すといへり。茲を以て、我れ信虎と號し、武家の長となりて、權威を振はんと欲す。唐の虎は、竹の林に住むといへりとして、竹の間を以て、常の御座の間となし給へり。竹の間に續きて、牧の間あり。其東南の間を、鷹の間と號して、様々の鷹を畫けり。信虎、常々の荒き御行跡を、彼の猿、見習ひて、御座の間より、脇差を抜いて、次の間につるゝと走り出でけるに、折節、誰も知らざりけるに、今井木工允貞邦、鷹の間の當番にて、只一人、差うつぶきて居たりけるに、彼の白山、後より來りて、貞邦が右の肩先を一刀切付くる。頃は、天文六年六月十一日、暑氣甚しき時分なる故、今井、帷子の單を着したれば、忽ち手負ひて、背は朱にぞ染みにける。白山、此血の出づるに驚きて、泣き叫んで伏倒る。今井、大に怒つて、畜生目に疵を付けらるゝ事こそ、安からねと

て、只一討に、白山を討殺す。其音に驚き、鎌田織部・小山田彦太郎・安間三右衛門尉等立出づる。木工允、右の次第を語り、某、數ならぬ者なりと雖も、若年より所所の戰に於て、一度も不覺の名を取らず。今、此白山が爲めに、薄手を負ひぬる事こそ口惜しけれ。あの畜類に追はれて、後疵を負ひたりなど、世人の笑種となり、後指をさしれん事の無念さよと、涙を流して怒りける。信虎、此事を聞き給ひ、猿、元より畜生なり。何ぞ分別あらんや。手を負ひたるは、貞邦が不運なり。然るに、吾が祕藏する白山を切殺しけるこそ、信虎に向つて、太刀を振りたるに同じと、大に憤り給ひて、貞邦を召禁められ、其家を追捕せらる。貞邦が一子彌四郎、今年十五歳なりけるが、之を恨みて、身近き下人、一人召連れて逐電す。母方の親類なればとて、信州更科に立退いて、布下權左衛門尉を頼みければ、布下、彼の彌四郎を勞り置き、主人、葛尾の村上義清に、緯の始終を申しければ、義清悦び、去る者の子なり。召抱へらるべしとて、彌四郎に秩祿を與へ、姓名を改められ、布下彌四郎とぞ號せられける。



### 今井貞邦并妹、小澤誅伐の事

斯くて、左衛門尉信虎は、今井木工允を召禁め、所帯を沒收し給ひけるが、其子彌四郎、逐電して行方の知れざりければ、武田家領分の間は、木の葉を返して、尋ね出すべしと仰せけるに、信州に逃げ行きたる由、聞えければ、扱は敵國に至りぬるや。此上は力なし。父木工允は、縛り首を刎ぬべしとぞ、仰出されける。其時、長臣あまなし甘利備前守、信虎の御前に出で、今井木工允が儀、御祕藏の猿を切害仕候段、上を恐れざるの科、尤も輕からず。然りと雖も、何程の御寵愛も候へ。相手はこれ畜生にては候はずや。又今井は、數度の軍に、身命を捨て、武功を抽んでたる甲斐々々しき者にて候。申上ぐるは、恐多く候へども、是等の忠臣を、纒の科を以て、縛り首を刎ねられん事、然るべしとは存じ候はず。其故は、罰、法に過ぐる時は、諸人親まらず候。當家の忠臣勇士等、君の刑罰を恐れて、他國へ退きなば、今、戰國の最中、隣國の剛敵等、當國に討入らんに、誰か君の御用に立ち、忠戰を勵み申すべき。斯様の時節

は、賞を重くして、罰を輕く行ふものところ承り候へ。兎角、縛り首を刎ねられん事は、御宥免あるべしとぞ申しける。信虎、熟々と打聞き給ひ、暫くは物を宣はざりけるが、暫くありて、甘利、能く聞け。吾今、今井を以て、猿に代ふるにあらず。上を輕ずるが惡きなり。然れども汝が申すに任せ、此上は切腹を申付くべしとて、日向・栗原兩人を、檢使として差遣し給ふ。貞邦、兩人の檢使を受け、見事に切腹をぞ遂げたりける。茲に今井が妹に、小澤といへる女あり。漸く三五の頃より、御屋形に召出され、御側近く奉公を勤めけるが、早晩の頃よりか、信虎、淺からず思召し初められ、主君の妾となつてけり。是より諸人、崇敬する事斜ならず。萬づ、此人の心に叶はん事をぞ思ひける。されば古の巴といへる女は、今井四郎兼平が妹なりしが、主君義仲の妾となつて、其寵愛淺からざりしといへり。今此小澤も、今井が妹にて、信虎の妾となりたればとて、皆人、巴殿とぞ呼びにける。然るに、今般の罪科に依つて、木工允、切腹したる由を聞きて、小澤、身をもだえて泣き焦れ、忽ち絶入りたりけるを、付々の女共、氣付水などと走り廻り、聲々に呼生けて、漸々と



人心地出来にけり。小澤、泣く／＼申しけるは、我れ三歳にて父に後れ、其後、母にも程なく後れ參らせぬれば、木工允殿の養育にて、漸く生長ひとしなり親とも兄とも頼み居しに、計らずも災に罹り、君の御惡しみを蒙り、終に生害し給ひぬる事の悲しさよ。其身を召禁められ、所領を召上げられしだに、あるにもあられず、悲の餘り、色々歎き申上げしかども、素より御心荒くまします故曾て聞き入れさせ給はざりし。今は水の出ばなとやらん。御憤も少しやすまりなば、其時に、如何様の歎をも申上げ、再び所領にも、安堵させ參らせんと思ひしに、今斯くなき身となり給ひぬるこそ、悲しけれとて、夫より湯水をも曾て吞まず、唯打伏してぞ泣き暮しける。されば小澤、日頃君の寵愛淺からずして、日は終日、東籬の花の下に、酒盃を傾けて醉に和し、夜は終夜、南庭の月に宴を催し、星に誓ひて契り給ひしかば、其外の女は、花の中の深山木の、色香もなきが如くなりし。されば、世の中の情は、皆僻める習にして、鼻を掩はしめて、以て讒言の中立とする事、其例少なからず。此時節を見合せて、扱も小澤事、君を恨み奉り、様々害心を挿み、種々の企を仕り、勿體なくも、忍

びやかに、君を弑し奉りて、兄の敵を討たんと相巧み候なり。能く／＼御用心あるべしと、ありとあらゆる事共をぞ讒しける。飽く迄心荒き大將なれば、俄に面色變り、躍り上つて怒り給ひ、頓て小澤を召出され、汝、不便を加へ、日頃、榮耀に誇らするは皆、信虎が恩ならずや。又己が兄貞邦が事は、上を輕しめ、不禮不義の働を仕る。己が罪、己を責むるの道理を以て、縛首を刎ぬべかりしかども、年來の奉公に免じ、切腹を申付けし所なり。然るを汝、吾を恨み、竊に差殺さんと巧むらむ。其大惡心隠れなく、天罰忽ちに顯はれぬれば、陳ずるとも叶ふまじ。斯かる心底の女とも知らず、年頃、不便を加へぬるこそ無念なれ。累代の主に對し、殊に女の身にて、害心を挿む事、八裂にしても、猶あき足らずと、血を注ぎたる眼に、角を立て宣ひけるが、忽ちつゝ立ちて、小澤を膝元に引寄せ、長く美しき黒髪を、曲々と左の手に引巻き、刀を抜いて中に提げ、敢なくも提切にぞし給ひける。女の姦しき嫉妬の惡心より、故なき虎口の舌頭に懸りて、計らずも、兄弟不慮の難に逢ひ、終に切害せられぬるこそ哀れなれ。是に附けても、家嫡大膳大夫晴信を始め、穴山伊豆守信



行板垣駿河守信形・飯富兵部・甘利・加藤以下の老臣等、心に歎き思ひけるは、大將、斯く惡逆不道にましましては、終には當家の破滅とならん。臣等が諫をも用ひ給はず。如何ともすべき術もなしと、頭を搔き掌に汗を握りて、歎き悲みける。斯かりければ、晴信を諫めて、父信虎朝臣を廢去すべき方便を、長臣等、心に萌しけるとぞ聞えし。

### 信虎信州出馬 附 諏訪合戦の事

頃年、北條左京大夫平氏康は、伊豆・相模の間に跨つて、隣國の諸士を、己れが幕下に從へ、勢を關八州に轟す所に、上杉扇谷修理大夫朝興、天文六年四月下旬、重病に侵され、終に逝去し給ひけり。之を聞きて、北條氏綱父子、時を得たりと喜んで、橋本・荒川・多目・井浪等を始め、逞兵數萬騎を引率し、同じき七月十五日、川越の城を五十餘町隔て、武藏野の北なる三木といへる所に打出て、松田・石巻・志水・朝倉の者共を、五手に分けて備へたり。扇谷朝興の家嫡上杉五郎朝定、此時、未だ十三歳

北條氏康  
威を關八  
州に振ふ

なりしかば、叔父左京大夫朝成、二千餘騎を相從へ、打つて出て戦ふと雖も、大勢に小勢、叶ふべくもあらざれば、一戦に戦ひ負け、散々に敗北し、朝成は敵の擒となる。大將五郎朝定、忽ち川越の城を落去つて、難波田彈正が楯籠りたる松山の城に、逃入りしかば、北條、彌、強大になつて、靡かぬ草木もなかりけり。其外、越後には長尾信濃守爲景、越中の者共と戦うて、一日も靜かなる時なく、駿遠に、今川義元あり。參河に松平藏人廣忠、威を振ひ給ふ。斯くの如く、國々所々、亂れずといふ事なく、争はざる所もなし。然れども、左衛門尉信虎、勇猛の剛將なるを以て、此頃は、甲州へ誰れ手を指す者もなく、諸卒、暫く軍勞を休めてぞ居たりける。去る程に、同じき八月上旬、信虎朝臣は、御嫡大膳大夫晴信・穴山伊豆守信行を、御館の留主に殘し置かれ、二男左馬助信繁・三男孫六信連・板垣駿河守信形を始め、四千五百の軍勢を引率し、教來石民部少輔景政・甘利備前守を先鋒とし、甲府を出馬あつて、小笠原右馬助長時の領分、又は木曾義高が領知等、方々民家に火を放ち、刈田をさせられ、諏訪に陣を取り給ふ。然るに小笠原方の者共少々、足輕などを、懸けて



## 諏訪合戦

遮ると雖も、敵の勇氣支へ難く、皆己々が城々に引籠る。斯かる所に、諏訪方の軍勢、高屋清次・鶴殿左内左衛門・菱田・上野・根來の且心坊以下、早雄の若者共を従へて、先陣甘利・教來石が陣へ突いて懸る。元より備前守、大剛の勇士なれば、敵を察して、定めて、諏訪勢は騎馬を以て、味方を駆亂し、戦を一時に決せんと思へるならん。味方、足輕をよく備へて、炮弓のあやどりを第一にし、急に乗切らんとせば、中を明けて、左右より射すくめ、討ちすくめて、陸太刀の者に、目をかけそ。唯、騎馬を毛付して打落せと、士卒に下知して控へたり。案の如く、高屋鶴殿・根來且心、一戦に駆破らんと、駒の鼻を雙べ進み寄る。甲州勢、鐵炮をつるべ立て、矢袋を作つて散々に射る。此矢炮に、射すくめられて、駒の足竝、しどろになり、引返さんとするもあり。馬にしさり口を引いて、ためろふもあり。此時、根來且心、馬を乗廻し、敵、如何程に射るとも、用ふべからず。本より戦陣に於て、正兵となるの隊、矢炮の害を計るは、戦はざるの以前なり。唯、甲の鞆を傾け、馬を見込ませて、一舉に進め、馬の頭を立直すべからず。鞭を與へよ。鎧を舉動へと、身を揉んで頻に下知

北  
信州勢敗

を加ふる所に、味方の歩卒、悪き敵の武者振かな。我れ打落さんと争ひて、忽に且心坊を打落すに、あつと計りに息絶えたり。諏訪勢、一人當千と頼みたる者を、鐵炮の爲めに害せられて、勇氣を挫かし、諸卒、色を變じて、車の片輪をそこなはれたる心地して、足竝しどろになり、弓弩、自然に怠れば、教來石民部少輔、時分は能きぞ。今日の一番鎗は、誰なるぞ。名乗れ者共、突崩せ人々と、自ら鎗を提げて、一陣に進めば、附卒從軍、馳隔りて、馬前に列して、早や、一番二番の鎗を入れ初むるや否や、總軍、一度に噓と懸れば、諏訪勢も同じく馳合せて、互に首を争ひ、場を取り、或は取られて太刀打、組討の勝負、寔に勇々しき形勢なり。然れども武田勢、崩際くつれぎはの鎗を専用にして、二三箇所の場を此方へ取り、鎗袋を作り、聲を發して突立てしかば、諏訪勢、怵らず敗走す。民部少輔景政は、敵の士大將、鶴殿左内左衛門と渡合せて相戦ふ。左内左衛門、鎗刃の鎗を、真中より切り折られ、少し退つて、腰の刀を抜かんとせしが、小溝に足を踏込み、たぢくとする所を、景政透さず押込み、たみかけて、鼻嚙の逃はづれに切込めば、怵へず仰のけに噓と伏すを、乗懸りて首を搔落し、



指物を添へて分捕し、則ち下人に渡して、猶も敵陣に入らんとする。斯かりければ諷訪方、右往左往に敗走して、一返も返さず。主に離れ親を捨て、散々になるを、甲府勢、馬引寄せ打乗り、鞭を揚げて追討にす。斯くて、したるく追ふべからずと、追留の節を士卒に示し、輒く備を堅めたり。既に敵を討捕る數、一百四十餘級なり。信虎、大に悦び給ひ、刈田をさせ、在々所々を焼拂ひて、暫く諷訪に殘陣あつて、其後、喜の旗を卷き收め、甲府に馬を入れられける。

### 信虎、家嫡廢去思召立たる事

斯くて、左衛門尉信虎は、奇計剛強の勇威を以て、一家類葉の人々を、大方残りなく殺随へ、今は甲州の内にしては、弓を彎くべき人もなし。駿河は、富士下方を始め、信濃は已に佐久間郡迄切取り給ふ。然れども、信虎、短慮無法の荒人なれば、信濃も佐久間郡の外、上野の諸士、一人も味方に馳せ來らず。累代重恩を蒙りし者共も、纔の小科に誅せられ、又は世帯を沒收せられて、追放の身となり、他國に逃げ行き、武

信虎甲府に歸陣

田家の諸士は、日を逐うて滅じ、又適、昵近の者共も、明日にも災の其身に來らん事を恐れて、暫くも安堵の思に住する事なし。斯くては、終に武田の家、今十八代に當つて、滅亡に及ばんと、歎かぬ者なし。其上、嫡子晴信、智勇萬人に勝れて、大將の器に相當り給ひぬれば、家跡を續ぎ家を立て、譽を萬代の後に仰がれ給はんは、此人ならんと、家中一統に思ひ入り、信虎は、早や致仕の身ともなり給はんなれば、晴信に仕へて、戰忠を勵み家を起し、名を立てんと擧つて、之を樂まぬはなかりしに、唯何となく、信虎、晴信を疎み、次男左馬介信繁を以て、總領となさんとのみ、一遍に思ひ定められければ、如何にもして晴信が失を見出し、夫に事を寄せて、國中を追放せんと、思惟し給ひて、數人の目付横目を付置かれ、少しの過もやあらば、訴へよと仰付けらる。さるに依つて、家中大に信虎を欺く。晴信は、少しも憤の色を顯し給はずして、猶ほ忠孝を重じ給ふ。然りと雖も、總領に生まれて、家を追出されんは、未代の穢名にして、又、數代譽の名家、斷絶もやせん事を、深く心に病み給ふ。駿河の今川殿は、姉婿にてましませば、右の次第を、略ぼ密通ありて、如何様と



も宜しき様に、頼み奉ると、度々文通に及ばれけり。斯くて、今年も暮れて、明くれば天文七年正月元旦の御慶あり。然るに信虎、盃を取上げ給ひ、嫡子なれば晴信へぞ差し給ふべきに、さはなくして、次男信繁に差し給ひ、其後、三男孫六信連に差し給ふ。晴信は、面目を失ひ、手持悪く退出ましませども、少しも恨の氣色なくて、彌、恐れ謹んでぞ居給ひける。然る所に、同じき二十日、板垣駿河守信形を以て、晴信へ仰へ送られけるは、晴信儀は、今川治部大輔義元の吹擧を以て、忝くも大膳大夫を兼ね、信濃守に任せらるゝ所なり。尤も其爲性愚にはあらざれども、遠鄙に育ちし故、物毎無骨に、田舎らしき所あれば、駿河に立越えて、姉婿義元に隨順し、今川の厚き家風をも見習ひ、萬事華奢に、作法諸禮等をも稽古あつて然るべしとなり。晴信、此旨を聞き給ひ、信形を側近く召され、扱こそ思ひつる事よ。晴信を目にも見えぬ所へ、追失ひて退けんとの御内存と覺ゆる。此御意趣、何事ぞや。定めて信形は、御内意を得てぞあるらんと宣へば、板垣、御側に蹲り寄りて、咄き申すは、次郎殿を御寵愛遊ばされ、君を追失はんとの御所存と、相見え候へども、御存の如く、御

心の狂はしく座す故、既に馬場、山形以下の老臣、諫言を申上げたる御腹立を以て、死罪に行はれ候上は、如何様の非道を、行はせ給ふとても、誰か諫言を申上候べき。然れども、甘利備前守、飯富兵部少輔等の忠臣を、召寄せられ、御密談を遊ばされなば、其上にては如何様とも、御爲宜しき謀も候べし。さのみは御氣遣候べからず。此信形に於ては、御味方に參るべしと、既に誓文に及びければ、晴信重ねて、御邊が今の一言、寔に骨髓に徹して覺ゆるぞ。よも偽はあらじ。此上は兎も角も、能き様に頼み思ふなり。然らば、歸つて申上げんには、御意の趣、一々承知し奉り候。如何様とも御下知次第に、仕らんと申すべしと宣へば、信形、畏つて罷立ち、此旨を申上ぐる。信虎聞召され、重ねて信形に、飯富兵部少輔を差添へられ、來三月より、駿河義元の方へ立越して、一兩年も駿河に居て、萬の式法をも見習ひ、學問をもすべしと、御遣されけり。兩人又、晴信の御方に參り、右の趣を申上ぐる。晴信、兩人を閑所に召され、使者の趣を聞かせ給ひ、三人面を合せ、暫く密談ありと雖も、何事やらん、外の者は、更に知る事なし。其後、飯富、板垣兩人は、信虎の御方へ歸り來つ



て、仰の趣、承知仕り候。如何様とも、御意に任せ候べしとの、御返事にて候と申す。信虎、聞召し、某が詞に従はんといふか。其は晴信がよき分別なるべし。此信虎が差圖を用ひず、否といふ程ならば、首を刎ねて、某が存分に任すべきものをとぞ宣ひける。

### 大膳大夫晴信逆心の事

斯くて、大膳大夫晴信は、御身の浮沈、今茲に谷りしかば、如何はせんと、様々思慮を廻し給ひ、竊に穴山伊豆守信行・甘利備前守・小山田備中守・板垣駿河守・飯富兵部少輔を召寄せられて、密談し給ひけるは、扱も父信虎朝臣、某を廢去し、舍弟の信繁を以て、當家の總領となさんと、思召さるゝ事、既に數年に及んで、誰知らぬ者もなし。尤も、某を御疎みある事、晴信、一國をも治むべき器にあたらず、孝心薄きが故なり。又左馬頭が儀は、其心、直に仁義を守り、文字に心を寄せ、武略を嗜みぬる者なれば、大將の器に相當れり。さるに依つて、信繁を、嫡子に立てんと思召す御心

入、其理なきにあらず。然れども父信虎、非道の御行跡のみ多し。今、戦國の時に中つて、隣國互に其虚を窺ふ最中なり。爰を以て思ふ時は、家督を典厩に譲り給ふ迄もなく、當家滅亡に及ばんか。我れ之を深く歎く。假令ば我身は、諸國に漂泊し、山野に餓死すとも、父の命なれば、是非に及ばず。只歎はしきは父の悪行なり。既に、板垣信形・飯富兵部は、先づ我に心を寄せ、此度の安否に肺肝を碎く。甘利・小山田兩人の心底は、何とかある。包まず有の儘に、語るべしと宣へば、甘利備前守、進み出で、仰の如く信虎公には、左馬頭殿を寵愛なされ、總領に立ち給はんとおの思食入れ故、此度、君をすかし參らせて、駿河に遣はされ、夫より京都の方へ、追拂ひ參らせんとおの御内意を承りて候。如何様とも、御爲宜しきやうに、密談を承り候はんといへば、小山田備中、今年やうく、君十八歳にてましませども、武勇といひ、才智といふも、旁々以て御家督相續あるべき所に、謂れなく追退けんとおの御企は、信虎の御心に、天魔の入替りたると存ずるなり。板垣殿は、如何思食され候やといふ。信形聞いて、さればとよ、信虎朝臣は、大方ならぬ狂氣人にて御座す故、



今斯様の不幸出来れり。各の異見を承はつて、其儀の宜き方に随ひ候はん。穴山殿は、何等の思食入れ候やといふ。信行、暫くあつて、老臣達の心底を承らんとあれば、小山田備中、げに、各の思召入れありと雖も、一大事の僉議なれば、互の心を計り、何れも宣ひ兼ね給ふ所、尤も理に存ずるなり。先づ理非は存ぜず。心底の趣を、御前にて申すべし。當屋形信虎君は、生得惡逆不道に座す故、馬場・山形・工藤・内藤等の長臣を、御手討になされ、或時は懐胎せる女の腹を裂き、又は律僧を焼殺しなどし給ふ類の惡行、其數を知らず。さるに依つて、諸人恐れ、疎み奉る。神明など加護し給はん。今、信州に、木曾左馬頭義高・小笠原長時・村上義清・諏訪頼茂等の剛敵あり。相州に、北條氏康といふ若手の名將、隙を窺ふ最中なり。上州には、上杉幕下の者共充滿せり。然れば威すに武を以てし、懐くるに徳を以てして、民を慈み諸士を撫て、忠ある者には、時を移さずして賞を行はれ、小科を御取上げなく、軽く罪し、萬事廉直なるをこそ、諸士の上に將たるの器といはん。罪なきを罰し給ふ事、其數を知らず。さるに依つて、上下親まず、怖れ疎んで、八方に離散

し、隣國に奔走す。既に工藤下總守虎豊を、君、誅伐ありし故に、其子長門守・舎弟源左衛門尉等、東國へ出奔せり。渠等兄弟は、無二の忠臣の子孫にて、武勇に長じたる者共なり。去年、今井木工允貞邦、少しの罪科に依つて、死罪に行はれしかば、其子彌四郎逐電して、信州に至り、村上の幕下となれり。是等を始めて、當家譜代の者共、敵國に逃げ至りて、則ち敵となる。其上、信州・上州の諸士、當家を疎み、一人も味方に參らず。是に依つて、敵の勢は日々に増り、味方の勢は月々に減ず。斯くの如くにては、當家の滅亡、必定、近きに候はん。此上は、叛逆を思召し立たれ、信虎君を他境へ移され、推して世を取り給はんに、何條の事か候べき。列座の人々も其志あるべけれども、互の心底を計り兼ね、御申しなきと存ずると、憚る所なく申しければ、晴信聞召し、いやとよ。先立つて板垣等、此事を申す。然りと雖も、父の恩の莫大なる事、大山よりも高く、蒼海却つて淺し。其高恩の父を追出して、逆心の働をなさば、神明にも捨てられ、人道にも背きぬべし。照々たる天道、我れ何んぞ欺かん。此上は、腹搔切つて、父の御心を休めんにはと、涙をはらりと、流し給



ひければ、小山田も涙を押へ、重ねて、只今の御一言、骨髓に徹して、御理にこそ存じ候へ。然れども某、愚案を廻らし候に、尤も信虎君を廢去なされん事、不孝の罪、遁れ難しと雖も、滅亡に及ぶ御家を興され、仁義を以て、諸士をなづけ、武勇を以て隣國を切從へられ、當家、繁昌に及ばれなば、新羅三郎殿より以來、代々の君に對せられては、却つて御孝行にて候べし。これ不忠に似たるの忠、不孝に似たるの孝なるべし。能々、御思慮を廻らされ、御心中を極めらるべしとぞ申しける。板垣信形進み出て、備中が申す所、理に當り覺え候。是なる兵部少輔と、此儀を兼ねて進め申すと雖も、御許容候はず。御存の如く、信虎君は、御心狂はしく、惡逆無道の甚しき事、上古に未だ承らず。末代にもあるべからず。暴惡、己に歸して、自ら天の責を受け給ふの道理なり。何か苦しく候べき。早々思召立たるべしと申せば、甘利も、此儀尤に候。御心を一遍に決せられ候へと、進め申しければ、晴信も、此上は是非に及ばず。然れども何としてか、父信虎朝臣を廢去すべき。先祖に對し、家の爲めに、孝行に當ればとて、正しく父に向つて、弓を彎き、後難、天の責を蒙らん事、立

所に疑ふべからずと、涙を浮べ兩手を組み、差打向きてぞ御座しける。茲に晴信の御扈從今井市郎、今年二十歳になりけるが、進み出てて申しけるは、若輩の某、斯く一大事の商議なるに、一言をも申す事、憚り少からず候へども、兎角は君の御爲なれば、申すにて候。斯様に賢老智化の人々、諫め參らせられ候上は、御許容候べし。又信虎君を廢去の儀は、板垣・甘利を始め、老臣の面々に御心を合され、何卒信虎君を賺し、駿府へ御越なさるゝ様に、相計らはれ候へ。今川殿へは、兼ねて御父子の中、快からず、典厩を家嫡になさんと、思召さるゝの間、偏に頼み思召すの由、度々仰遣されたる上なれば、義元朝臣、疎略にはよも思召されじ。然れば某、御密意を承り、駿州へ忍び往き、信虎君御越に於ては、駿河に御取留なされ候様に、義元朝臣を、一向御頼みなされ然るべし。某、心の及ぶ程は、調略仕つて見候はん。義元、御許容に於ては、信虎君御越の跡にて、押して國中を治められんに、何の煩か候べき。愚意短才の及ぶ所、斯くの如くに候といへば、穴山殿を始め、板垣・甘利・飯富・小山田等五人の人々、皆、此儀に同じ、若輩の今井が、思慮の厚きを感じ、頓て市郎を駿



府に遣され、此計略を廻らされよと、一同に進め申せば、晴信、止む事を得給はず。然らば汝、忍びて駿州に參り、調略を仕るべしとて、密書を今井に與へられ、駿州に參る御暇を、下し給ひける。

### 今川家來由附今井市郎駿州に密使の事

茲に、駿河遠江の大守、從四位下治部大夫義元と申せしは、當時、將軍家同流の貴族なり。水尾帝六代の後胤八幡太郎義家より五代左馬頭義氏朝臣、是れ足利家の元祖なり。其子左衛門尉長氏、其一男上總介滿氏、これ吉良の始めなり。二男四郎國氏は、父長氏、隱居の所領を相續す。これ今川の始祖にして、國光寺殿と號しけり。夫より三代の嫡孫從四位下上總介範氏、將軍尊氏卿に仕へて、元弘建武の大亂に、勳功ありしかば、駿河の國を恩賜あり。府中に在城せられけり。慶壽寺殿心省と號す。夫より四代の後を、從四位下治部大輔兼上總介義忠と號す。長保寺殿これなり。其家嫡修理大夫上總介氏親、増善寺と號す。其一男上總介氏輝早世す。

今川氏の  
始祖

之を臨濟寺と號す。然るに氏輝、未だ實子なかりしかば、同腹の舍弟出家して、善德寺といへる禪院にありけるを、還俗なさしめて、家督を繼がせける。治部大輔義元朝臣これなり。母は大納言宣胤卿の女なり。義元室家は、左衛門尉信虎の第一の姫君にて、晴信の姉君なり。已に此御腹に、姫君一方儲け給ひ、武田家とは、親子の味深く、同胞合體の思をなし給ふ。然るに義元、釋門を出でて、武門に還り、父祖の業を受け繼ぎ給ひ、臨機應變の謀、義貞・楠をも欺く程の文武兼備の名將なれば、尾張參河を攻靡け、一度上洛に心を懸け、野戰城攻に日を送り給ふ折節、武田晴信の小姓今井市郎、忍びやかに參向し、主人の密書を奉り、隱謀の事共を、密々にぞ申しける。義元朝臣は、海道を攻め隨へ、上洛を遂げ、四海一統の大功を思召し立ち給ひぬる折なれば、我れ駿遠の大守として、隣國の諸士、譽風に偃すと雖も、甲陽の信虎は、我が舅といひ、勇將といひ、しかも年老なり。旁、以て、我が下風に立つ人にあらず。然れば今般、晴信が隱謀に一味し、信虎を當國に押籠め、晴信に武田の家を繼がするに於ては、我心の儘に、晴信を以て、幕下に從へ事を行ふに於て、天下



一統の功、速ならんと思惟し給ひ、早速、此密計に許諾せられ、密計の細談、今井に悉くいひ含め、甲州にぞ歸されける。斯くて、信虎は、彌晴信を廢去の事、急に此事を遂げんとて、同じき二月廿三日、晴信の方へ、甘利備前守・飯富兵部少輔を兩使として、兼ねて申遣す如く、今川家は、公方の親族なるが故に、將軍家の異風あつて、式法、他家に勝れたり。其上義元、文學に長じ武道に達し、和歌・蹴鞠の道迄、其名を得たる良將なり。晴信、早々駿府に至り、今川の家風を見習ひ、諸禮を稽古あつて、然るべしと、一時の間に、使三度に及ぶ。されども兩使、晴信に一味なれば、密談を以て、返詞を相應に詐り賺して申しける。

### 晴信父信虎を廢去の事

斯くて、板垣駿河守信形・甘利備前守兩人、大將の御前に參り、扱も此度、晴信朝臣御廢去の御企、頻に事を決せんと思召され候段、恐れながら、御誤かと奉存候。其故は、當時村上義清・小笠原長時・諏訪頼茂・木曾義政・北條氏康・上杉憲政、武田家を

傾けんと、隙を窺ふ最中に候。然れども君の威風、敵よく御手竝を存じ候故、實に御備の之ある間は、手を出し難く、虚に乗らんとのみ思ふ時節なり。然るに晴信朝臣を、頻に御催促候はゞ、憤を含まれ、若し害心を起され、隱謀の企あらんも知らず候。さあらんに於ては、諏訪頼茂の室家は、御姨子にて候へば、當時を忍んで出奔なされ、諏訪などへ御越も候はんか。其時は、御曹子の御手の者共は、申すに及ばず。當國の中に、晴信へ心を寄する者も、亦少なからずと推量申して候。此等の者共、過半、諏訪に御供して、晴信を慕ひ、家中二つになりて、内、亂るゝ時、頼茂、龍の水を得たるが如く、木曾・小笠原・村上以下、牒じ合せ、甲州に打入らば、立所に當家の滅亡とならんか。其時に至りて、矢猛に思召すとも、猛獸檻に籠められ、冥鴻翅を殺がれたる御心地、其甲斐あるべからず。遠き虚を廻らされ、近き憂の來らざらん御思慮、專一に候。何卒して、安々と國を追放あらん御謀こそ、あらまほしく存候へと、眉を擧めて述べけるに、信虎、兩人が利口を、實と心得給ひ、大息を繼ぎ給ひ、默然として、少し慥まれたる色に見えければ、兩人、差うつぶさきて、事を思案



する體にぞもてなしける。暫くありて、信虎、汝等が申す所、一々理に中れり。扱又、如何にして廢去すべき。兩人が心中を聞かんとある。其時、板垣申しけるは、御尋なれば是非なし。愚意を述べざるは、忠貞にあらず。先づ君には、急ぎ駿河に御越なされ、今川殿に此密謀の旨を、悉く御語あつて、義元と御心を一つになされ、其後、駿府より使者を以て、晴信を御呼びなされ然るべし。先立つて、君、駿河へ御越あつて、御召といふに、よも否とは仰せ候まじ。晴信朝臣、駿河に御着候はゞ、其儘、押籠めて置かるべきに、何事か候べき。御供の者共と雖も、小人数にて御越あるやうに、某共、差配仕るべし。御留守の間は、老臣等に御預け候はゞ、これ籠鳥の如くなれば、御心許なき事、聊もなし。御届の爲めとて、歴々御供仕らんに、路次、猶ほ危き事候はず。此儀、決して追放なさるべき密計の、最上ならんかと存ずると、辯舌を美しうして、面色に實を顯し、方便たはかりけるにぞ、流石の信虎、天道の惡む器なりければ、神明にもはなたれ給ひけるにや。忽ちに智慧の明鏡曇りて、晴信朝臣を、甘利備前が方に預け、當月の末、駿府より一左右次第に、指越すべき由にて、御

留守には、次男左馬助信繁を置き給ひ、萬事穴山殿を、頼み思召すの由仰置かれ、天文七年三月九日、近習の人々、少々召連れられ、甲府を御立あつて、駿州に赴き給ひける。斯くて、晴信・穴山・板垣・甘利・飯富・小山田の人々は、信虎を美く方便たはかりすまし、安々と駿府に追出し參らせて、今は事遂げたりと、悦ぶ事限なし。されども晴信は、父を廢去し、逆心自立の企、人倫の道にあらず。増して諸人に將たるの身に於てをや。長く惡名を、末代に残すのみならず。天道、豈惡み給はざらんやとて、千度・百度、思惟し給ひしかば、甘利・板垣、諫め參らせて、君の嚴親にて、渡らせ給ふと雖も、斯く當家を、斷滅し給はんと欲する惡將なれば、君、仁義を守らせ給ひて、斯く計り給はずんば、我々として、御家を佐けて滅亡なきやうに、信虎君を押籠め奉り、兎角に御先祖への忠貞を立て、臣たる者の道を守らんと欲して候。然らば何ぞ君の惡逆ならん。若し天道之をせめば、臣等、速に其罰を蒙り、長く弓箭の名を穢し申さん。此上は、氏神八幡大菩薩、御旌・無楯の御前にて、鬮を取らせ給ひ、兎角神慮に任せらるべしと、申しければ、晴信も今は、御心解けて、骨肉合體の思を



捨てられ、御旗・無楯の別當、山下伊勢守・甘利備前守・板垣駿河守三人に命ぜられ、三度迄、鬪を取り給へば、信虎朝臣を廢去すべき由の神慮、明白なり。然らば、疑ふべきにあらずと、御心一決して、同じき十七日、押して御館に入らせ給ひ、逆心の色をぞ顯しける。斯くて、今川治部大夫義元は、兼ねて密契の事なれば、信虎を取留め參らせ、種々に饗應ありて、怒を止めらるゝやうにぞ、計られける。斯くて晴信は、市川・笠井・青沼・古屋・大石・小鹽等を始めとして、信虎に隨順し、駿州に赴きたる者共の妻子をば、人質に取り給ひて、彌々治國の政道を正されければ、彼者共、之を聞きて、信虎朝臣を駿州に捨て置いて、我先にと甲州に逃げ歸り、晴信朝臣にぞ從ひける。斯くて、晴信朝臣、即時に國中平均の功を立て給ひ、火の燃ゆるが如く、泉の涌くが如く、威力盛に、板垣・甘利・飯富・小山田の長臣等、武備嚴重に、君を輔佐し參らせしかば、誰か兎角の一言にも及ぶべき。御舍弟左馬助信繁・同孫六信連・小幡山城守虎盛・淺利式部少輔信音・諸角豊後守昌清・教來石民部少輔景政・小山田彌三郎信茂・長坂左衛門尉・安間三右衛門尉・鎌田五郎左衛門を始め、國中の諸士、殘らず御目見を

遂げたり。譜代恩顧の者共さへ、信虎の暴惡に、疎み果てたる折柄なれば、民百姓に至る迄、悦ぶ事限なし。さしも、大剛の勇將なりと雖も、一時の謀略に陥れられて、安々と甲州を押拂はれ、暫時に晴信、國中を押静め、武田十九代の家跡を繼ぎ給ひける。

### 武田義信并今川氏眞誕生の事

斯くて、武田大膳大夫兼信濃守源晴信は、今年、纔に十八歳にして、事故なく、甲州を平均に治め給ひ、政道を改め、國法を定め、忠あるを賞し、科あるを罰し、民を撫て士を愛し、國家興隆の志、深かりしかば、權威、日を逐うて盛なり。然るに、晴信の室家は、轉法輪三條從一位左大臣藤原公頼公の御息女にて、去々年、御輿入ありけるに、程なく心地例ならずましませしが、御懷胎の由にて、様々の御祈、諸寺諸社への御立願、殘る所もなかりけるに、十月の日數を重ねて、男子平産ましましければ、曾根周防守が妻を以て、御乳母となされ、御寵愛大方ならず。生長の後、太郎



武田義信  
誕生  
今川氏眞  
誕生

義信と申せしは、此若君の御事なり。斯かる所に、晴信の御姉君、今川殿の北の御方も、今年、男子出生ありける。後に上總介氏眞とぞ申しける。兩家御連枝の間、何事なく、然も男子誕生ありしかば、武田・今川兩家の御喜、申すも中々愚なり。去る三月より、信虎も駿府に浪客となつて、ましましけるが、義元、他事なく饗應し、新たに別館を營み、外舅の尊釋にて、萬づ、疎ならず沙汰し給ひける所に、家嫡、誕生ありければ、駿遠兩國の諸士、若君の外祖父にて、渡らせ給ふと、彌、恐れ敬ひ、信虎朝臣も、今は中々、心安き方もありて、以前の怒を止められて、月日を送り給ひける。

### 小笠原長時家系并葦崎合戦の事

小笠原家  
系  
同元祖  
同始祖

茲に、信州深志の城主小笠原信濃守長時と申せしは、武田同流の源氏なり。其先祖を尋ぬるに、清和天皇六代の末新羅三郎義光の孫、逸見冠者清光、是れ武田小笠原の元祖なり。其子太郎信義、武田の家督を継ぎ、舍弟信濃守加々美次郎遠光、其子從四位下相模守長清、入道して長清寺榮曾と號す。これ小笠原の始祖なり。八代

の後胤兵庫頭政長、足利將軍家の大祖、尊氏卿に仕へて、尤も軍功多し。惠禪院入道これなり。其子信濃守長基、大通寺殿俊中正健と號す。其子大膳大夫政康、入道して天開と號す。其嫡、次郎大膳大夫持長、高岳正隆と號く。其子又次郎は、信濃守清宗と稱す。法名は喜叟觀公、其嫡子次郎大膳大夫長朝は、徹叟正源と法名す。其子修理大夫貞朝、因山宗堅と號す。其家嫡、又二郎長宗、修理大夫と號す。二郎右馬助長時は、此長宗の長子なり。然るに信虎、信州を悉く殺隨へんと志し、一家の好をも思はず。諷訪小笠原村上の人々と、數年梓楯に及んで、干戈止む時なし。信虎、勇猛の剛將なれば、信州一國の諸將、皆、武田家の變を待つて居たりける所に、晴信、父の信虎を追出し、甲州騒亂するの由、聞えければ、小笠原長時大に悦び、時節到來せりとして、同じき六月、同國伊奈の城主諷訪頼茂と、商議せられけるは、扱も甲州の武田、父子不快にして、嫡子晴信を惡み、次郎信繁に、家督を譲らんと欲せし所に、晴信、不孝の罪を顧みず。今川と心を合せ、父信虎を追出し、畜生同前の舉動故、國中譜代の諸士、二つに破れ、互に害心を挿んで、騒動に及ぶの由、信



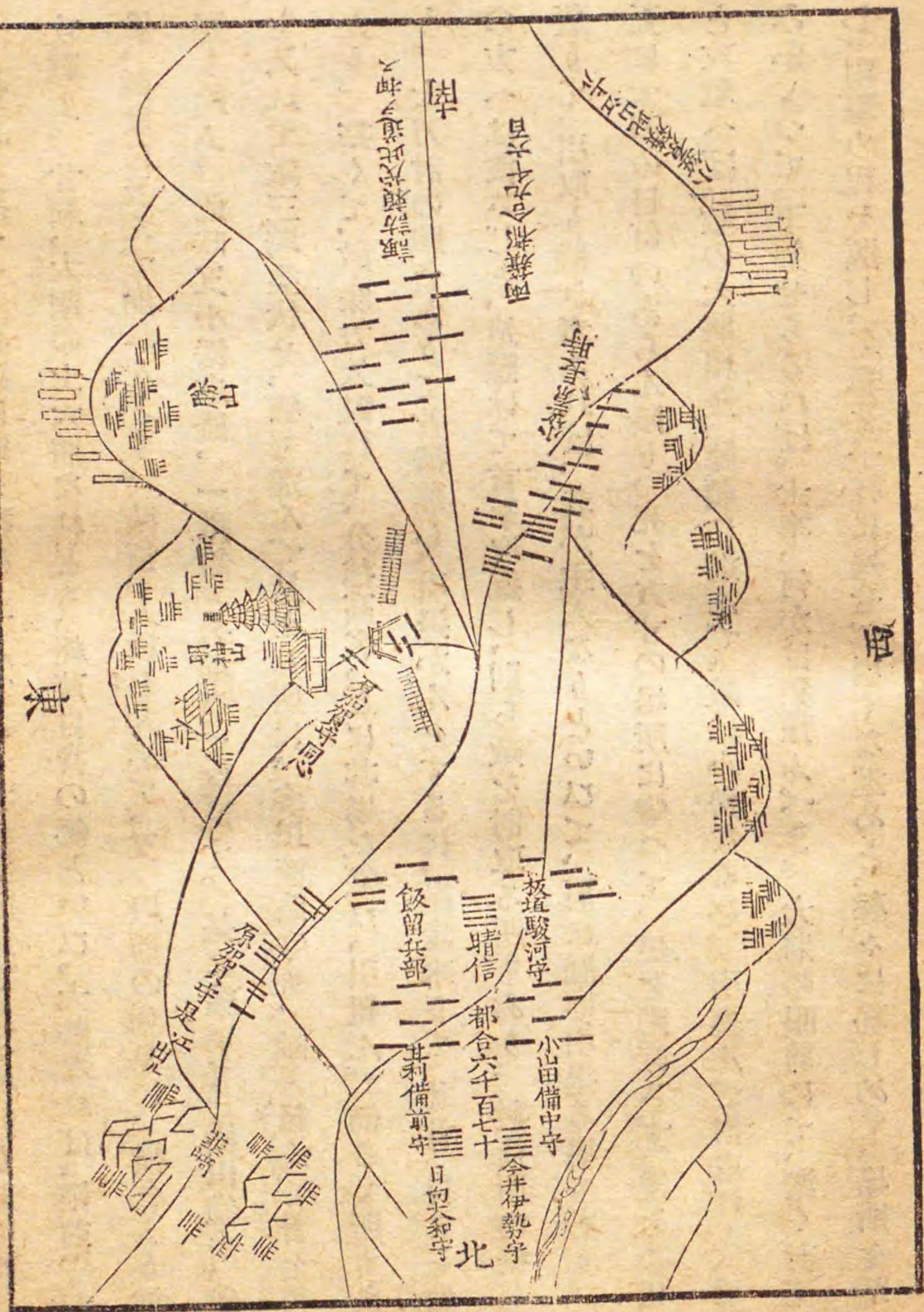
虎、近年當國の中をも、少々切隨ふると雖も、今に至つては、甲州さへ、晴信が麾下に隨はず。信州の者共は、思も寄らず。大半、村上に隨ひ附きぬ。兩虎、争ふ時は、一虎、其隙を窺ふといへり。今、此虚に乘じ、諏訪・小笠原の兩族を以て、甲州に攻入らば、手に立つ者は候まじ。太郎晴信の虚氣者、若輩なれば、何程の事かあらん。武田家を討滅さん事、今、此一舉にあり。武田を亡しなば、小笠原殿は、甲州を一圓に領し給へ。残りし郡邑は、頼茂と分ち領すべしと、契約一決して、小笠原長時、諏訪頼茂、兩家の軍勢都合九千六百餘騎、天文七年七月上旬、信州諏訪筋を押出し、甲斐の武田八幡城山鍋山を馬手になし、鎌梨河原・韭崎迄、攻入りたり。去る程に、大膳大夫晴信は、漸く甲州を押静め、政道に私なく、民を安富にあらしめんと、晝夜、心を碎かれければ、前代に引替へて、民百姓・女童迄、其徳に歸服して、喜の色をぞなしにける。七月七日は、七夕の御賀儀とて、幕下の諸士、御禮を申上げて、千秋を唱へけるに、其翌日、諏訪・小笠原の兩家、甲州に攻入らんと、陣觸をなして、其催火急なりと告げける。されども晴信、少しも驚き給へる色なく、何條の事ある

べきとて、板垣・甘利等の諸將を集め、軍の試、嚴なる所に、忍の者共、馳參つて已に諏訪・小笠原兩家の旌、臺が原邊迄、見え申し候と言上す。晴信聞召され、敵は兩家の軍勢なれば、一萬よりは少からじ。味方は此度の騒動故、附隨ふ勢、多からざれば、近々と引愛て、敵に心を許させ、雌雄を一戦に決すべしとて、先陣は飯富兵部少輔、二陣は甘利備前守、三番は小山田備中守、四番は板垣駿河守、是等四人の士大將、鬪を取つて次第を分つ。本陣の後備は、今井伊勢守・日向大和守、左右は教來石民部少輔・原美濃守・小幡織部正・横田備中守・安間・鎌田を始め、都合其勢六千餘人、同じ十八日の午の刻、甲府を御立あつて、立梨原へ討つて出て、鹽川・鎌梨の兩川を前に當て、ぞ陣し給ふ。是より敵の方を遙に見やれば、諏訪・小笠原九千六百餘人、韭崎の向ふ舟山に陣を取り、家々の旌、思々の馬印を、白日に耀し、軍勢、沓の子を打つたる如くに控へたり。武田方の先鋒、飯富兵部少輔、十八日の子の更に、鹽川を押渡る。軍は明日の辰の刻と定められ、大將晴信の本陣と、後備に控へたる日向大和守昌時・今井伊勢守清冬とは、飯富虎昌と、一同に鹽川を打渡つて、臺へ備を押



韮崎合戦

上げさせ、さしもするどき切岸に、河原表へ打下る道形を附けさせて、其夜の明るを待ち給ふ。先鋒飯富虎昌を始め、甘利・小山田・板垣の人々、川を打渡り、弓手に附いて押出し、韮崎の宿、穴観音を後に當て、備を立て、明るを遅しと待ち居たり。明くれば十九日辰の刻、先陣飯富兵部少輔、時分は能きぞと押出す。諏訪方の先陣西條式部、一戦に駈散らさんと進み寄る。兩陣鬨を作るほどこそあれ。兩方入亂れて相戦ふ。互に一足も引退かじとぞ捫たりける。素より晴信、武略神通の良將なれば、日向・今井の兩手の士卒、三百餘騎を一手になして後陣とし、割菱の旗・諏訪の旗、悉く後陣に押立てさせて、晴信の旗本は後陣なりと、敵疑ひ味方定まる。自身は、赤地に八幡菩薩の旗、只一旒、真先に押立てさせ、兼ねて臺より作らせ置きたる道筋を押下し、西條が左の方へ、一文字に突いて懸る。小幡織部正虎盛、一番鎗と名乗つて、向ふ者を幸に、邊りを拂ひ突廻る。流石の勇士に突立てられて、敢て羽向ふ者もなし。思も寄らぬ晴信の奇術に、突立てられ、西條、一戦に打負けて、散々に敗走す。二陣は大將諏訪頼茂、龍虎の勢を見せて、先陣敗走の機を深く憤



小笠原長時家系并韮崎合戦の事



り、無二に懸つて、必死に戦を挑めと下知して、甘利備前が手先へ押懸り東風西風攻戦ふ。甘利、大剛の士大將なれども、頼茂自身の働といひ、大勢なれば、備前守が備、數度に及んで崩れんとす。晴信、人數を丸めて、又、以前の如くに、横合より押懸り給ふ。此時又小幡虎盛、一番鎗と名乗つて突亂す。是に續いて、横田備中、鎗を入れて敵三騎突伏せ、猶も進んで見えし所に、多田淡路守も、敵と組んで首を得たり。斯くて、敵味方入亂れて、分捕高名、互に其場を争ひ、引組んで倒るゝ所もあり。太刀討の勝負ありて首搔落し、引退かんとするに、敵走來りて、其首、得こそ敵の方へは渡さじと、追懸けて首を取返し、則ち敵を討取る所もあり。數箇所を疵を蒙りて、引取り難き者あれば、我が主人なりといひて、肩に懸け引退る場もあり。互に太刀の目釘のあらん限り、死を方寸の場所に守つて、足を踏直さず、爰を必死と攻戦へば、敵の大將頼茂、陣頭に進んで、敵は小勢なるぞ。引裏んで討取れと、勇みかゝつて、下知せらるれば、士卒、何かは猶豫ふべき。大將の眼前にて、潔く討死し、剛臆の程を顯し、名譽を子孫に残せ。引くな進めと、聲々に恥しめて、場所を踏

まへ、鞆しころを傾けて、嚴しく防ぎ戦ひたり。爰に甲州の足輕大將、數度の武功を顯したる原美濃守虎胤、士卒を勇めて、此度の一戦は、國家安危の戦、一人も生きて、甲府に歸へらんと思ふ心底あらば、大敵に對し、勝利あるべからず。敵は客戦なり、我は主戦なり。地利を得る事、我にあり。必定始終の戦、味方の勝利に疑なし。忠あらん輩は、予が真似をせよといふ儘に、眞一文字に敵中に殺入りて、陸武者をば、鎧の鼻に當て蹴散し、馬上なるをば、馬より逆様に切つて落し、近づく者を引違へて引落し、或は鞍の前輪に押付けて、首を搔落し、獅子奮迅の怒を顯し、命を風塵に比して、戦ひければ、究竟の敵、五騎切落し、六騎に手負はせ、當るものを、幸に舉動へば、敵大に辟易して、備まばらに見え透き、後陣の旗の手、入亂れしかば、横田備中・鎌田五郎左衛門・御小姓今井市郎、押續いて咄どつと切入れば、諏訪勢、若干討たれて引退く。晴信の旗本は、又、甘利が備と入違へ、難なく諏訪を切崩し、韭崎の方へ押廻して、備を堅めらる。三番長時家臣・雨森修理亮、小山田備中守に駈合せて、兩陣互に入亂れ、東西に開き、南北に圍み、戦已に半なるに、晴信又、旗本を以て、



小笠原長  
時敗軍

無二無三に突いて懸り、七顛八倒して戦ひ給へば、雨森、足を立兼ねて、既に敗走に及びけり。斯くて晴信、又、本の所に備へて、猶も勇猛の勢、たゆまず見えけるにぞ、士卒も大に感じて、如何様、勇武は、楚の項羽といふとも、是には増り給はじとぞ私語さける。已に三度の戦、三度共に味方の勝利なれば、四番は大將小笠原長時、今度の一戦に、敵を追崩さずんば、再び晴信に對して、弓箭を取らん事、永く叶ふべからずと、深く心中に慎みあるといへども、差蒐りたる軍、廻すべくもあらず。廻さば追討に撃たれん事の危きを計り、進退、此一舉に谷りて、千々に心を碎かれける。頃しも初秋の事なれば、未だ木々の梢をも、時雨るゝ空の染兼ねて、青々たる秋草、紅波瀧なつて、總べて紅葉ならずといふ事なし。されども長時、膚、撓まずして、大音を揚げて士卒を勇め、列を嚴重にして、備を進めらる。武田方には、板垣駿河守信形、駈合せて防戦す。味方、魚鱗に備へて敵を突破らんとせしかども、長時、鶴翼に連ねて、大勢を以て引包み、一人も残さず討取れと、火出づる程こそ揉んだりけれ。其時晴信、軍士を勇め、鞍笠になつて下知し給ふは、今日の戦、今此一奇

長時、板  
垣と戦ふ

にあり。三蓋菱の大旗は、大將長時が陣と覺えたり。奇兵、下立たずして乗切にせよ。大將に近づき、組んで譽を殘せ。唯一舉に、備を乗亂せと、下知し給ふ。小幡織部正は、今朝より三度の駈合に、三度ながら一番に鎗を入れて、比類なき高名し、餘多の疵を蒙れども、之を事ともせず、真先に進んで、我と思はん者は、續けや續けと、一番に又馬を入るゝ。是に續いて、原美濃守・安間三右衛門・今井市郎、同じく敵中に乗入るゝ。士卒も是に劣らじと、一同に駈入りて、兩陣、互に喚き叫んで、命を鴻毛に比し、義を金石の如くにして相戦ふ。然るに、今井市郎は、土方大九郎と、馬上にて組んで落ち、土方を取つて押へて、首を搔かんとする所に、大九郎が同心六七人落合うて、終に市郎を討取りける。今井が姉は、飯富兵部が妻女にて、兄弟の好をなしける。晴信の小姓達にして、物馴れし剛者なりけるが、今日、葦崎の戦場に於て、譽を後代に残しける。扱亦、安間三右衛門は、敵多く切つて落ち、其身も深手を蒙りて、是非なく其場を引退く。小幡織部正虎盛、今朝より四度の戦に、三度一番に鎗を合せ、四度目に、一番に乗切つて、向ふ者を選ばず切捨てけるに、例の大



半月の前立打つたる鏝を着、黒絲緘の鎧に、月毛の馬の太く逞しきに打乗り、働、衆に越えければ、敵にも之を討留めんと、何れも透間を射ると雖も、近づく敵、一人も生きて歸らざりければ、深く小幡を怖れけり。爰に、長時の足輕大將木村又次郎と名乗つて馳近づく。虎盛、哀れ敵やと打見て、馬を馳寄せ、共に馬上に相戦ふ。木村が下人只一人、走り來つて、鎗を持ち、小幡が馬の平頸三途の邊を、たゞみかけでぞ突きたりける。虎盛、二人を敵に受けて、之を事ともせず働く所に、小幡が中間走り來り、敵の郎等と渡し合せ、相討して死にたりけり。兩雄、互に深手を蒙り、馬も六箇所、手を負うたり。流るゝ血は、踵に至り、四つの鹽手に付けたる首の血、自身の疵より出づる血、馬の疵より流るゝ血に、月毛の馬、朱に染みければ、栗毛の乗替に乗つて引きたるやと、皆人いひける。是よりして、甲州はいふに及ばず、近國他境の兒童等、高名をせば、月毛の馬の栗毛になる程に、名譽を顯せといひ

けるは、此小幡虎盛が事なりけり。智勇兼備の晴信、今日を限と働き給へば、士卒、命を輕じ、前に怖るべき敵なく、後に退くべき心を忘れて、必死に其場を争ひて、皆、段あけになりてぞ戦ひける。然りと雖も、辰の刻より未の刻に至つて、四度の奇合正術に、六千の味方、皆勞力して生きたる心地のなかりけるは、寔に理なりけり。孫吳を欺く晴信の兵、既に敗軍に及ばんと見えし所に、典厩を輔佐して、留守居にありし原加賀守、此度の軍、難儀ならん事を、兼ねて察しければ、西郡・東郡の百姓共、又は甲府の町人等に至る迄、二十歳より五十歳迄の者を選び、古鎧を集めて、之を着せ、竹鎗又は草鎌を取持たせ、紙旗を作りて、諸士の紋を畫かせ、數十旒押立て、勝山嵐に翻し、大將加賀守は、本道を押し、相圖の據旗こぼたを以て、勝山に登せ、晴信の奇戦、危きを見て、戦はずして関を作り、さゞめき渡つて、五千餘人、敵の中に取籠めんと、急の太鼓を打つて進みよる。これに機を得て、板垣信形、手痛く下知をなして戦はしむれば、敵陣しどろになりて、四角八方に敗北す。一萬に及ぶ敵軍なれば、右往左往に亂立つて、小返し守返しを、心懸くると雖も、武田勢、透間かぞを計へ、手



先へ押懸けく、其場々々の鎗合、汐を抜かさず、追詰めしかば、一返も返さず、一同に敗走す。武田勢、猶ほ追留の節所に至り、輒く備を疊みて、勝鬨を執行ひ、首實檢ありけるに、敵の首を獲る事、二千七百四十八級、小を以て大に勝ち給ふ。偏に晴信の奇術の、いみじきに因つてなり。其後、悦喜の旗を巻き收めて、御館に歸陣し給ひける。

武田三代軍記 卷之第三終

武田三代軍記 卷之第四

撚場野邊山・葛木合戦の事

應仁年中より以來、五畿七道、干戈動き止む隙なく、兵家はいふに及ばず、民百姓に至るまで、賣買利潤の道を絶ち、農業耕作の便を失ひ、夜となく晝となく、騒しかりし年も暮れ、新玉の春に移り替る。天文八年己亥、甲州の大守大膳大夫源晴信朝臣、歳旦の御禮を受け給ふ。門葉の歴々を始め、武田家譜代の人々、御土器を給はり、又中にも、原美濃守虎胤・小幡織部正虎盛・横田備中守・多田淡路守、是等四人の者共は、父信虎朝臣より以來、數箇度の武邊、覺を顯し、軍に妙を得し者共なり。彌、勳功を抽づべしとて、去年、葦崎の合戦の功賞に因つて、御感状を下され、御加恩を與へられける。四人の者共、殊に面目を施して、御前を罷立つ。然るに晴信朝臣は、



文武を左右にして、國を治めん事を思召し、禪學に御入あつて、法を崇敬遊ばし、惠林寺惟高和尚・上條法城寺策彦和尚を始め、虎哉・湛堂・物外などといふ博識の僧達を集め、軍旅の御暇には、參禪に御心をしづめ、詩文和歌の道を嗜み、杜子美・東坡が古を慕ひ、人丸・赤人の遺風を追ひ、月を愛し花を翫び給ふに、今、奸佞輕薄の邪臣等、晴信朝臣の若氣を唆して、同じき二月、都より隴といへる容顏美麗なる遊女を、一人呼下し、寵愛し給ふこと斜ならず。寔に色に溺るゝの習、賢愚同一にして、平生を誤つ事珍しからず。是より軍事を抛ち、國政をも忘れ給ひ、遊宴に日を暮し、沈醉に夜を明してぞましくける。然るに今、戰國の最中にして、四方に敵を受け、國を守るの時節なれば、互に彼我、其虚を窺ひ合ひて、片時も安き心なし。就中、諏訪小笠原は、去年韭崎合戰に敗北して、會稽の恥を雪がんと思ふ時分、旁斯かる御身の行跡にては、當家の滅亡、近きにあらんと、心あるも心なきも、歎かぬ者はなかりけり。之を聞きて、時節既に到來せりと、信州更科の村上義清・同國伊奈諏訪頼茂・甲・信兩國の堺に砦を築き、軍勢を籠め置き、甲州へ攻入つて、武田家を、一戰に

討滅さんとぞ巧みける。既に義清は、金山隱岐守に、千七百餘人、軍勢を差添へ、甲州に發向す。諏訪頼茂は、去年の憤を散せんと、桐原主水正を大將にて、千五百餘人、同じく甲州へ差向けらる。兩家、牒じ合せて、信州を打立つ程に、桐原が千五百餘人、諏訪筋を押し出し、武田八幡を妻手に見て、臺が原迄、攻寄せたり。村上家の軍勢は、長澤筋を押し來つて、若御子に陣を取る。此旨、甲府に告げ來れども、晴信、今は軍事を忘れ給ひ、遊宴をのみ、事として御座しければ、さのみ軍の評議もなく、一方をば飯富兵部少輔を隊將にて、八百餘騎の軍勢を、若御子に差向けられ、板垣駿河守信形を以て、一方の大將として、士卒七百餘騎、諏訪勢の諸手として、臺が原に差向けらる。敵味方、互に對陣して、足輕迫合に目をぞ送りける。時に飯富兵部少輔虎昌、謀略を廻らし、西卷又兵衛を近付け、今度、寄手の中にある岡野原隨流齋は、御邊が舊友と聞く。如何にもして、賺し調べて見られよといふ。西卷、畏るといひて、隨流齋が方へ、矢文を以ていひ遣しけるは、此度、味方の謀に同心あり。陣中に味方を引入れらるゝに於ては、甲州にて、千五百貫の恩賞を與ふべしと、いひ



送る。元來、慾心強盛の隨流齋、天の與と悦び、早速許諾して、物馴れたる人々を、當陣中に御入れ候べし。一戰の節、手引し後切を仕り候べしと、人質をぞ遣しける。扱は事なりぬとて、忍に馴れたる出拔共六十餘人、金山が陣中に忍入り、信州勢に紛れ、敵中に分散して、相圖の時をぞ相待ちける。虎昌、思ふまゝに、調略をしすまして、閏六月二十日、卯の上刻に、一戰を遂ぐべしと定めけるが、味方に、一番、二番の争、出て來つて、既に辰の刻にぞ及びける。さりとして、止むべきにあらずとて、金山が陣取りたる燃場野邊山に押寄せて、一聲、鬨を作る程こそあれ。敵、味方入亂れ、鋒より火花を出し、陣雷、天を響して、互に引かじと防戦す。然る所に、兼ねての相圖、其刻限に及んで、岡野原隨流齋、己が役所に火を懸けて、散々に切立つる。六十餘人の忍の者、爰に隠れ彼所に起つて、岡野原と一手になり、勇みかゝつて切立つれば、須破、味方に逆心の者こそあれ、前後の敵に圍まるなど、噓と崩れて敗走す。甲府勢、機に乗りて、追慕はんとせしかども、虎昌、士卒に下知して、彌、備を堅うし、前後を警固し、勝つて釜の緒をしむるといふ諺を、知らずやといひて、

燃場野邊  
山合戦

村上義清  
敗軍

葛木合戦

首實檢するに、今日兵部少輔が手に、討取る首數、雜兵共に九十九級なり。猶も燃場野邊山に陣を取り、勢、猛にして居たりけり。臺が原に向ひたる板垣駿河守信形は、既に飯富兵部少輔、村上勢を切崩し、大に勝利を得たりと聞き、予が合戦の沙ぬけたり。何日迄、斯くて日を送らん。諷訪勢を蹴散らして、高名せよ人々、流石にきたなき後切杯を作らんは、本意にあるべからずとて、同じき廿三日の巳の刻に、七百餘騎を引率し、桐原主水正が陣取りたる葛木に、噓と押懸けて、無二無三に攻戦ふ。諷訪方の軍勢は、去る二十日に、村上勢、飯富兵部に切崩されて、敗走の色を見聞し、力を落し機を挫いて、見崩に崩れて、若しくは味方、岡野原が如き者もやあると、互に胸を抉りければ、我先にと逃支度し、敢て羽向ふ者なし。信形、敵の據旗の、仰に靡くを見て、大音揚げ、如何に者共、敵の旗色を下墨に、今日の合戦、轉轉しき事なし。斯かる敵に向ひては、高名も不覺も、皆平等なり。あれ蹴散らして、のけよと呼ばはりける。得たり賢しと、早雄の勇士等、喚き呼びて懸けたりけり。志を立て、義に死なんと欲する敵の軍士等、少々取つて返し、防ぎ戦ふといへども、

諷訪頼茂  
敗軍



板垣信形  
飯富虎昌  
甲府に凱陣

味方、之をものともせず、切伏せ突臥せ、分捕高名をぞしたりける。或は實衆みしうに附くもあり、溢こぼれ者を討つて、印とするもあり。今日、信形が手に討取る斬首雜兵、合せて百七十五級、飯富・板垣の兩將、潔く軍に勝利を得て、悦び勇んで、甲館に引返しける。

武田晴信奢侈附板垣駿河守諫言の事

晴信遊宴  
に耽る

去る程に、板垣信形・飯富虎昌、一戦に打勝つて悦ぶ事限なし。されども、主君晴信は、唯、軍旅國政を忘れ給ひ、臙を寵愛御座して、夜は終夜宴會を催し、晝といへども、四方の妻戸障子を差廻し、古人も燭をとつて夜こそ遊びぬれとて、蠟燭に火を點ぜさせ、山海の珍肴・美酒を調へ、或時は又、齡、三五・二八ばかりの女を俊すげり、數十人集めて、梅花・芙蓉・櫻花・桃花等、あらゆる作花を、長さ一間ばかりの竹の柄に附けさせ、手々に之を持たせ、左右に立別れさせて、花軍と號けて、鬪はしめ給ふ。夏は後園の池水に、御船をしつらはせ、是も同じくなまめける女人に、紅もみの一重衣、或

甘利備前  
守卅七箇  
條の諫書  
を奉る

は生絹の羅を着せ、立て雙べて船を漕がしめらる。女姓等、棹の歌を諷へば、絲竹の緒しちべを調和して、之を囀うたされければ、江底の龜も、猶ほ萬代の春を迎へ、水上の魚も、上生の臺に生るゝかと疑はれける。或時は又、女に鶴を遣はせ、種々の遊興、無量の奢侈、盡されずといふ事なし。適、表へ出て給ふ時は、惟高・策彦・淺海・鐵臂・南化・説山・虎哉・湛堂・物外などといふ僧を集め、詩會の興行ありて、政事は曾て聞き給はず。然るに甘利備前守、之を歎き、卅七箇條の書を奉つて、様々諫め參らすと雖も、露ばかりも聞入れ給はず。剩へ引籠まり在して、諸臣に對面ある事稀なれば、重ねて諫め參らすべき便なし。信形、色々思案を廻しけるが、當國西郡の側に、友夢居士とて、詩歌の道に長じ、世を離れ隱遁の身にて、花月を友とし、幽かに暮せる老翁あり。駿河守、之を傳へ聞き、竊に、彼の友夢居士を招き寄せ、同じき九月下旬より、虚病を構へて出殿せず。晝夜を分たず、詩文を學びけるに、纔か三十餘日の間に、起承轉合熟學、平仄を胸中に浮め、詩作、形の如くにぞ作りける。信形、今は思ふ儘なり。如何なる題を得るといへども、即席に蜂腰を綴りて、主君を諫めんと思惟して、



詩會の興行をぞ待ちたりける。斯くて、同じき十一月朔日、晴信、惠林寺の惟高、法成寺の策彦を始め、鐵背・説山・虎哉・春國、大川寺の高僧・榮昌院の大益・杯を召集められ、詩會を催し給ひけり。板垣信形、縁に畏つて候ひけるが、進み出で、某も、一首仰付けられ候へかしとぞ望みける。晴信、打笑ひ給ひて、戰場に向つて、利を破り堅きを碎くの道、誰か汝を欺かん。今、信形が詩作を望むこそ心得ざれと、仰あれば、信形謹んで、さん候。能くは仕るまじく候へども、臣として君の好み給ふ事を、無下に嫌ひ退けぬる事は、勿體なく存ずる間、兼ねて心懸け候。是非に御免を蒙らんと、達て望みけるにぞ、則ち題を下し給ふ。板垣、暫く沈吟して押戴き、即席に一首を作り差上ぐる。晴信、不審に思食して、重ねて一首望み給ふ。畏つて又仕る。言下の妙句、玉を連ね詞の林に花開けて、諸人、あつと感動せり。晴信、猶も之を寔にし給はず。是は兼題なるを以て、兼ねて詩文に通達せる者に作らせて、晴信を欺くにやと宣へば、信形承り、左思召し候はゞ、別題を給つて、仕らんと申す。晴信、則ち三首の題を給ふ。板垣又、即席に仕る。此時晴信、大に驚き給ひて、信形、何國に

て、いつの間に、斯くの如く詩文を學び熟せるにやと尋ね給ふ。板垣承り、此二十日餘が間、稽古仕つて候と申す。晴信聞召し、汝、何故に今、詩文を學びたりや。さん候。身、不肖に候へども、信形、長臣の名を汚せり。君の好ませ給ふ道を知らずんば、争てか臣たるの禮ならんやと、謹んで平伏す。大膳大夫殿、甚だ怡悅あり、臣の道を以て、我を思ふ事、今、斯くの如くの式に及ぶ。其志、至れり盡せりと宣ひて、御氣色快然たり。板垣、又申しけるは、某が如き者、詩文に達し候はん事、何箇年をか經候はん。晴信、答へて宣はく、汝、此道に秀てん事、今より何の勞かあらん。好まば頓て達せんとありける。其時、板垣、涙をはら／＼と流し、居直つて申上げけるは、君、詩文を嗜ませ給ふ事も、思召止められ候へかし。御當家は、忝くも清和天皇の御苗孫新羅三郎殿より十九代に當らせ給ひ、武田の家の御總領として、當國の太守にて渡らせ給ふ。然れば、國中の四民、皆、君を以て父母の如くにす。君も亦、四民を以て、子の如くに撫育し給ひて、御政に私なく、當罰嚴重にましましてこそ、御父信虎朝臣を、廢去し給ひぬる理も可なり。今になりては、信虎君の惡逆は、

板垣信形  
晴信を諫む



物の數ならず、御跡、押領し給ひて、未だ三年に過ぎず、御心の好む所に任せ給うて、少しも御愼の御心なき故に、美女を以て、晝夜の友となされ、遊興にあたら月日を送り給ふ。今日の日又來らず。能々御遠慮あつて、軍旅を忘れ給ふべからず。適、僧を召すといへば、詩歌のみ、實の理學にあらず。唯、艶なる御心の赴く所に因つて、詩歌を好んじ給ふ。是等の道も、和漢の風俗にして、尤も國を治むるの端ともなるべけれど、差向ふ所に、御貪着あつて、自然の御遊は又可なり。累代舊功の臣等に、疎く渡らせ給へば、まして況んや、新參外様の輕士をや。斯かる御行跡にては、甲州一國を永く御治めあらん事、此信形に於ては知らず。唯、御心、晝夜醉へるが如し。漢王重色思傾國といへり。彼代の將たる人、何ぞ之を愼まざらん。大將の惡事は、其日を出でずして、千里を走る。君、色に迷ひ政事を忘れ、暗然として、御座す事、隣國に隠れなく、既に村上諫訪小笠原の人々、甲信の堺に砦を築き、去る閏六月、若御子臺が原邊迄相働き、武田家を滅し、其地を領せん事を巧む。然るに、兵部少輔、某兩人馳向ひ、防戦して追拂ふ。これ危き事に候はずや。斯く申す

信形、惡しと思召さるゝに於ては、御庭に引出され、速に首を刎ねらるべし。元より君に進上る所の一命、戰場にて死するも、今、諫言を申して死するも、心は同意なるべし。何卒御行跡を改められ候はゞ、假令泉下に罷在りとも、悅の色、是に過ぐべからずと、聲を揚げ、さめくと泣きければ、列座の人々も、理を感じ、皆、涙をぞ流しける。惟高策彦を始め、其座にあり合ふ出家・隱者の輩、折惡しとや思ひけん、皆拔出て退かれけり。晴信も伏目になつて、熟と聞き給ひ、御座を御立ありて、信形を閑所に召寄せられ、我れ若年にして、前後の辨なく、計らずも女色に耽り、今汝が諫、肺肝にこたへて恥しく、今更、臍を嚙むに益なく、千悔すと雖も返らず。汝、忠臣の道を守つて、一命を抛ち、我を諫舌す。これ氏神八幡大菩薩、御旗無楯も、未だ捨て給はず、正しく神説とこそ覺ゆれ。向後、前非を翻し、汝が忠言を守るべしと、暫く涙を流し給ひて、誓紙を書きて、信形に給はりければ、板垣、主君の心中を感じ、今の一言忝き上、誓紙に及ばれける事を思ひ、彌、涙にかき暗れてこそ退きけれ。斯くて晴信、朧女を京都に返し、其餘の女を、一人も残さず、己が故郷



に歸し遣され、忽ちに行事を改められけるこそ、又有難く聞えし。

信州海尻開城附一揆蜂起、長坂左衛門尉  
城中出奔の事

茲に、信濃國海尻の城と申すは、筑摩川の西、眞名頭まながしらの南にあり。更科の村上家より、藥師寺右近進・多治三太兵衛・小沼川舍人介、三人の者共に、山内喜田村氏房芳賀・須々井等を差添へ置きける所に、天文九年正月、大膳大夫晴信、八千餘人を率して、信州海尻に押寄せ給ふ。此時、板垣駿河守、計策を設け、城中に間者を入れ、今般たぐひ、晴信八千餘の軍勢を帥ゐて、當城を取圍む。附きては義清、隱なき勇將にてましませども、晴信、武略に秀てたるを以て、當城に楯籠られん事、努々思も寄らず候。其上、殘雪數丈に積り、山野一つになつて、往還の便を失ふ。義清、いかに思召すとも、後援の勢を出されん事、叶ふべからず。籠城の人々は、これ籠の中の鳥の如し。落城、只一戰の中に候べし。早々當城を開け渡されて、宜しからんとぞいは

晴信、信州海尻城を攻む

海尻開城

せける。藥師寺多治・小沼川を始め、寄合勢の淺ましき、衆議一決せずして、さしも鬼神の如き父信虎を、安々と追出したる晴信、自ら大勢の士卒を従へ、當城へ向はれたらば、とても味方の勝利あるべからず。又、義清君の後詰も、此大雪には叶ふべからず。早く開城すべしと、評議一決して、仰に隨ひ、當城を開け渡し候べし。然りと雖も、一戰に及ばず、安々と城を渡し候はん事、後難遁れ難し。此上は、明日、諸手一同に、當城へ攻寄せらるべし。一防ぎ仕る體を示し、開城仕り候べしとぞ返詞しける。此旨、信形、晴信へ言上す。大膳大夫殿、大に悦び給ひ、正月十六日の拂曉、八千餘人を以て、東北の二方を開き、西南の二方に押寄せ、鯨波を三度作る。城中、兼ねて契約の事なれば、少々、鐵炮を打懸け矢を射出して、支へ戦ふ體にもてなし、北の搦手より、悉く落去りけり。斯くて、藥師寺・多治・小沼川等、海尻の城を開け渡しければ、則ち城代を居らべしとて、板垣駿河守・飯富兵部少輔・小山田備中守、甘利備前守四人を召して、鬪を取らせらる。小山田、鬪に取中りければ、備中守を以て城代とし、本丸に居え置かれ、二の丸には、日向大和守昌時、三の郭には長坂左衛



門尉を、目付として差置き、甲府へ凱陣し給ひけり。斯かる所に、降參に出でける清野・井上・隅田・高梨等の地侍共、竊に葛尾に飛脚を立て、大將を一人差向けらるべし。海尻の城を取返し候べしと、註進しければ、義清悦び、藤島刑部を大將として、三百餘騎を差向けらる。清野・井上以下、是に氣を得て、士卒を駐集めて、八百餘人を以て、海尻の城を取圍む。三の郭に居たる長坂左衛門尉、元來、怯弱なる男なれば、大に怖れ、本城の小山田備中守、二の丸の日向大和守と會合し、味方一抓の勢を以て、多勢を引請け、當城にあらんこと、とても叶ひ難からんか。此上は、城を開渡し甲府へ退かんとぞ申しける。當時、出頭の長坂なれば、日向は否といふに及ばず、兎も角も、義の宜しきに隨ひ申さんといふ。小山田、聞きも敢へず、如何に敵、大勢なりといへども、一戦にも及ばず、何ぞ城を開けて落去すべき。旁は如何にもあれ。此小山田に於ては、身不肖なる某を、城代として、差置かるゝこと、莫大の君恩なれば、當城を以て枕とし、一命を限りに叶はぬまでも、討死を遂げんの外、他のことなしと、詞を放つて申しければ、されども長坂、臆病神に誘引せられて、頻に

城を退かんことを思ひ、様々に思案し、如何に小山田殿、矢猛に思召すとも、大勢の敵に取り卷かれ、後援の味方なくしては、終に落城せんこと、疑なし。左あらんに於ては、何ぞ其甲斐あらん。某、一方を切抜けて、甲府に歸り、君へ此旨を申上げ、後詰の御馬を出させ給ふやうに仕らんと、ひたすら、此議に傾さければ、小山田聞きて、さあらば、御邊一人にては危からん。日向殿も、少しの路次を送り給へとて、已に評議一決しければ、長坂・日向手勢組の士卒を従へ、搦手より忍び出て、甲州へぞ赴きける。日向大和守昌時は、海尻の城より海野口まで、其道一里が間、長坂を送り、夫より左衛門尉に引分れ、又取つて返し、海尻の方へと急ぎけるに、早や隣郷の一揆ども、方々より寄手の勢に馳せ加はり、雲霞の如くに群りて、海尻の城を取り卷さしかば、城中へ歸り入るべき方便盡きて、いやしく、我れ一手の小勢を以て、大勢の敵を打破らんこと、思ひも寄らず。却つて不覺を仕出さんと、夫より跡へ引き返し、海野口の城に入り、小宮山丹後守と一手になつて、大將晴信の出馬をぞ、相待ちける。



晴信、海尻後援附一揆敗北并長坂左衛門尉

## 勘氣を蒙る事

甲府より、兼ねて附置かれたる忍の者共、追々走せ歸つて、海尻近郷の一揆、大に蜂起し、城を攻動かす由、註進する事、唯、櫛の齒を引くが如し。晴信、之を聞き給ひて、何程の事かあるべきぞ。自身、後詰をして、一揆の奴原撫切にせんと、既に陣觸をぞせられける。然る所に、長坂左衛門尉、海尻の城より逃げ歸り、村上方多勢を以て、海尻の城を取圍み、城中難儀に及び候。急ぎ後詰の御勢を出され候へかし。此旨を告げ知らせ申さん爲に、敵の圍を切抜けて馳せ參じ候と、さも嚴しく言上す。晴信、聞きも敢へ給はず。大敵の圍を受けて、小山田が難儀に及ぶを見捨て、逃げ歸るこそ、言語道斷の働なれ。諸勢、跡より押來れとて、中村鹿毛と呼び給ふ秘藏の名馬に乗り給ひて、近習の人々、纔に三百計りにて、馳向はせ給ひしかば、諸勢、之を聞き傳へて、一騎駈にして駈け行きけり。海野口に着き給へば、小宮山丹後守・日向大

和守・大將を待ち受けて、悦ぶ事限なし。追々軍勢馳せ來つて、其勢七千餘人、是等を後陣に備へさせ、同じき正月廿九日の曉天、海尻に着陣あり。去る程に、小山田備中守は、我が一手の勢、纔に五十騎餘、海尻の城を持堅め、義を金石に守つて、晝夜三日が間防ぎ戦ふ。然るに晴信、其翌晦日の辰の刻、後援の軍勢七千餘人を引率し、旗本を以て先陣とし、據旗をうつぶけて列を正し、金鼓の節を守つて押寄せらる。寄手、急に後詰のあらん事を計らざれば、諸手、大に騒ぎ渡つて色めく所に、城中の小山田、龍の水を得たるが如く、城戸を開き、一同に噓と切つて出て、一舉に追崩さんとぞ揉んだりける。寄手は、元來、一揆の寄合勢なれば、前後の敵に途を失ひ、親を捨て主を顧みず、我れ先にと蜘蛛の子を散すが如く、四角八方へ逃げ行くを、備を解して少々、敵を追はしめ、其後、軍勢を引揚げられ、堅く備を催け給ふに、首を獲る事、一百九十三級、其日の午の刻、勝鬨を執行ひ給ふ。此度、小山田が忠義を、大に感悦し給ひ、感狀を給はりけり。是よりして、武田家の手に入る城々へは、必ず先づ小山田が移り居ずといふ事なし。斯くて近邊の邑里を、多く手に入れら



れ、仕置堅固に仰付けられ、同じき二月五日、甲府に歸陣ましましけり。扱も此度、長坂左衛門尉が事、怯弱至極の舉動なりと、甲府の諸人、爪弾をして笑ひければ、長坂も、流石恥しく思ひ、これ皆、日向大和守が臆病より出てたりと偽り欺く。大和守、之を洩れ聞きて、大に怒り、己がいひ甲斐なき舉動をして、今更、昌時に、詫げぬるこそ安からねと、兩人、大に之を争ひ、終に晴信の御前にて、雙方對決に及びけるに、長坂、己が怯弱を包み隠し、諸人を偽り欺きし事、一々に顯はれしかば、晴信、之を怒り給ひ、所領を沒收せられ、勘當を蒙りて、浪牢の身とぞなりにける。如何なる故にや、暫く左馬介殿の許に召置かれけり。

### 小荒間合戦の事

然る所に、薬師寺右近進・小沼川舍人助・藤島刑部を大將として、清野・井上・隅田・高梨・須々井・喜多村・堀内等相集つて、既に其勢、三千五百餘騎、同じき十八日、甲州に押寄せんとて、小荒間迄出張し、近郷の民屋を放火して、少々亂妨すと雖も、早晚いっしょより

り餘寒甚しく、未だ残雪深かりければ、自ら心の儘に、舉動ふるまふ事能はず。此事、甲府に聞えしかば、晴信、近臣を集めて評議ある時に、多田淡路守、進み出て申しけるは、村上家の軍勢共、去月海尻合戦に敗北し、面目なく存ずるが故に、義清の手前の申開きに、斯く足長に、深く働入りし者にてぞ候はん。又義清は、海尻あまに罷在り、小山田備中を能く押へんとて、中々、今明日の間には、小荒間迄は、よも押出し候べからず。敵の心を察し候に、春になりて、雪、冬より深く候へば、甲府勢も、軽々とは働かじ。其上、先月、海尻にて勝利を得ぬれば、諸士、敵を侮り、何程の事かあるべきと、軍議に日を送らんか。其間に、信州に引取り、放火したるを印にて、己等が恥を雪がんと、思ふにてぞ候ふらん。然らば明日は、敵早く引取り候べし。片時も早く、御馬を出され、夜合戦に仕懸けられ候はゞ、必定、味方の勝利にて候べしと、申しければ、晴信聞召し、汝が申す所理に中れり。此度も我れ旗本を以て先驅すべし。續けや者共と仰せられ、又彼の逸物の中村鹿毛に召され馳出し、在々の郷民等に觸れて、道筋の雪を搔かせ、一騎駈に馳せ向ひ給ふ。旗本勢と、甘利備前守一手と、漸



く其夜の戌の刻、小荒間に馳着きたり。村上方の軍勢共は、甲州勢、斯く即時に打出づべしとは、思ひも寄らず。素より慾心強盛の、一揆原の集なれば、武田勢は、定めて明後日の程にぞ、打出づるとも打出でんぞ。徳分を得て、妻子への土産にせよと、在々に走散して、民屋に押入りて、心の儘に亂妨す。さるに依つて、三千五百の軍勢なれども、陣中にある所、纔に千人にも足らざりけり。扱、刻限を尋ね給ふに、近習の者共、戌の刻と申す。時分大に能きぞ。押懸けよと、甘利備前守を以て、後陣となし、旗本を以て、先備とし、静々と押寄せらる。兩陣の間、一町計りに近づきて、関を嚙と作り懸けて、鐵炮を打入る。信州勢、思ひ寄らざる事なれば、大に狼狽へ、上を下へと騒動せり。中にも隅田彦次郎、究竟の者なりければ、介副の鎧を追取つて肩に懸け、馬に打乗り、馳廻つて静めけれども、一圓に陣中騒動止まず。鎧を着るに、其隙なかりければ、多くは素膚にて駆出でたり。晴信、頻に軍勢を勇め、采配を取つて下知し給へば、堀無手右衛門、今宵の一番鎗と名乗つて、鎗を入る。則ち敵を突倒し、首をも取らず、猶ほ深く働入る。是に續いて、士卒一同に突入れば、

村上勢敗軍

村上勢、一支にも及ばず、信州を指して敗北す。甲州勢は、備を亂し追詰め、何れも印を持參せり。討捕る首を數ふるに、雜兵共に百七十二級なり。然る所に、原加賀守、飯富兵部、淺利式部少輔以下の士大將、追々に馳付けしかども、手に合はざれば、各牙を嚙んで後悔す。原加賀守、大將に向ひ、鬪終ての千切木とやらんは、此戰に於て、我々が事にて候とて、手を打つて笑ひける。斯くて、段々の備を分ち、御馬を收れられける。多田が武功を以て、察する所當れりとして、大に感じ給ひけり。

## 晴信軍評議の事

去る程に、天文十一年正月元日、武田大膳大夫晴信、甲府の御館にして、諸士元旦の賀儀を受け給ふ。去年は、海尻、眞名頭の向ふ尾臺、岩村田邊にて、武田家の諸士、村上勢と少々足輕の迫合あり。又諏訪通り、臺が原筋に、蔦木・青柳などといふ所あり。此兩所に於て、番手の者共、頼茂方と、日々足輕を出し、迫合ふと雖も、隣國の敵方より、軍勢を差出さず。味方も敵地へ働かず、暫く休息してぞ居たりける。其



上、去年は、晴信の御二男龍寶君、誕生ありしかば、御悅限なし。觀世大藏を召され、御祝の御能仰付けられ、目出たき中に、年の緒のくるともなしに暮れにけり。然る所に、信州葛尾の村上義清は、去年、海尻の城を、甲州方へ攻取られ、其上、味方數度敗北に及びし事を、無念に思ひ、如何にもして、此恥辱を雪がんと思惟し、小笠原長時・諏訪頼茂・木曾義高等に牒じ合せ、甲州に攻入つて、塵にせんとぞ計られける。兼ねて信州へ入れ置かるゝ忍士しのびに、坂西市六といへる者、甲府に走り歸つて、此旨、板垣駿河守にぞ告げたりける。信形、此由を晴信へ言上す。即日にして、老臣等を集め、日々の軍議あり。時に板垣信形・飯富虎昌・原大隅・甘利・日向・諸角以下の功臣等、内談を以て、晴信へ申上げけるは、義清、去々年の鬱憤を散ぜんため、諏訪・小笠原の諸將を語らひ、當國に亂入し、武田家を無二無三に、攻滅さんとの結構にてぞ候はん。然れば、敵は多勢にて候べし。先づ海尻・海野口の兩城を明けられ、小山田備中・小宮山丹後兩人を召寄せられ、且つ又、駿河今川殿を、御頼あつて、義元朝臣の御出馬を、望ませ給ふか。然らずんば、一萬騎の加勢を御請ひなされ候て、

諸軍勢を、甲州の中に押しつぼめ、敵の働を御覽なされ候べし。諏訪・村上の軍勢共、二手に分れて、甲州の堺迄も押來り、輕々しくも働かず、備を堅め居るに於ては、左馬助殿に、板垣・甘利を差添へられ、務川口むかほぐちへ差向け給ひ、君は若御子口へ御馬を出され、待付けて一戰を遂げらるべし。若し又、敵は大勢を頼み、味方の微勢を侮り、甲府迄も攻入り候はゞ、思ふ儘に、敵を引入れ、雌雄を一戰に決せられて、然るべからんとぞ申しける。晴信聞き給ひ、方々の異見、一理なきにあらず。敵は信州勢、當國へ攻來るとも、地形を暗ずる事能はじ。味方の勢は、自國にて案内を能く知り。然るときは、敵は客戰なり、味方は主戰なり。これ主客の異同あり。既に諏訪頼茂・木曾義高・小笠原長時・村上義清の四將、去る天文七年より、當國に手を出すに付きて、數度戰に及んで追散し、予が手並の程を知る所なり。此度といへども、亦然ならんぞ。敵は我意地ましに、村上は諏訪が上に立たん事を思ひ、木曾は小笠原が下に屬せじと、心中互に威を争うて、軍議一決せず。これ味方の勝利の據所にし、多勢、却つて小勢の爲めに、敗るゝの想なり。又義元に、加勢のことは、決して



申遣すまじ。其故、如何となれば、さる天文七年、父信虎君を方便<sup>たばか</sup>り出し、今に至つて駿府にまします。これ義元、晴信が申せし事を、許容あつて、計略に一味せられし故と雖も、情、義元の心中を量るに、其身、大功を立てんと思ふ望あり。然れども、父信虎は舅といひ、剛強の大將なれば、今川家の幕下にせん事叶ひ難し。又義元は、予に二歳の年増といひ、姉婿なれば、晴信が密計に同心し、信虎朝臣を駿河に取留め、某に甲州を能く治めさせて、往々、幕下にせんとの巧みならんか。然るに今、駿州へ加勢を請はゞ、晴信、今川家の旗下に極るべし。さあるに於ては、晴信假令、天下一統の大功を立つると雖も、今川の幕下より出てたりと、天下の人にいはれんは、子孫迄の瑕瑾ならん。殊に信虎の傳へ聞き給ひても、いひ甲斐なく、思召さん事口惜し。此度に於ては、晴信に任すべしとて、近年、信州より召抱へ給ひたる出拔七十人の内より、究竟の忍の剛者三十人を選出し、妻子を人質に取り給ひて、板垣駿河守・甘利備前守・飯富兵部少輔三人に、右の人質十人宛預けられ、彼忍士三十人を御前に召出され、直に仰含められけるは、汝等十人は、村上が城に忍び入り、

十人は小笠原が方に紛れ入り、十人は諏訪勢に紛れ、随分と忍んで、敵の様子を見聞き、二人宛歸るべし。此方より又、士卒を半途に出し置くべし。其者共に、様子をいひ通し、汝等は又、敵方に歸り入りて、段々と其首尾を合すべし。又板垣・飯富・甘利三人の内より、身近う召使ふ侍を、二三騎宛、甲信の堺に出し置き、忍の者共の註進を受取り、早馬にて甲府に申來るべしとぞ定められける。然るに、御舍弟左馬助殿、宣ひけるは、先づ甲斐一國の軍勢を、悉く甲府に召集められ、扱御館の堀を廣げ、櫓少々搔揚げられ、城普請をなさるべし。然らば信州勢、之を傳へ聞き、武田方、小勢なるを以て、大敵を怖れ籠城の支度するぞと風聞して、うか／＼と押寄せべし。敵を半途に引出し、其不意を急に攻討ちなば、必定、味方の勝利にて候はんと申さる。晴信、悦喜し給ひ、御邊の諫面白し。これ敵を計るの上策ならんと、國中の人数を召集め、町人・百姓迄も課役を懸け、城普請あるべしと、披露あつて、内證にては諸士を集め、密々の軍評定様々なり。去る程に、信州には、村上義清・諏訪頼茂・木曾・小笠原の四將會評して、軍の商議ありけるは、此間、世人の風説を承



るに、今般、信州の四將、一國十二郡の勢を帥ゐ、甲州に亂入の由、味方、纔か一萬に足らぬ小勢にて、大敵に當り難し。其上、敵は若御子・垂崎二手に分つて、押寄するの由、味方、素より小勢なれば、二手に分たん事叶ひ難く、防ぐに術なかるべしとて、老臣等が諫によつて、晴信、甲府の居館の堀を廣め、櫓を上げ、矢狹間を開き、一向籠城の用意の外、他事なしと承る。然れば、此方へ軍勢を出さん事は、思も寄らず候。唯、晴信、我國に墻をするの心地なれば、此時、味方の大勢、墮と押入らば、甲州勢、途に迷ひ甲をぬぎて降參せん事、疑あるべからず。先づ甲信の堺迄押出し、其所に於て、二三日も逗留し、人馬の足を休め、諸手の備を定め分配し、若御子口、務川口より二手になりて、甲府に押寄せ、即時に攻潰して、晴信が首に對面せんと、斥候・間者の差別もなく、都合其勢一萬八千餘人、段々に押出して、甲信兩國の堺なる瀬澤に、陣をぞ取りにける。

### 甲信堺瀬澤合戰附原美濃守虎胤武勇の事

斯くて、信州の四將、甲信の堺瀬澤に陣を取つて、先づ爰に、三日滯留し、人馬の足を休め、若御子・務川より二手になつて、甲府に押寄せ攻干すべし。甲府は、籠城の用意すと聞ゆれば、定めて味方を引受けて、夜軍をぞ仕懸けんずると、夜戰の術を議り、衆議區々なる所に、七日の未の刻より、雨頻に降出し、暫く小止あつて、翌八日の夜半より、又大雨降りしかば、甲州勢、よもや寄すべしとは、思も寄らず、酒宴を催し、亂舞してぞ居たりける。時に、兼ねて信州に入れ置かれたる忍士の者、追追、敵の密計を通じける。晴信、此由を聞召し、元より七重の試、調りたる上なれども、板垣駿河守信形・飯富兵部少輔虎昌・甘利備前守・原大隅守・日向大和守・小山田彌三郎、足輕大將には、原美濃守虎胤・小幡織部正虎盛等を集め、敵、既に瀬澤表迄押出せる由、忍士の者の方より註進せり。尤も敵の謀略機術の儀は、前以て各が方へ申越す趣なり。信州勢、一兩日、人馬の足を休め、務川・若御子の方より、手を分けて押來らん。敵は一萬八千の着到と聞ゆれば、味方八千の軍士を、二手に分ちなば、是れ危き軍ならん。然れば敵の未だ手を分たず、油斷してあらん所を、此方より押寄



せ、其不意を撃つて、急に勝負を定むべし。義清・頼茂兩陣を攻崩さば、木曾・小笠原の兩將は、戦はずして敗走せんと覺ゆるぞ。附卒等追々に馳來れと、天文十一年三月八日の子の上刻、甲府を發向あつて、捫みに捫んで押し給ふ。漸々明るる九日辰の上刻、瀬澤表に馳着く。是より西の方、敵陣を見渡せば、北に當りて、八が嶽として、其峯、八つに分れ、さながら削りなせるが如き大山あり。其裾野、瀬澤の東、老俵おいたばらの原に陣を取つて、家々の旌旗、八が嶽風かぶかぜに吹き翻ひらかせ、白刃の光は、秋の霜の枯葉の蘆あしに置けるが如く、整々として備へたり。甲州勢は、之を見て、七段に備を立つる。先づ飯富兵部少輔虎昌・甘利備前を以て、左右の前備とし、次は大將晴信の本陣なり。板垣駿河守信形・小山田彌三郎信茂を以て、左右の翼の如くにして、脇備と定む。日向大和守昌時・淺利式部丞信音を後備となし、敵陣の前、瀬澤の後の廣き原へ押出し、鯨波を噴と揚ぐる。信州勢、之を見て、流石、名を得し村上・諏訪・小笠原等の良將等、陣中を静め、備を堅め機を催もよほけてぞ侍懸けたる。一番に飯富兵部少輔、采配を取つて、備を進め、諏訪勢に突懸り、東風あづまかぜ西風よしまかぜ戦ひしが、兩陣勞れて引退く。

信州勢襲撃の部署

瀬澤合戦

左の先手甘利備前守は、村上義清の旗本へ、無二無三に突懸る。素より義清、大剛の大將なれば、自ら眞先に進んで、下知し給ふは、敵は小勢なるぞ。引裏んで討取れ。薬師寺、布下者共はなきか。鎗を入れよと勇められ、士卒一同に進んで、甘利が備を攻撃たんと、箕手形みわたてになつて押出す。甘利勢、會釋あひらもなく、眞中を突破つて、火花を散らし攻戦ふ。旌旗、東西に靡き、南北に入り違へて兩陣、爰を引退かじと、必死になつて戦ひたり。分捕高名を顯はす中に、先備の陣將甘利備前守、自ら働き、首を得ること三級なり。其身も三箇所疵を蒙る。然りと雖も、我れ引取らば、味方の備、敗走せん事を慎み思ひければ、猶も其場を退かず、頻に軍士を勇むるに、四將の隨一、義清の多勢、命を風塵の如くにして、進み戦へば、甘利勢、既に敗北に及ばんと見ゆる所に、大將晴信、旗本を以て、横を用ひ、難なく義清の備を追崩さる。旗本、敗北に及ぶ上は、餘隊、恠へ兼ねて、一同に崩れて、右往左往に散亂す。此時、原美濃守虎胤は、敵中に駆入つて、萬卒に面を進むる所に、村上家の足輕大將、黨野原車之介と名乗つて、采配を手に懸け馳廻るを、能き敵餘さじといふ儘に、馬

原虎胤の武勇



を馳違へて引組んだり。互に聞ゆる勇士等、馬に離れて落重り、兩方、獅子の怒を顯し、暫く勝負を争ひけるが、難なく車之介を取つて押へ、首掻切つて馬の取附にぞ附けたりける。鎌田五郎左衛門も、是に劣らぬ高名して、則ち首を得たり。板垣駿河守は、小笠原黨と馳合せ、千變萬化して相戦ふに、雌雄、未だ決せざれば、戦勞れて相引にす。郡内の小山田彌三郎、士卒を勇め、自ら鎗を入れて、木曾義高の本陣に突懸り、馬煙を立て、追ひつ返しつ押んだりけるが、信茂、無雙の剛將にて、射れども突けども、事ともせず馳合せ、士卒を左右に従へて、義高の首に對面せんと、勇み懸つて切立つれば、木曾勢、小山田にまくり附けられて、若干討たれて引退く、飯富兵部少輔、士卒に息を續がせて、又、頼茂の旗本に突懸る。諏訪方は、多勢といひ頼茂、自ら手を下し、鎗を取つて戦はれければ、士卒、何かは猶豫ふべき。眞幕になつて相戦ふ。兵部少輔虎昌、敵四五騎が中に取籠められ、鎗疵四箇所被つて、既に危く見えし所に、舍弟飯富源四郎手の者、七八騎左右に立つて馳せ來り、諏訪方の者共を追散し、二人は此方に討取りたり。虎昌が勢、多く討たれ、既に崩れぬべく見

えしかば、又晴信、旗本を以て、左の方へ押廻し、横鎗になつて突入り給ふに、此時、諏訪勢、多く討たれ疵を蒙る者、數多あつて、勇氣を失ひて敗走に及ぶ。甲府勢、大に戦ひ勝つて、鬨を作りかけ、追討にして印を得る。一陣、既に破るゝ上は、殘黨、悉く崩立つて、西を指して引退く。今朝、辰の刻より未の刻迄、九度の戦に、敵を討つ事、一千六百廿一級、扱も原美濃守は、今日九度の戦に、首を得る事十一級、中にも黨野原車之介、横山監物、是等二人は、信州にて、采配を免されたる武略覺の者共なり。何れも再拜を添へて分捕し、比類なき譽なればとて、晴信、大に御感あつて、御感狀を下され、加祿を給はりける。其外、鎌田五郎左衛門等、夫々に上中下の品を別けられて、皆感狀をぞ下されける。其後、悦喜の色を逞しうして、甲府に凱陣し給ひけり。

### 平澤合戦の事

斯くて、村上家の士大將、薬師寺右近進清三、小沼川舍人助、布下平次入道知十軒等



大將義清に向つて申しけるは、扱も去月、瀬澤合戦に、味方、勝利を失ひし事、信州勢の怯弱にあらず。味方の不意を撃たれし故、陣中騒ぎ、漸々として武具を堅むると雖も、未だ朝の兵糧をもつかはず。まして備の手配もなく、諸卒、途を失ひ、戦ひ疲れ、敗走に及ぶ所なり。之を此儘に打捨て置かれ候ひなば、晴信、素より若大將といひ、心勇剛の人なれば、定めて當地へ働き入り、春は早苗を散らし、夏は麥作を振り、植田をこね、秋は毛薙などとして、思ふ儘に働くべし。然らば、當家の諸士困窮し、兵糧等缺乏に及びなば、大なる味方の障となり申さん。急ぎ君、發向ましまして、海尻・海野口の兩城に、差置きたる小山田備中・小宮山丹後二人の者共を攻殺し、會稽の恥を御雪ぎ候へかすと、申しければ、汝等が申す如く、去月九日、不慮の敗軍に及びし事、信州勢の恥辱なりといへども、我手に於て、討たる者、雜兵かけて纔に三百餘人なり。甲州方にも、飯富・甘利、痛手を負ひたる由、渠等は、晴信が家にては、第一の功臣なれば、強ち味方の大なる負けとも、いひ難し、何ぞや、小山田・小宮山などの小臣目に、義清が馬を出さん事、おとなげ長氣なきに似たり。汝等、甲

州へ攻入つて、去月の怨を報じ、敵の働を見計らひ、早馬を以て註進すべし。其時、義清、馬を發し、先づ海尻・海野口の兩城を攻落し、夫より甲州へ押入つて、年來の素懷を達すべしとて、先づ軍勢を差向けらる。隊將には、藥師寺右近進清三・布下平次入道知十軒・相木周防守・同じく犀右衛門尉・小沼川舍人助・清野六郎二郎、是等六人の者共、軍士二千五百餘騎を引率し、同じき閏三月十一日、信州更科郡葛尾の城をぞ打立ちける。斯くて、井上高梨等を以て、小宮山・小山田を押へさせ、甲州若御子迄押入つて、郡邑を侵し掠め、引返して、甲・信兩國の堺、猿橋の西の方、八が嶽の麓なる平澤に陣を取る。斯くとは知らず、武田大膳大夫晴信は、同じき十九日、惟高策彦以下の僧達を召され、詩會興行ありけるが、既に會終つて、諸僧も退かれ、晴信も、常の間に入らせ給ひし所に、村上勢、小宮山・小山田を押へ、甲・信の堺、平澤迄押來り候。近日、義清、馬を出され、海尻・海野口を攻落さんと、支度仕り候とぞ告げたりける。晴信、大に驚き、諸士を集めて、商議し給ひけるは、先月九日、諏訪・小笠原・木曾・村上の四將、一戦に敗北しながら、夫にも懲りず、又、勢を出しぬること



安からね。退いて思慮を廻らすに、先日合戦に、甘利備前・飯富兵部、手負ひたる由を聞き、武田の功臣、既に疵を蒙る上は、晴信、未だ若輩なれば、是に力を落し、氣を失ひ、抄々しき戦は、よもなるべからずと、義清、推量を以て、士卒を差向けたりと覺ゆるぞ。晴信、年若きを以て、軍事、皆老臣の計らひなりと、敵に取沙汰せらるゝならば、某が鋒弱り、小山田・小宮山も、攻殺されんは必定なり。然らば、去る天文七年より以來、今に至つて五年、信州の諸將を敵にし、數度戦を挑むと雖も、晴信が兵、終に敵に押付を見せたる事なし。然るに、敵今、左の如く計らば數年の功、皆空しからんか。予、苟くも新羅三郎義光より、既に十八代に相當り、先祖代々、弓箭の道に通達し、譽を顯はさずといふ事なし。然るに、晴信が時に當つて、家の瑕瑾に及ばん事、未代迄の恥辱なり。此度に於て、予が旗本を以て、萬死一生の戦を遂げ、武名を子孫に残すべし。若し戦ひ負けなば、戰場を枕にし、腹搔切つて、骸を軍門に曝さん事、何の煩か之あらん。御旗・無楯も照覽あれとて、無二の一戦にぞ極められける。武田の家の習にて、御旗・無楯を以て、誓言の上は、再び變改し給はぬ

事、累代の作法なれば、老臣等も、此上は留め參らするに及ばずとて、板垣駿河守信形・諸角豊後守昌清・日向大和守昌時三人に、鬪を取らしめらるゝに、昌時、鬪に取當つて、先鋒と定めらる。斯くて、晴信、頓て鎧を一縮し給ひ、例の中村鹿毛に、銀覆輪の鞍置かせ、紅の厚房懸けて乗り給ひ、其夜の亥の刻計りに、八幡宮に社參あつて、今般の軍、全く勝利を得せしめ給へと、種々の御祈請終つて、既に打立ち給はんとし給ふ所に、穴山左衛門大夫信行は、此頃、癩病に腦みて、身體苦痛し、合期せざりければ、先月九日の合戦にも、甲館の留守に残り給ひたるが、甲斐々々しくも、鎧取つて着、馬に打乗り、士卒を引連れ、大將の前に來り給ひ、此度に於ては、是非とも、信行先鋒を仕らんとぞ、望まれける志の程、神妙には存候へども、病中といひ、殊に甲府の留守居なくては叶ひ難し。貴殿は、予が叔父にてましますば、心易く存ずるなり。跡に残りましまして、若し晴信、討死を仕らば、幼少の太郎を守立て、武田家を繼がせて給はるべし。必ず留守に残り給へと、仰せければ、信行、重ねて仰にては候へども、先日、飯富・甘利手負ひ申す故を以て、甲府の留守に残り候。兩



武田勢の  
部署

人手勢をも多く持ちて候へば、究竟の留守居にて候。殊に郡内の小山田へも、飛脚を以て、唯今、告げ知らせ候へば、跡に御氣遣はあるまじく候。信行、とても死病に罹りたれば、下薦の諺にいふ、去懸いさかけの駄賃とやらん。諏訪、白山も照覽あれ。君の御身に替つて、信行、潔く討死を遂げ候はんと、金打きんちきうをなし給ひ、信行、先鋒に進まれければ、其夜の夜半より、甲府を打立ち、馬を蹴立てし、三十里打つて若御子に着さ給へば、夜はほのくくと明けにけり。爰にて、人馬の足を休め、備を七手に分け給ふ。先隊は穴山殿と定め給ふ。二陣は板垣駿河守、三陣は則ち旗本なり。左備は諸角豊後守昌清、右備は日向大和守昌時。後は左馬助信繁跡部大炊介勝資なり。斯くて、二十日の卯の中刻、若御子を打立ち給ひ、纔か一時の間に、十八里の道を打つて、巳の上刻、平澤に押付きたり。晴信、軍使を以て、先隊の信行備と、板垣備へ、軍の密意を仰遣さる。敵陣の旗先、夫どと見るや否や、穴山信行、関を作つて鐵炮を打たせ、無二無三に懸り給ふ。布下平治入道、老功の勇士なれば、士卒を下知して、備を堅固にし、鎗衾を作つて挑み合ふ。平治入道、自ら鎧を取つて、志の勇士は、

平澤合戦

穴山信行  
の奮戦

我に續け、尋常にして、此戦利あるべからず。向ふ度に、皆々味方利を失ふ。勝つても負けても、唯死ねや者共と、あたりを拂ひ馳廻るに、究竟の騎士二三十騎、平治入道を討たせじと、穴山勢を押隔て、鎗を合す。村上勢、大に競懸り、十文字に駆破り、巴の字に廻つて、萬卒に面を進め、一舉に死をぞ争ひける。穴山勢、今は怵へ兼ねて、覺えず後へ引退く。信行、病身なりと雖も、必死になつて軍勢を下知し、馬を少しも立直さず、采配を揚げて靡き、如何に汝等、武田の軍士として、群敵の陣に向ひ、今日迄、終に後を見せて、敗走の名を聞く事なし。勝つとも負くとも、千騎が一騎になるとても、仕場居しばみをさるべからず。我れ一足も引かじと、身を捫み、頻に下知をなし給へり。村上勢も、究竟の者共、薬師寺・相木一手になりて、穴山勢を、中に追取籠めて、火水になれとぞ揉んだりける。兼ねての相圖の事なりければ、晴信旗本の守る旗を、一振振り給ふや否や、板垣信形、備を南へ押出し、横鎧に撞と突入りて、蜘蛛十文字に駈亂す。村上勢、是に突立てられ、四角八方に敗北するを、甲府の總軍、備を解き、爰に押詰め彼所に突伏せて、敵を討取る事、三百十九級なり。

村上勢敗  
軍



信州勢、一度も返し合せず。猿橋の方へと逃ぐるもあり。従者は主に離れ、子は親を後にして、我先にと敗軍す。斯くて晴信、勝鬨を執行ひ、靜に首實檢し給ひける。今朝、巳の刻に軍始りて、午の刻の末に至つて、戦ひ散ず。晴信、微妙の計略を廻し、臨機應變の智謀を以て、小勢にして大勢に打勝ち、威を隣郷に振ひ給ふ。其夜は、平澤に陣營をなして、甲府に馬を入れ給ひける。寔に晴信、弱冠にして、飽く迄軍旅に賢く、向ひ給ふ所の城、抜かれずといふ事なく、戦に臨んで、勝ち給はずといふ事なし。此人の老長、いかならんと、皆人、感ぜぬはなかりけり。

武田三代軍記 卷之第四 終

武田三代軍記 卷之第五

高島・小城等城軍 附尾阿落城 并安國寺合戦の事

去る程に、大膳大夫晴信は、天文十一年閏三月二十日、平澤表に於て、村上家の士大將藥師寺・小沼川・相木布下以下の者共を、一戦に蒐散らし、平澤に陣を取り、暫く滞留し給ひけり。茲に、郡内の小山田左兵衛尉は、穴山金吾より、急を告げ知らされしかば、大に驚き、士卒百五十騎を従へ、早速、甲府に馳付きたり。時に甲府の留守に止りたる甘利備前・飯富兵部兩人、様々思案して、味方小勢なれば、平澤表の御軍、難儀ならんと覺えたり。あたら兵者を、此所に徒あだに置かんも無益なりとて、飯富・甘利兩人が組下の同心共を、三手に分ち、一手は甲府用心の爲めに殘し置き、一手は勝沼入道に相添へ、諏訪口の加勢として、差向けたり。殘る一手をば、小山



田が百五十騎と合せて相從へ、翌る廿一日の巳の刻に、平澤に着陣す。昨日の軍に打勝つて、士卒勇み合ふ所に、小山田、又馳付きしかば、彌々悦び勇むこと限なし。爰に於て、御舍弟信繁を始め、穴山信行、板垣信形等、大將の御前に出て、先月といひ、當月といひ、兩度の合戦、共に打勝ち候へば、敵は定めて氣を吞まれ、茫然として候べし。此競拔きばひかさずして、佐久・小縣の兩郡に亂入し、燒働致すべし。然らば、先君信虎の御時、降參せし信州の者共、信虎朝臣廢去の節、當家を危ぶみ、忽ちに心を變じ、皆己が城々に引籠り、運を兩端に見合せ罷有り候。此者共、悉く御味方に馳參るべしと申す。されども晴信、如何なる思慮かおはしましけん。曾て許容し給はず。其翌廿二日、凱陣すべしと宣ひければ、板垣、又進み出で、是より海尻迄、纔か十八里にて候へば、直に御馬を寄せられ、海尻・海野口等巡見なされ、塚目の仕置なども、仰付けられ然るべからんと、申しけれども、晴信、何とか思おもしけん。其も聞入れ給はず、思の外、機嫌宜しからず。廿二日に、陣拂あつて、翌廿三日、甲府に歸館あり。直に入幡宮に社參し給ひ、夫より御館に入り給ひける。斯くて兩月、士卒に休息せ

晴信、諷  
訪賴茂の  
居城を攻  
む

甲州勢尾  
阿城を陥  
る

さて、同じき六月四日、晴信又、七千五百餘人を引率し、信濃の諷訪郡へ押寄せ給ひ、民屋に火を放ち、在々所々を侵し掠めて、諷訪左馬之助が居城高島の城に押詰めらる。左馬之助、安からぬことに思ひ、士卒を引具し、討つて出づると雖も、甲州勢、殊に大勢なれば、一戦に打負けて、城中に引入るゝを、追懸け付入にせんと、大手の門際迄、押詰めたり。されども左馬之助、門を閉ぢ引橋を引いて、丈夫に相支へしかば、味方も勢を引揚げて、城下を放火し、翌日、諷訪賴茂の居城小城に押寄せ攻働かす。然るに賴茂、六日の夜より、背に癰瘡を生じて、身心腦亂す。門葉老臣等を始め、如何はせんと、周章てふためき、中々討つて出づる事は、思も寄らず。城を抜かれざるを以て面目にし、只茫然たる計りなり。武田勢は、競ひ懸つて堀際迄押詰め、守の小屋に火を懸けて、勝鬨を作つて引取りけり。扱又、板垣駿河守を以て、隊將として高木の此方、尾阿おの城に攻寄せ、忽ち城を乗取り、城兵二百餘人悉く首を切懸けさせ、城に火を懸け、一片の煙と燒立てけり。其外、高木・湯脇方々を攻掠め、桑原に要害を構へ、駿河守信形を籠め置かれ、同八月朔日、歸陣に赴き給



ひける。然る所に、伊奈の地侍に、興田彌市左衛門といふ者あり。數代諏訪家の幕下なりけるが、大將頼茂、難病を受けて、存命不定の折なるに依り、甲州勢の爲めに、領内を踏散らされ給ふぞ、安からねと、伊奈木曾松本邊の山家住の諸士を語らひ、山中の狩人野伏など、あらゆる溢者共の、鐵炮に鍛鍊したる奴原を呼出し、足輕に拵へ、一揆の黨を立て、都合三千七百人、板垣信形が籠りし桑原の城に押寄せ、急に城を、攻干さんと支度す。信形、驚き急ぎ、此事を甲府に告ぐるに、板垣が早馬三騎、九月廿三日の三更に及んで、甲館に至り、此旨を斯くと言上す。晴信、此急を聞き給ふや否や、近習の士計りにて、後援の爲めに駈出て給へば、軍勢共、驚き騒ぎ、取る物も取敢ず、我れ先にと馳向ふ。先づ藍河原に打出て、軍勢を待合せ、諸勢の身分をぞし給ひける。浪人組百五十騎を以て、三備に分つて先手とし、次に晴信の旗本なり。諸近習百二十騎、在郷近習三十騎、奥近習百三十騎、凡そ旗本の勢二百八十騎、之を三備に分けられたり。しまりの胸勢には、足輕大將物奉行、或は持鎗長柄の者、又究竟の若者共、二百人選び出し、是に野太刀を被<sup>か</sup>がせらる。其外、步若黨百二

安國寺合戦

十人、小人中間旗指等に至る迄、纔に三千餘人、晝夜の分けもなく、捫に捫んで押し給へば、廿五日の巳の刻に、桑原の弓手の方、宮川に着き給ふ。一揆原は、三千五百を三手に分け、安國寺に備へたり。甲州方浪人組百五十騎、関を作つて戦を始む。敵は、素より深山を馳廻つて、鹿熊などに馴れたる、弓鐵炮の手垂共なれば、炮弓<sup>すべ</sup>、都て化矢なく、甲州勢、多く疵を蒙りける。されども甲州勢、之を事ともせず、短兵急に進んで攻立てしかば、一揆等、打物に得ざれば、大に散亂して、左右の備を押し出し、引堅まつてぞ戦ひける。此時晴信、旗本を繰出して、横鎗に踵と突入り給ふ。一揆も、聞ゆる溢者の與力なれば、命を思はず、無法に強く相働けば、味方五伍の列を解き、態と亂れて相當り、巴の字に廻り、井の字に馳亂して、晴信、自ら相當り給へば、肩先に二箇所迄、矢疵を蒙り給ふ。斯かりける所に、一揆の逞兵、岸脇十八は、木曾の山中に育生<sup>そだ</sup>ちて、勇力無雙の兵なるが、五尺三寸の大太刀を、眞向に差かざし、向ふ者の鏝の鉢、左右の小手、堅割<sup>たてわけ</sup>、胸切、唯當るを幸に、無體になぐり立て、邊<sup>あたり</sup>を拂ひ、手下に數十人薙伏せたり。爰に晴信の二十人組の者、

歩行士なり。百二十人あるを以て、武田家に、二十人衆



ふいに、窪寺平次左衛門渡合せて、寔に能き敵、御參なれと、一文字に走せ寄り、鎧を以て相戦ふ。難なく岸脇が内甲へ、鎧を突入れけるに、十八、流るゝ血、眼に入れば働くに及ばず、太刀を杖に突き、差うつむく所を、敢なく突倒し、乘懸り首を搔落す。一揆も爰を先途と、喚き叫んで戦ひしかども、頼み切つたる岸脇は討たれぬ。元來、集り勢の淺ましきは、亂れて無法の備なれば、小返をせん様もなく、四角八方に敗走して、宮川に添うて逃げ行くを、追蒐けく討取りけり。午の上刻より、未の半に至る迄、二時餘の戦に、敵を討つ事、五百廿七級なり。晴信は、宮川原に備を立て、勝鬨を執行はる。今度、近習馬廻の者の内、粉骨を抽んでし内、分けて窪寺平治左衛門、岸脇を討ちし事、大なる働なればとて、感狀をぞ給はりける。後に、二十人頭を承りし相川甚五兵衛といひしは、此窪寺が一子なり。晴信は、夫より桑原の城に馬を寄せられ、歸陣に赴き給ひけり。

諏訪大明神靈夢の事

晴信、賞罰を正し、國政を改む

然るに大膳大夫晴信は、父信虎、暴惡甚しく、賞罰の正しからざる事を歎き、國中の政務、悉く改められ、今は民、以前の苦惱を忘れて、悦びあへる事限なし。譜代相傳の家の子をも、信虎、自ら誅伐を加へられしを、其筋目を尋ね抉つて、名跡を立てられなどし給ふ事、其臣としては、誠に有難き事にぞ覺えける、工藤下總守虎豊が嫡子、同じく長門守舍弟源左衛門尉、共に甲府を出奔し、東國に落魄せしを召還され、安堵の所領を給はり、又其外、沒收せられたる諸士の所領を改め、仔細を正して還補せらる。又去る天文七年より以來、忠戰を抽んでたる足輕陸若黨共の感狀を持ちたるに、少し宛の知行を與へ、騎馬の者になして、三百騎選び出さるゝ。其上、在郷に於て、新衆を附けて千二百人揃へられ、馬上二十騎・三十騎、歩卒五十・六十、諸手に差加へ給ひ、都合八千餘騎を引率し、信州に出陣あり。飯富兵部少輔・甘利備前守も、手疵平癒せしかば、是も御供を勤めけり。又、桑原の城へは、逸見・南部・勝沼入道・栗原左兵衛尉詮冬、日向大和守昌時、此五頭を以て入替らしめ、板垣駿河守は、御供を仰付けらるゝ。去る程に、十月七日、甲府を首途あつて、甲・信兩國の堺、葛窪に

晴信、信州に出陣



三日滯留ましまし、夫より湯川に至り給ひ、又爰に、兩日の逗留にて、同じき十二日、大門に着き給ひ、少々民屋を放火あつて、此所に三日滯留あり。同じき十五日には、長窪を放火し、民家を悉く追捕し給ひ、爰にも又、一日の逗留あつて、同じき十七日には、大門峠の此方に陣し給ふ。當所に七日の滯留にて、廿五日には、海尻の城に入り給ふべきにぞ定まりける。晴信、思慮ましくして、此度は、新衆を勇ましめんがため、亂取小屋落し等、心の儘に仕るべき旨の仰なれば、歩足輕・中間原・喜び勇む事斜ならず。在々所々に馳散つて、民屋を追捕し、雜具・金銀・衣服等剝取り、又は刈田をして、大分の徳付さたりと勇みけり。十九日・二十日、兩日亂取せしに、當所御滯留の間も、今四日ならではなし。然れば亂妨せんも、今三日計りなり。明日は未明より持ぎ廻つて、所得を得んとぞ伺りける。斯かる所に、一の先手の隊將甘利備前守、廿一日、未だ東雲も明けざるに、二の先に備へたる板垣信形が陣所に來り、未だ夜陰なりと雖も、俄に信州に、申談すべき事ありて、甘利參つて候とぞいはせける。彼者、急ぎ主人の寢所に入れば、信形は幄中に起上り、默然として座したり。

右の仔細を聞きて、急ぎ甘利を招き入れて對面す。備前守、座に着いて、某、唯今參る事、餘の儀にあらず。今宵、不思議の靈夢を蒙り候故、夜の明くるを待ち兼ねて、早速、先づ貴殿に談じ候はんと存ず。扱、斯くの知くなりといひ果てざるに、信形、某も唯今、不思議の夢想を見て、目の覺めて候故、其許の御陣所へ、使者を以て申すべきか。自身、參つて談ずべきかと、思案して罷在り候所に、是は奇特の事共かな。先づ甘利殿の夢物語を承らんといふ。備前守、聞いてさればとよ。聖賢の人、夢を用ひずとかや、諺にいへり。此度、仰を以て、諸手悉く亂取を仕る。然るに今宵、夢ともなく現ともなく、其形、凄じき山伏の眼、堅に切れて、赤鬚は、帶の邊迄も長く生延びたるが、五尺餘の刃刀を、十文字に帯びて、某が枕元に來り、我は是れ、當國諏訪法性上下大明神の神使なり。今般、下藪の亂妨狼藉を仕る事、大に非義なり。堅く停止仕るべしと、怒り告げて、忽ちに夢覺めたり。信形、手を拍つて、某が見たる夢も、其に少しも替らず。是れ不思議の事共なりと、靈告の正なる事あらたを感じて、二人語り居る所に、三の先に備へたる飯富兵部少輔、周章しく出來ると告ぐる。兩人



則ち對面す。虎昌曰く、少し以前、某、營中に於て、不思議の夢を見たるにより、覺るや否や、夜中、他陣を禁止せらるゝと雖も、法令を犯して、直に參上といふ。信形聞いて、甘利殿も唯今御出て候。是も同じく夢想を蒙られ候故、御來儀なり。信形も同じく夢を見候。先づ、兵部殿の御夢の次第を、承り候はんといふ。飯富、夢の有様を語るに、兩人又、横手を打つて大に感ず。三人の夢、分合毛頭の違なく、時刻又、符節を合せたるが如し。是れ諏訪大明神の御告なり。神明、能く當家を加護し給ふ事、寔に弓箭の大功を立てらるべき瑞想なりと、悦ぶ事限なし。斯くて、三人の陣將、垢離をして、諏訪法性上下大明神を遙拜し、三將の營中、速に觸をなし、亂妨を停止す。總軍、此事を傳聞いて、斯かる奇瑞を知らずして、不義を舉動ふるまはんは是非なし。之を聞捨にして、敵國を掠めば、必ず冥罰疑あるべからずと、諸軍、悉く亂妨を止めて、一人として出づる者なし。此靈夢の根元を尋ぬるに、去る二十日晴信の御前に、板垣信形を召し、竊に仰せらるゝは、我れ今度、新衆と號して、取立てたる者共を、勇ましめん其爲に、亂取を免す所に、下藹の好む所に従つて、未明に走

り去つて、漸く黄昏に歸る。今は相應に得物なき者は、あるべからずと覺えたり。然るに信州勢、よも打出でざる事はあるまじ。其時に至りて、諸卒亂妨の爲めに走散つて、何を以て敵に當らん。是は晴信が命を下すと雖も、忍びくゝに、人目を掠め、夜に紛れて出づるに於ては、制して誅伐するの外なし。誅を加ふる時は、法を犯す者、あるべからずと雖も、陣中にして人を誅する事、良將の心にあらず。唯願くは、亂妨を諸卒自ら相嗜みて、犯さざる計略やあると、暫く工夫御座して、此儀を仰出され、飯富・甘利、汝三人が、陣中を先づ禁ぜよ。諸手は其枝葉なれば、必ず制せずして止まんと、夢想の術を、悉く仰含められ、飯富・甘利に、此事を通じ、三人、心を合せて、斯く計らひけるとなり。晴信、今年廿二歳、若將と雖も、微妙の謀を以て、言はずして、諸軍の亂行を止め、忽ちに陣中嘩しからず。諸卒の心を、金石の如くになさしめ給ふ事、寔に神明の名將なり。

### 大門峠合戦附妓女御宿の督の事



晴信、兼ねて雅量ありしに、少しも違はず。村上義清・小笠原長時・佐久・小縣の諸士を催し、兩家の軍勢、都合一萬三千餘人、大門峠へ押來る。同じき廿三日、早朝に武田家の諸士共、敵の軍勢、峠へ相見え候と申す。其時晴信、小宮山内膳正・秋山十郎兵衛兩人を以て、物見に仰付けられける。二人打連れて馳行きしが、頓て歸りて申しけるは、小笠原村上、兩旗を以て懸り來り候。其勢、一萬餘と相見え、然も後に備へし三番手迄、軍を以て懸り候とぞ申しける。晴信聞召し、さあらば、味方の備を催けよとて、八が嶽の麓、甲州通り梶が原に、陣を取り諸勢の内、足輕隊將横田備中守・同息彦十郎、甘利が手へ加はつて、一の先に備はれば、二の身を甘利堅めたり。同じく多田淡路・嫡子新藏、是等父子は、板垣に加はつて、第二の備の先手なり。同じく安間三右衛門尉は、飯富兵部に加はつて、三の先手に備へさせ、虎昌、後を立堅む。本陣の前備は、士大將原加賀守昌俊、右備は原美濃守虎胤、小幡山城守虎盛、左陣は市川采女正一子三九郎・原與左衛門、同じく與九郎、後備は武者奉行加藤駿河守昌頼、多田治部右衛門・市川入道梅印なり。然る所に信州勢、大門峠を打越えて、村上家

## 大門峠合戦

の先手布下平治入道知十軒、其外、宗徒の者共、何れも奇正の列を正し、懸合の潮を相計つて、知十軒先づ備を進め、横田備中守が手先に押懸る。兩陣、鬨を合せて、炮弓の迫合を始め、鎗の穂先を揃へて、互に場をぞ争ひける。平治入道は、大剛の者なりければ、自ら鎗を追取つて、士卒を下知し、眞先に突いて懸る。甲州勢、平治入道が働に駈散らされ、一町計り引退く。之を安からず思ひて、二の身の甘利、押懸つて、勝誇つたる信州勢をまくり立つる。終に知十軒、勝負けて、峠の方へ引取るを、二三町追立て、備を亂さず引退く。次に、小笠原長時の先手鳴野山、多田淡路守と懸合せて、入亂れ戦ひしが、小笠原勢、一戦に戦負け、大勢、討たれて引退く。信州方の先鋒、兩度共に打負けしかば、大將義清、大に怒り、我が旗本を以て、勝敗を一戦に決せんと、競ひ懸つて押來る。安間が勢、請取つて、兩方、互に鎧を入れ、爰を必死に戦ひたり。信州方は多勢といひ、大將義清、一戦に敵を突崩さんと、競ひ懸つて進ませらる。安間が勢、戦負けて、四度路に崩れて、半町計り引退く。二の身に備へし飯富兵部、士卒を勇めて、村上勢に突懸る。大將小笠原右馬助長時、



采配を取つて、兵部が勢に馳合せ、追つ返しつ戦ひたり。其時、旗本の前に、備へたる原加賀守昌俊、横鎗に突入らんと、妻手の方へ備を押廻せば、大將晴信、自ら采配を取つて、旗本を以て、左の方へ押廻し、原加賀守が備と、左右より敵を中にして横鎗に踵と突入りて、巴の字に廻り、井の字に敵を突敗る。さしもの信州勢、晴信昌俊兩備の横鎗に、敗走して踵と崩れて散亂す。先手の二備を亂して、追留を限に印を揚げ、其首を數ふるに、帳面一千七百廿一級なり。味方、命を落す者、疵を蒙る者、雜兵合せて三百四十三人なり。今日の軍、巳の上刻に始まりて、午の中刻に終りしに、戰半より雨降りて、黒雲、戰場の上に棚引き、敵味方の旌旗見分かず。諸人不思議をなさずといふ事なし。然るに、軍の終るに隨ひ、風雨、忽ちに晴々たり。晴信、神武の名將なれば、微妙の諫を用ひて、此度も又、安々と敵を追退け、直に海尻迄、御馬を寄せられ、堺目の仕置等、沙汰ありて、數日、彼城に逗留ましくけり。信州の敵は、何れも剛強の將帥にて、其幕下に屬するの輩、風儀を似せて、怯弱の色なく、味方敗軍に及ぶと雖も、輒く城を開いて、逃げ去るなどの臆病の働、曾てなく、

信州勢敗軍

妓女御宿の督

猶も城を堅固に守つて、義を先んずる族なり。晴信、敵の心を察し、勝軍にならひて、敵を侮るは、良將の舉動にあらずとて、敵城の枝葉を攻められず。味方の陣を堅うして、萬法、怠を示し、深く慎んで居給ひける。茲に、信州佐久郡相木といへるは、海尻の城より、岩村田への道筋、甲州長澤より行けば、馬手の方の山邊なり。此所の城主をば、相木市兵衛尉と號す。去る天文九年より、甲府へ内通の仔細ありけるが、此度、味方に參るべき由の密約、既に相究り、大將晴信、十一月下旬、甲府に凱陣ありしかば、十二月十日、相木市兵衛尉、甲館に出仕して、御禮を申す。明年正月、舍弟甚四郎を人質に差越しけり。其頃又、信州岩村田に、御宿の督といへる妓女ありしが、極めて舞の上手なり。又、美しき女の二八計りなるを、己が弟子と號して、引連れ方々と徘徊し、酒宴の座敷に出て、舞諷ふを聞けば、扱も花の村上や、錦の直垂袴着して、來れども甲斐を好むは、御大事よと、聲面白く諷ひ舞ふ。されば、去る天文七年より以來、數度の戰、一度も晴信、敵に押付を見せ給はず。皆勝利なれば、賤しき女童迄、斯く風流に作りて諷ふ。然るに今年、越後の大守長尾爲景入道

大門時合戰附妓女御宿の督の事



道七は、越中に發向して、一揆の爲めに討死し給ふ。其子息猿松丸、十三歳になり給ひけるが、父の家督を續いて、六十六部の廻國の僧に伴ひ、今年、國を出でられる。

### 晴信、山本勘介を召抱へらるゝ事

去る程に、明くれば、天文十三年正月、武田大膳大夫晴信、廿四歳になり給ふ。然るに元日の御賀儀あり。三日には、板垣駿河守信形・飯富兵部少輔虎昌・甘利備前守以下の老臣を、召集め給ひ、當年中の軍の内試をぞし給ひける。中にも、信形進み出で申しけるは、信州佐久・小縣・諏訪郡の間、敵味方の堺に、城々を築き、大夫に持抱へ候事、專一に存じ候。然るに、砦を築かれんには、城取の習こそ、肝要に覺え候へ。千騎を以て守る城に、三百騎を入れて落ちざるは、全く繩張の利害に因る所なり。夫に付いて、三州牛窪の浪人に、山本勘介と申す者軍旅に長じ、城取・陣取の達人、孫吳の妙術を熟學して、劍術は行流の上手にて候由、是等の事を以て、朝夷奈兵衛大

夫を頼み、今川家の臣たらん事を、望み候へども、義元君を始め、近臣等評議致し候は、彼の山本と申す男、元來、小兵にて色黒く、眼、一眼にして趁蹠なり。斯程のかた離夫者にて、然も三州牛窪の小身より出で、一僕をも従へ得ざる男、何ぞ軍旅に通達せん。城取・陣取も、己一生に、一城をも預り持ちたらば、然ならんか。終に其儀を聞かず。一方の隊將をも承つて、一隊をも預らば、社營を作すの道をも知らぬ。曾て左様の者ならず。又、劍術も、新當流に増るはなし。此者、大なる虚言を吐きて、當家を方便たばからんとするなどと、悪名を蒙らしめて、當年に至つて既に九年、庵原安房守が方に、寄食して居候へども、誰あつて取上ぐる者もなく候。此者を、御家來に召抱へらるまじくやと申しける。晴信聞召され、扱は今川も、家運盡きて、武道、末になりたるよな。夫れ性は、道に因つて賢ければ、皆人、天性自然と發明して、脇より力を借るの謂いはれなし。大身の家より出で、猶ほ無藝の者多し。其儀を以て、論ずる時、結句、小身の家に、身を寄せたる志の勇士は、孤臣の思をなして、一度、大身の主に奉公し、身を立て、家を起さんと思ふなれば、藝能に通ぜる者、小家中の武士にある



べし。陣法權略、臨機應變の妙は、假令孫吳の書籍を、手に取らずといふとも、本性の明智を以て曉り、發明せんに、何ぞ至らずといふ事あらん。其故、如何となれば、古今の明醫、六脈を勘へ知つて、其病を治す。其醫師、種々の病をやんで、其人の病を治するにあらず、軍旅、亦然るなり。又、新當流を譽めて、行流を誹る。これ又兒童の舉動なり。兎角、其人の執行に因る所なり。今川家、武運、末になりて、諸事、不穿鑿の致す所なり。勘介が武名は、予兼ねて聞き及ぶ所なり。急ぎ召抱ふべしとて、板垣に命ぜられて、百貫の所領を給はるべしとの契約にて、既に此儀、極まりけり。其上、信形承つて、衣服・乗馬・弓鎗等、若黨小者に至る迄、半途迄差越し、勘介を迎へらる。山本、大に感悅して、美々しく出立ち、同三月上旬に、甲府に來つて板垣を以て言上し、御目見を仕る。晴信、仰せけるは、聞及びしよりも、猶ほ増れる骨柄なり。全體、不具の男にして、指をも切落されたと見えて不足し、其上、數箇所の手疵、旁、以て、今川家に用ひざるも理なり。斯かる有様にて、其名、四方に隠れなきは、武略秀でたるの故なり。人を探るに、貌を論ぜざるは、古人の心なり。既に、楠

正成は、其長五尺に足らず、色黒くして骨細く、容貌衆に勝れて醜し。又、武略神通せること、古今の諸將に冠として、殆んど敵の情を見る事、神聖の如し。勘介に於ては、百貫の祿、不足なりとて、即時に二百貫になし給ふ。斯くて、晴信の一字を給はつて、山本勘介晴幸と號け、足輕を預けられて、旗本の足輕大將にぞなし給ひける。勘介、面目を施して、御前を退出したりける。爰に、原加賀守昌俊、默然として居たりしが、進出でて申しけるは、唯今、召抱へられ候者、傍輩の儀、讒言申すに似て候へども、愚意の趣を申し上げざらんは、臣たるの道にあらず。抑、勘介、其身不具なるを以て、高祿を望まんには、如何様、才藝堪能の者ならんとの御賢察、其理あるに似て候へども、退いて短智を廻し候に、甚だ君の御龜忽かと存じ奉り候。されば今、天下の諸侯を始め、私如きの者は、猶更我慾を備へずといふこと候はず。是れ人情の常なり。勘介、一度も戰場に臨まずして、武略に通達するとは、今川家の評議、的中する所にして、皆、口才を以て祿を望むの謀か。又、敵の爲めに、疵を蒙りたるを以て、譽とせば、世に類多かるべし。百戰百勝して、疵を蒙らざるこそ、武勇



冥加の士ならん。其ことを試みずして、其理を推さん事は、更に遠慮にちらず。先づ一兩年も召仕はれて、彼が働をも、御覽あつて、御加恩をも下し賜はんは、然なり。されども、君の人を見給ふ事、神の如くに候へば、如何なる御遠慮もか候。承りたしと憚る所なく、我が武邊を、鼻に懸けたる様にぞ申しける。晴信、猶ほ笑<sup>あめ</sup>る顔にて、汝が不審、一々其理に中らずといふ事なし。我れ幼少より、父信虎君に疎まれ、良もすれば、諸士の面前にて、比興の汚名を受け、無念の鬱胸、止む事を得ず、惡逆の名を穢すといへども、一度、武家の棟梁となつて、天下を併呑せん事を、晝夜工夫し、大功を思立ちし事、未だ我れ代を採らざるの昔なりき。さるに依つて、小山田備中守と示合せ、十四歳の時、竊に三州牛窪に立越え、勘介と主従の契約をなし、夫より武者修行と號して、諸州を廻國させ、國々の風俗を聞き、要害は繪圖を調べさせて、我れ之を見るに、彼の者、地利に能く通達せしにより、恰も其地にして、其所を見るに等し。我れ諸國の地利を能く知る事、是れ勘介が功にあらずや。扱又、父信虎廢去の後は、彼の目付として、駿州に差置く。勘介程の者、實に今川家を望まば、九

箇年の間、茫然として、駿河に何ぞ滞留せん。今に於ては、我が勇名、隣郷に響き、今川家、恐るゝに足らず。板垣が勧めを幸にし、今、呼寄するものなり。當代にして、弓矢の知識ならんぞ。向後、晴信が師範なれば、汝等も水魚の交をなして、此上に、猶ほ軍學、懈怠すべからずと、宣ひければ、昌俊、あつと感じて、御前を退出したりける。

### 信州尾臺落城附廣瀨・曲淵等高名の事

茲に、眞田彈正忠幸隆、上野國箕輪に、落魄して居たりけるを、山本勘介が進めに就いて、晴信、招寄せ給ひ、本知を給はりしかば、幸隆、本意を達し、夫より無二の忠臣となれり。後に眞田入道一徳齋と號せしは、此人なり。去る程に、大膳大夫晴信、天文十三年霜月中旬、八千餘人を引率し、信州に出馬あつて、同じき下旬より、十二月中旬迄の内に、蘆田下野守を始めとして、小室・内山・岩尾・前山・依路・平原・望月等、武田家の武威に恐れ、間者の調略に、二心出來て、皆、降參をぞしたりける。茲に、



晴信、尾臺の城を攻む

笛吹峠の此方、輕井澤より平尾岩村田への通路、小室通の追分と、岩村田の中央に、尾臺の城と號するあり。城主尾臺又六郎・舎弟次郎左衛門尉、武田家に従はず。晴信、間者を以て、降參すべき由を、仰へ送らると雖も、曾て聞入れざりければ、此上は、隣國への見懲めの爲め、攻潰して塵にせんとて、極月十四日、板垣駿河守を、先鋒として押寄せ給ふ。之を見て、城主又六郎、士卒を従へ、討つて出づる。板垣が組下廣瀬郷左衛門・猪子才藏、眞先に鎗を入れ、敵一騎宛討取れば、三科傳右衛門も、鎗下に敵を討つて高名す。爰に又、曲淵小左衛門といふ者あり。元來、板垣が小者にて、鳥若と名付けて、草履を取りし者なりしが、數度、武功の譽ありしかば、晴信、召出し給ひて、直參になし、駿河守が同心にして召仕はれ、今日も又、鎗下の高名せり。甲州勢の鋒先に當り難く、城兵残らず引入りたり。信形、競懸つて、無二に乗落さんと押懸けしを、晴信、軍使を以て、明日は城を乗取るべし。早々、勢を引揚げよと、仰遣されければ、信形、人數を引揚げたり。廣瀬郷左衛門、信形に向つて申しけるは、某、能き馬を持たず候故、思ふ程に、働かれざるこそ口惜しけれ。今

朝、城主尾臺又六郎が、金の馬鎧かけて、乗りたるこそ、究竟の名馬と見て候へ。明日の城攻には、某、取つて乗り申さんといへば、曲淵小左衛門、側にて之を聞き、世に人もなげなる廣言かな。よし、御邊は馬を取れよ。此曲淵は、大將又六郎が首を、取らんずるぞと申しける。去る程に、明くれば十五日、是程の小城を攻取るに、晴信、總勢を以て攻むるに及ばず。板垣乗取つて、高名にせよとて、舎弟孫六郎信連に、工藤源左衛門尉昌豊・原隼人佐昌勝を相從はせ、其勢、五千餘人を、板垣に差添へらる。甲州勢は、勇み進んで、即時に城を乗取らんと、塀際迄攻寄すれば、城兵も敵を入立てじと、力を盡して戦うたり。されども寄手、事ともせず、難なく城戸を打破つて、城中に乗込んだり。又六が舎弟尾臺次郎左衛門尉は、二の曲輪に居たりけるが、今は何をか期すべきと、近習の心知り共を、左右に立て、眞幕になりて突いて出づるを、小幡虎盛が子に、孫次郎と名乗つて渡合せ、終に次郎左衛門を切伏せ、首を取つて立揚るを、尾臺が老臣上原市之介、主を目前に討たせ、一足も引かじと、切つて懸る。孫次郎、心得たりと、又、上原と切結ぶ。小幡、したゝか者なれ

小幡孫次郎の武功



ば、苦もなく、上原を討取り、主従の首に、次郎左衛門が采配を添へて分捕す。城兵二の曲輪を攻破られ、本丸に引入れば、寄手は透さず、本丸へ付入らんと嵩みければ、廣瀬郷左衛門曲淵小左衛門等、昨日、敵を毛付して、廣言の手筈を合せんと、一番に乗込みたり。甲州方に、諏訪越中守と名乗つて、近く敵を大身の鎧を以て、突伏せ叩伏せ、死生知らずに働さしが、持ちたる鎧を突折つて、下人に持たせし長柄を追取り、猶も敵中に馳入つて、四方に當り、四隅を拂つて、近づく者を、十七人、立所にして突倒せば、城兵、大に辟易して、敢て羽向ふ兵なし。時に岩津鐵右衛門と名乗つて、馳向ふを押並べ、無手と組んで取つて伏せ、物々しや、首搔かんも、穢しと聲かけて、首、ふつと捻切り、弓手に引提げて、晴信の見參に入れたりしかば、是れ人間の業ならず、唯、鬼神の舉動なりと、諸人畏れて感じける。城將又六郎、馳廻り下知を加へけるが、敵、群舉懸つて、今は斯うよと見えしかば、涼しく最期の戦して、腹切らんには如かじと、馬よりゆらりと飛んで下り、俊兵を左右に従へ、如何に甲州の兵等、我れ身不肖なりと雖も、正しく當城の主將なり。今、不運にして、晴

諏訪越中  
守の武勇廣瀬郷左  
衛門の武  
功

信の爲めに滅亡す。義を曲げて降參せば、永く當城の主たらん事を、免すと雖も、夫は武將の道にあらず。義に死せるの命は、永く萬代の後に、名譽の壽を傳へ、不義に永ふるの汚名は、千載を経るとも、恥辱雪ぐに所なからん。今客等、一舉に攻入つて、既に落去の期に及ぶ。最期の軍をする事、身に懸る火を拂ふに似て、甚だ見苦しからん。然はあれど、安々と首を授けんも、我が心にあらず。我と思はん者は、馳寄せよ。敵に採りて、不足あるべからずと、十文字の鎧の、其長、一丈に餘ると見ゆるを、片手に採つて振廻し、向ふ者を、幸に突捨にこそ働さけれ。近習の逞兵、鞆を傾け、大將の扶翼となつて、義を金石の堅さに比し、命を死地の方寸に谷つて、秘術を盡し捫合ひしかば、甲州勢、多く討たれ、疵を蒙る者、猶ほ餘多なり。廣瀬郷左衛門は、何卒又六を討つて、馬を乗取り、信形に見せんと、爰彼所に相當りけるが、彼の乗捨てたる馬を見付けて、天の與なりと、悦んで馳寄せ、中間を叩伏せて、其儘、身輕に打乗り、又六郎を目に懸けて、駈倒さんとぞ進みける。曲淵小左衛門、此形勢を見るより、一文字に走り寄つて、大將か御參なれ。昨日より預置さし首



なれば、人手には渡さじと、競ひ懸つて突懸る。又六郎も、心得たりとて、發しと鎗を打合せ、まいつ卷かれつ突合ひしは、汐らしくこそ見えたりけれ。又六郎、手疵を多く蒙りければ、突鎗重く見えし所に、曲淵透さず、内甲を狙ひて、鐵壁も通れと打込んだり。忍の緒を突切らせて、眉庇額に落懸るを、小左衛門、續けざまに、二鎗三鎗思ふ様にぞ舉動ひける。又六郎、眼暗んで、立悚たちずくみになる所を、其儘、首を得たりける。城兵、之を見るよりも、さらば泉下の先陣して、大將に追越さんと、敵の中に馳入つて、枕を並べ死にたりける。斯くて、首を實檢し給ふに、雜兵合せて五百餘級、晴信、悦喜淺からず。此度、手に入る所の山内の城には、飯富兵部少輔、小室には、小山田備中守を移らせ、岩尾の城には、村上勢の押として、真田彈正忠幸隆を籠め置かれ、甲府に歸陣し給ひけり。是れ皆、山本勘介晴幸が、肺肝の中より出でたる勝利とぞ聞えける。

尾臺の城  
陥る

武田・諏訪兩家和睦附頼茂誅戮并普文寺合戰

諏訪祝部最期の事

去る程に、天文十四年正月、舊冬より甲州家に、申入る、仔細あつて、信州室賀入道丸子三右衛門尉・矢澤・根津・武石・小泉等降參して、武田家の幕下にぞなりにける。斯くて晴信、山本勘介と密談あつて、同じき二月十日、信州諏訪へ發向あり。老臣板垣駿河守が計略を以て、舍弟左馬助信繁を引入れ參らせ、已に頼茂の居館小城を、攻落さんとぞ議せられける。信州の諸士、多く武田家に従ひしかば、頼茂も如何はせんと、心苦しく思はれけるに、武田家より使者を以て、頼茂の御事は、晴信が爲めに、正しく叔母婿にて座せば、近き一家にて候へども、父信虎と矛盾むご發り、和平なき内に、晴信、武田家を續ぎ候を以て、止む事を得ず、合戰を挑むに候。身に探つてさせる遺恨も候はぬに、士卒を苦しむる事、大將の本意ならず。今日より和平をなして、交を深く仕らんと、いひ送り給ひければ、頼茂、喜び早速許諾し、和議相調り

晴信、諏訪頼茂と和陸



て、所領の堺は、葛木を限つて領すべしと、契約を相究め、同じき三月、晴信は甲州に歸陣し給ひける。斯くて頼茂、甲館に來り、御禮を述べられしかば、晴信も悦喜し給ひ、種々饗應あつて歸されけり。之より頼茂、心解けて甲府に出仕せらるゝ事、既に三度に及びける所に、晴信、頼茂に心を免させ、勘介に密談あつて、三度目に及びける時、頼茂饗應の爲めとて、大藏大夫に仰せて、能を興行せらる。已に能、半にして、颯聲に心を澄まし、頼茂、餘念なく見ゆる所を、中間頭荻原彌右衛門尉に命じて、時分を窺ひ、飛懸つて主君の命なるぞと、言葉を懸け眞向に切付くる。流石の頼茂なれば、心得たりと脇差を抜いて、荻原を突通さんとし給ふを、二の太刀にて切伏せ、終に心本を刺通しけり。是によりて、諏訪家譜代の諸士、大に憤り、諏訪の祝部を大將として、武田家を攻滅し、此鬱憤を散ぜんぞと犇さける。晴信、此事を聞き給ひ、何事かあらん、急ぎ誅伐すべしとて、舍弟典厩信繁に、板垣駿河守信形・日向大和守昌時を相副へて、信州に差向けらる。左馬助信繁、三千七百餘人を引率し、板垣信形を先鋒とし、日向大和守を後陣として、天文十四年正月十九日、甲府を立

## 普文寺合戦

つて、信州諏訪に赴かれける。祝部、之を聞いて、敵を城下に入立て、は、叶ふまじと、中途に出張して、三千餘人を相従へ、尾河湯脇上の諏訪を打越えて、普文寺に働さける。甲州勢も、桑原を打過ぎ、宮川安國寺村を弓手に見、細窪をも打越えて、普文寺に押懸る。板垣が先手の勢、関を作りかけ、鐵炮を始めて攻懸る。諏訪勢も、一戦に切崩さんと、互に鎧を入るゝ程こそあれ。兩陣入亂れ、或は圍みつ圍まれつ、爰を先途と戦ひたり。戦既に半なるに、板垣信形、備を弓手へ押廻し、嘩と喚いて突入り、切立て、相戦ふ。時分を見合せ、大將左馬助信繁、懸れ、と下知して、備を押し出し、急の太鼓を打たせられけるに、敵、辟易して後陣より崩れ立ち、諸勢一同に敗北するを、遁さじと追蒐つて、高島の宿城まで付入れば、晴信勢、城へ引入る事叶はず、士卒、そゞろに湯脇を押廻つて敗北す。爰に、長坂左衛門尉は、一年海尻の城に於て、怯弱の舉動をなし、晴信の勘氣を蒙り、左馬助殿の情を以て、掛人となりてありけるに、今一度、歸參せん事を、願ひ居たりけるが、此度の戦、晴信、出馬なき事を、幸と悦び、信形が先備を借つて、働さしかども、さまでの高名もなく、哀れ